

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Zenkoku Hougendanwa Database [Japanese Dialect Database] : Volume 17 Ehime and Koti

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Institute for Japanese Language メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002257

全国方言談話データベース

日本のふるさとことば集成

第17巻 愛媛・高知

国立国語研究所資料集 13-17

国立国語研究所

2003

国書刊行会

監 事 室 備 付

刊行のことば

昭和52年度から昭和60年度にかけて、「各地方言収集緊急調査」という全国規模での方言談話の収録事業が、文化庁によって実施されました。調査は、各都道府県教育委員会と連携のうえ、各地の方言研究者が全面的に協力して行われました。国立国語研究所は、文化庁の要請により、この調査の計画段階から、指導・助言などにかかわっていました。その後、時を経て、この調査によって収録された膨大な録音テープと文字化原稿は、文化庁から国立国語研究所に移管されました。

これらの資料は、方言の使用実態を解明する貴重なデータであるとともに、急速に失われつつある各地の伝統的方言を、文化財として記録・保存するという意味においても意義のあるものです。そこで、国立国語研究所では、受け継いだ資料を有効に利用するために、方言談話の大規模なデータベースを作成し、公開するという計画を開始しました。平成8～12年度には「方言録音文字化資料に関する研究」で、平成13年度からは「日本語情報資源の形成と共有のための基盤形成」の一環として、全国方言談話データベースの作成と公開に取り組んできました。また、データベース化にあたっては、平成9年度から科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受けています。従来にはあまりなかった、音声と文字化の電子化データを備えていますので、研究や教育に活用いただけることと思います。なお、本資料集の作成については、情報資料部門第一領域の井上文子が担当しました。

「各地方言収集緊急調査」の録音・文字化にあたっては、全国の研究者の方々が献身的に御尽力くださいました。話者として、多くのみなさまから御協力を得ました。また、各都道府県教育委員会の関係者、および、有志の御助力がありました。刊行にあたって、記して深く感謝の意を表します。

平成15年9月

国立国語研究所長 甲斐睦朗

利用にあたって

1. 内容

この書籍（冊子，CD-ROM，CD）には，以下のものを収録しています。

	冊子	CD-ROM	CD
刊行のことば	○	○	
利用にあたって	○	○	
目次	○	○	

愛媛県松山市1981

地図	○	○	
話者・担当者	○	○	
解説	○	○	
凡例	○	○	
談話	○	○	
【狸，内職，風鎮祭】			
文字化・共通語訳	○		
文字化・共通語訳 pdf＋方言音声 wave（ページ単位）		○	
文字化・共通語訳検索 FileMaker		○	
文字化 text（談話全体）		○	
共通語訳 text（談話全体）		○	
方言音声（談話全体）			○
注記	○	○	

高知県高知市1977

地図	○	○	
話者・担当者	○	○	
解説	○	○	
凡例	○	○	
談話	○	○	

【昔の仕事】			
文字化・共通語訳	○		
文字化・共通語訳 pdf+方言音声 wave（ページ単位）		○	
文字化・共通語訳検索 FileMaker		○	
文字化 text（談話全体）		○	
共通語訳 text（談話全体）		○	
方言音声（談話全体）			○
注記	○	○	

作成・公開の経緯

「各地方言収集緊急調査」について	○		
「各地方言収集緊急調査」地点一覧	○		
「各地方言収集緊急調査」地点地図	○		
各地方言収集緊急調査補助全体計画	○		
各地方言収集緊急調査費国庫補助要項	○		
各地方言収集緊急調査実施要領	○		
各地方言収集緊急調査の実施について	○		
調査実施上の留意事項について	○		
「全国方言談話データベース」について	○		

Adobe Acrobat Reader		○	
----------------------	--	---	--

音声データ仕様：サンプリング周波数22.050kHz，量子化ビット数16bit，
waveファイル，ステレオ

CD-ROM は，CD プレイヤーで再生しないでください。CD プレイヤーが壊れることがあります。

本データベース編集にあたっては，個人のプライバシー等に配慮しました。

談話データの中には，現在では，その使用が好ましくないとされるような表現が含まれている場合もあり得ますが，学術的・歴史的資料の保存という観点から，そのまま収録しました。この点にご配慮のうえ，お使いください。

2. 著作権

この冊子、CD-ROM、CD に収録されているデータの著作権は、国立国語研究所にあります。

3. 利用条件

利用にあたっては、以下の利用条件をすべて守ってください。

- (1) 国立国語研究所の著作権を侵害するような行為はしないでください。
- (2) この冊子、CD-ROM、CD に収録されているデータは、どのような目的においても、また、どのような媒体（紙、電子メディア、インターネットを含む）によっても、他人に再配布しないでください。
- (3) この冊子、CD-ROM、CD に収録されているデータは、非営利の教育・研究目的に限り、自由に利用できます。ただし、上記（2）は守ってください。
- (4) この冊子、CD-ROM、CD に収録されているデータを利用した成果物を公表する場合は、
「国立国語研究所が作成した『全国方言談話データベース』を利用した。」
などのように、明記してください。
あわせて、成果物を国立国語研究所にご寄贈いただければさいわいです。
- (5) 以上の利用条件に合致しない場合、あるいは、利用について不明な点がある場合は、国立国語研究所に問い合わせてください。

連絡先：〒115-8620

東京都北区西が丘3-9-14

国立国語研究所 情報資料部門

「全国方言談話データベース」係

FAX：03-3906-3530

4. 付記

データの電子化、CD-ROM、CD の作成については、平成9(1997)～15(2003)年度科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受けています。

国立国語研究所資料集 13-17

全国方言談話データベース
日本のふるさとことば集成
第17巻 愛媛・高知

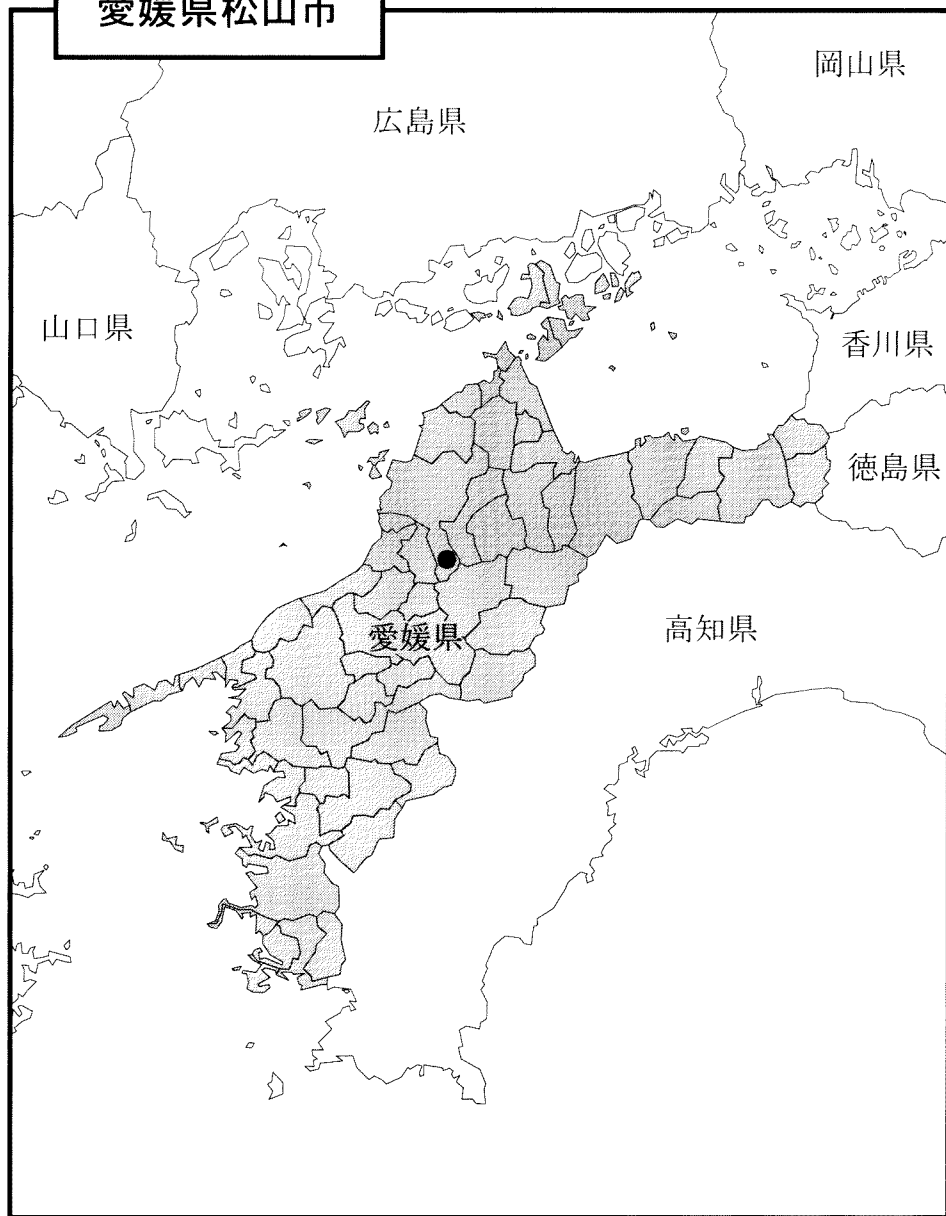
目次

刊行のことば	3
利用にあたって	5
 I. 愛媛県松山市1981	 11
地図	12
話者・担当者	13
解説	14
凡例	20
談話	25
【狸，内職，風鎮祭】	26
注記	121
 II. 高知県高知市1977	 127
地図	128
話者・担当者	129
解説	130
凡例	135
談話	140
【昔の仕事】	141
注記	250
 作成・公開の経緯	 257
「各地方言収集緊急調査」について	259
「各地方言収集緊急調査」地点一覧	263

「各地方言収集緊急調査」地点地図	268
各地方言収集緊急調査補助全体計画	269
各地方言収集緊急調査費国庫補助要項	270
各地方言収集緊急調査実施要領	271
各地方言収集緊急調査の実施について	274
調査実施上の留意事項について	276
「全国方言談話データベース」について	282

**I . 愛媛県松山市
1981**

愛媛県松山市



愛媛県松山市1981話者・担当者

「各地方言収集緊急調査」

話者	谷口 正信
	西崎 サカエ
司会者	八束 清子
収録担当者	吉田 裕久
文字化担当者	吉田 裕久
共通語訳担当者	吉田 裕久
解説担当者	吉田 裕久

(敬称略 項目別50音順)

「全国方言談話データベース」

編集担当者	佐藤 亮一
	江川 清
	田原 広史
	井上 文子
編集協力者	大北 美佐
	鳥谷 善史
	熊谷 康雄

愛媛県松山市1981解説

収録地点名 愛媛県松山市久谷町奥久谷^{く たに まち おく く たに}

収録地点の概観

位置

松山市は、愛媛県のほぼ中央にあり、久谷町は松山市の南東部に位置する。奥久谷は、松山市の中心部から約15kmの地点である。

交通

伊予鉄道松山市駅よりバスで約50分。南部を通る国道33号線が高知県に通じている。

地勢

久谷町は、東、西、南の三方を山に囲まれ、面積の約7割が山地で、石鎚山系の支脈の一端を占める。南高北低となり、北部低地は約3割で、道後平野に連なっている。久谷町の中央には南北の方向に谷間があり、ここに集落が形成されている。

久谷町は、南境にある三坂峠（標高約700m）を越えて、上浮穴郡久万盆地^{かみうけな く ま}を経て土佐に通じる幹線道路沿いの地域で、古来四国遍路の往来もあり賑わった。

行政区画

1956(昭和31)年、荏原村と坂本村とが合併して久谷村が誕生し、さらに1968(昭和43)年10月25日、松山市に編入された。

戸数・人口

1981(昭和56)年7月現在、久谷町の世帯数233戸、人口883人。人口は、減少の傾向にある。

産業

生業の第一は農業であり、主たる農産物は米である。また農家の副業として、かつては養蚕、炭焼きなどが盛んであったが、現在では果樹栽培に移行し、温州みかんを中心に、梨、柿、桃などが生産されている。

収録地点の方言の特色

方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

愛媛県の方言は、東中予方言、南予方言、瀬戸内海島嶼方言に大きく三分される。東中予方言は、さらに東予方言と中予方言とに分かれる。南予方言は高知県西南部の方言と共通のものであり、対岸の九州東部の方言にも類似するものである。瀬戸内海島嶼方言は、四国本土沿いの2、3の島々を除いた島嶼部の方言で、中国方言と同一系統のものである。

松山市久谷町は、東中予方言のうち、中予方言に属している。

音韻

- (1) 「クッ」の音が聞かれる。

クッイ (会)

クッシ (菓子)

クッジ (火事)

セキユクッン (石油缶)

ヨンクッンビョー (四貫俵)

- (2) 「クッ」ほどには顕著ではないが、「グッ」の音が聞かれる。

ロクグッツ (6月)

クグッツ (9月)

- (3) 「セ」が「シェ」となる。

ミシェ (店)

シンシェキ (親戚)

シェーカツ (生活)

シェンタク (洗濯)

シェンエン (千円)

タイシェツ (大切)

アリマシェン (ありません)

- (4) 「ゼ」が「ジェ」となる。

オジェン (お膳)

ジェンブ (全部)

ジェンジェン (全然)

(5) 子音の交替が見られる。

- [s] → [h] ホレカラ (それから)
 ホシテ (そして)
 ホレト (それと)
 タリヤヘン (足りはせん＝足りはしない)
- [ʃ] → [ç] ヒヨッタラ (していたら)
- [m] → [b] セバイ (狭い)
 ケブリ (煙)
- [d] → [n] テツノーテ (手伝って)
- [b] → [p] カンパツ (干ばつ)
- [z] → [d] デニ (銭)

(6) 母音の交替が見られる。

- [i] → [e] アマゴエ (雨乞い)
 ハメ (はみ [=マムシ])
 ヒノケノミ (ヒノキの実)
 オーケナ (大きな)
 デケル (できる)
- [e] → [i] ソレダキ (それだけ)
 ホヤキン (ほやけん [=そうだから])
- [u] → [i] シテル (捨てる)
- [a] → [o] イロウ (いらう＝触れる)
 ヒロゴル (広がる)
- [u] → [o] ヤト (やつ)
 タノキ (狸)

(7) 濁音化が見られる。

- カンダン (簡単)
- オゴッタ (怒った)
- ヨーザンシツ (養蚕室)

(8) 1 音節名詞の長音化がきわめて頻繁である。

- テーガ (手が)

ワーガ（我が）

カーガ（蚊が）

ターデモ（田でも）

- (9) 格助詞「を」は省略されることが多いが、直前の語の末尾が長音化したり、直前の語の末尾がイ段で終わるものは拗長音化したりして、「を」の代わりをする場合もある。

ハナー（花を）

ツユー（露を）

コメー（米を）

イトー（糸を）

ヒュー（火を）

トリュー（鳥を）

また、「を」の発音は通常 [o] であるが、直前で一呼吸置いたり、強調しようとしたりすると、[wo] となることが多い。

- (10) 場所・方向を示す格助詞「へ」は、省略されることが多いが、「イ」が使われる時もある。また、直前の語の末尾が長音化して「へ」の代わりをする場合もある。

トベーイク（砥部〈地名〉へ行く）

ミズイ（水へ）

トベー（砥部〈地名〉へ）

ナカー（中へ）

- (11) ウ音便化した部分の短音化が目立つ。

オモータ → オモタ（思った）

- (12) 「行った」は「イタ」、「行ったら」は「イタラ」となる。

文法

- (1) 「オ＋動詞連用形＋ル」の形をとる「オ～ル」敬語法が盛んである。過去の場合は、「オ＋動詞連用形＋タ」となる。

オイキル（行かれる）

オノリル（乗られる）

オイキタ（行かれた）

オシニタ (死なれた)

- (2) やわらかい命令表現に「オ～ナ」がある。

オイキナ (行きなさい) 〈アクセントは「オイキナ」〉

- (3) 禁止表現としては、やわらかい禁止の「オ～ナ」もあるが、「レン」が一般的である。また、「～シテワ イカン」という形も使われることがある。

オイキナ (行きなさんな) 〈アクセントは「オイキナ」〉

オシナ (しなさんな) 〈アクセントは「オシナ」〉

ソコ ウゴカレンゾヤ (そこ [を] 動いてはいけないよ)

ミズヤナンカ ヤラレン (水など [を] やってはいけない)

タベラレンノジャ (食べてはいけないのだ)

- (4) 進行態は「～ヨル」、結果態は「～トル」で表現する。

シモエ ムケテ イキヨル (下へ向かって行っている)

ターノ ミズ ミヨル (田んぼの水 [のぐあいを] 見ている)

アメガ フットル ([今は降っていないが、地面の濡れぐあいから]
雨が降っている)

- (5) 不可能を表す場合、「エー ～セン」、「ヨー ～セン」が使われる。

エー ヨマン (読めない、読むことができない)

ヨー ヨマン (読めない、読むことができない)

- (6) 文末詞としては、「ナ」、「ナー」、続いて「ノ」、「ノー」が優勢である。その丁寧な言い方として「ナモシ」、「ナーモシ」が若干ではあるが老年層に残存している。

オイデタガナモシ (いらっしゃいましたよ)

また、「ワイ」が頻出する。これは、さらに動詞の語尾と融合して、「(～ルワイ→) ライ」、「(～ルワイ→) ラー」、「(～ツワイ→) タイ」、「(～ヌワイ→) ナイ」、「(～ムワイ→) マイ」、「(～スワイ→) サイ」などのような語形を作り出す。

シットライ (知っているよ)

アリマサイ (ありますよ)

このほか、特色ある文末詞としては、「カー」、「カイ」、「カエ」、「カイナー」、「カイノー」、「ゼ」、「ゼー」、「ジェ」、「ゾ」、「ゾイ」、「バナ」、「ゾヤ」、「ゾ

ヨ」,「テヤ」,「ネヤ」などが見られる。

カイコサンワ ダイタイワ イライヨツタカー

(蚕さんはほとんどの家で飼育していたよ)

タマゲタゼー (驚いたよ)

オモイダスゾヨ (思い出すよ)

ドチラガ ムコニ ナルノゾヤ (どちらの人がお婿さんになるのか)

タイテクレルンカシランテヤ (焚いてくれるのだろうかねえ)

ワシワ ヒノケノ ミワ ダイブ トッタケンネヤ

(私は、ヒノキの実はいぶとったからねえ)

(以上の解説は、基本的に、「各地方言収集緊急調査」当時の報告原稿によるものである。)

愛媛県松山市1981凡例

談話資料は、方言談話音声、方言談話音声の文字化、方言談話の共通語訳から成る。CD-ROM には、ページ単位で切った方言談話音声を、CD には、方言談話音声全体を収録した。

文字化と共通語訳

方言談話音声の文字化はカタカナで表記し、方言談話の共通語訳は、漢字かなまじりで表記した。方言談話音声の文字化と共通語訳とは、対照ができるように、上下2段を1組として示した。上段が文字化、下段がその共通語訳である。

文字化については、表音的カタカナ表記を用いている。つまり、長音は「ー」で示し、助詞「は」は「ワ」、助詞「を」は「オ」、助詞「へ」は「エ」と表記する。「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」はガ行鼻濁音を表す。

また、分かち書き、句読点などは、便宜的なもので、厳密なものではない。

「各地方言収集緊急調査」における、方言談話音声の文字化の方法は、後に掲げる「調査実施上の留意事項について」などに詳しく記されている。ただし、今回、「全国方言談話データベース」として公開するにあたり、文字化・共通語訳を整備する際には、当時のマニュアルにはとらわれず、読みやすさ、意味のとりやすさを優先して処理をした部分がある。

また、この文字化は、時間の流れを忠実に反映することを意図していない。したがって、発話の重なりや、複線的な会話の進行の構造が、文字化からは読み取れない。データを使用する際には、文字化・共通語訳を見るだけでなく、実際に、音声を聞いて判断していただきたい。

発話単位

ひとりの話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発言を1発話とする。途中にあいづちが入る場合もある。

発話番号 〈半角〉

発話の通し番号を、各発話の話者記号の前に付した。

例：1A

話者記号 〈全角〉

話者、調査者など、談話の場にいる人物について、A、B、C、D、E、F、……のように、アルファベットで示した。

例：1A

固有名詞

話者および一般の人名については、文字化・共通語訳の該当個所を、A、B、C、X1、X2、X3などのアルファベットに置き換えた。話者、調査者など、談話の場にいる人物については、A、B、C、D、E、F、……のように示し、話題の中の第三者については、X1、X2、X3、……のように示した。ただし、音声は、該当個所に加工をしなかった。

歴史上の人物や、有名人の人名については、記号に置き換えることはせず、個人名を出すことにした。また、会社名、店名、製品名などについても、発言されたとおりに記している。

地名については、そのまま扱うことにした。

記号

。(句点) 〈全角〉

ポーズがあって、意味的にひとつのまとまりを持つ文と考えられる個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して句点をつけた場合もある。

例：ソーデス ソーデス

そうです。 そうです。

、(読点) 〈全角〉

基本的に息をついた個所、または、ポーズのある個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して読点をつけた場合もある。

また、文字化と対応しなくなっても、読みやすさを優先して、取り去った場合もある。

例：シ、ヤクシヨ

市役所

？ 〈全角〉

上昇イントネーションと判断した個所。

例：アズケイトイテ？

預けておいて？

() 〈全角〉

あいづち。ひとりの人が連続して話している時にさえぎったり，口をはさんだりした個所。

(A ………) のように，開き括弧の次にあるアルファベットは，発言している話者を示す。() の閉じ括弧の直前の句読点は省略した。

なお，() 内のあいづちと，独立した発話扱いされているあいづち的発話との違いは必ずしも明確ではない。

例：(A アー ソーデスカ)

{ } 〈全角〉

笑，咳，咳払い，間，などの非言語音。

例：{笑}

{咳}

{手を叩く音}

××× 〈全角〉

言い間違いや言い淀みなど。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

*** 〈全角〉

聞き取れない部分。

例：オチャズケノ＊

お茶漬けの＊

/// 〈全角〉

対応する共通語訳が不明な部分。

例：モーゼーノ モジナンデスナ、

//////// 「文字」なんですね。

[] 〈全角〉

方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

= 〈全角〉

[] 内の=は、意味の説明や、意識であることを示す。

例：イマ ユー

今 いう [=今話題にあがった]

| | 〈全角〉

注意書きなど。

例：| Aに対して |

[] 〈全角〉

注記。方言形の意味・用法、特徴的音声などについて説明し、文字化・共通語訳の後にまとめてある。[] 内の半角数字は、注記の番号を示す。

例：ホシツキサンノオモチ [1]

音声

CD-ROM には、冊子のページ単位で区切った方言音声の wave ファイルを収録している。冊子のページを pdf ファイルにしたものに、方言音声をリンクさせていて、各ページにある **再生** の部分をクリックすると、そのページの音声を聞くことができる。

CD には、談話全体の音声を収録している。以下にあげるように、適当な個所で、トラックに区切っている。

CD トラック番号

文字化・共通語訳のヘッダは、方言音声を収録した CD のトラック番号を示している。「愛媛01-1」は CD トラック番号が01で、その1ページ目ということである。「愛媛01-1」「愛媛01-2」……「愛媛01-7/02-1」……「愛媛18-4」のように表示される。

また、文字化・共通語訳部分には、CD のトラックの切れ目を表示した。矢印の部分がトラックの切れ目を表し、その両側の数字はトラック番号である。

↑01, **01↑02**, …… **17↑18**, **18↑** のように表示される。

第17巻のCD（67分53秒）には、愛媛県松山市の談話，【狸，内職，風鎮祭】の全体の音声を収録している。各トラックの開始ページ・行，終了ページ・行，時間は下記のとおりである。行は，文字化の行を表示した。

トラックNo.	開始ページ・行	終了ページ・行	時間:分:秒
01	p.26・0.1	p.32・0.7	0:02:03
02	p.32・0.7	p.36・0.19	0:01:58
03	p.36・0.19	p.41・0.3	0:02:00
04	p.41・0.5	p.47・0.3	0:02:00
05	p.47・0.5	p.49・0.1	0:00:33
06	p.49・0.3	p.55・0.7	0:02:01
07	p.55・0.9	p.60・0.1	0:01:52
08	p.60・0.3	p.66・0.11	0:01:57
09	p.66・0.11	p.72・0.3	0:01:56
10	p.72・0.5	p.79・0.11	0:02:01
11	p.79・0.13	p.85・0.5	0:02:02
12	p.85・0.5	p.90・0.19	0:02:02
13	p.91・0.1	p.93・0.17	0:01:05
14	p.94・0.1	p.99・0.3	0:02:06
15	p.99・0.3	p.104・0.17	0:02:02
16	p.104・0.19	p.110・0.19	0:02:10
17	p.111・0.1	p.117・0.5	0:01:53
18	p.117・0.7	p.120・0.15	0:01:07
計			0:31:48

愛媛県松山市1981談話

収録地点 愛媛県松山市久谷町奥久谷^{くたにまわおくくたに}

収録日時 1981(昭和56)年9月1日

収録場所 愛媛県松山市久谷町奥久谷 奥久谷集会所

話題 狸, 内職, 風鎮祭

話者

A	男	1903(明治36)年生	(収録時78歳)	農林業
B	女	1914(大正3)年生	(収録時67歳)	農業

司会

C	女	1920(大正9)年生	(収録時61歳)	農業
---	---	-------------	----------	----

調査者

D	男			
	他1名	(収録談話中に発話なし)		

収録時間 (CD) 31分48秒

この談話には機械音などの背景音がやや大きく入っている部分があります。

【狸，内職，風鎮祭】

話し手

A	男	明治36年生	(収録時78歳)	
B	女	大正3年生	(収録時67歳)	
C	女	大正9年生	(収録時61歳)	司会者
D	男			調査者

1 A : アレガ コン

あれが この

↑01

2 B : アノヒトガ ナンボ

あの人が 何歳

ジンジョー イチネングライジャッタンカイノ。

尋常[小学校] 1年[生]ぐらいだったのかね。

コンマカッタノー。

小さかったね。

3 A : イヤ コマイ テッテ ハヤ モー

いや 小さい といって[も] もはや もう

(B コマカッタロゲー)

(B 小さかっただろうが)

ガン ガッ ガッコー スケトッタ[1]ンヤキン[2] オマエ。

×× ×× 学校を 卒業していたんだから おまえ。

愛媛 01-2

4 B : ガッコー ヌケトッタケーエ [3] ?

学校を 卒業していたかね。

5 A : ガッコー ヌケトッタ ヌケトッタ。

学校を 卒業していた 卒業していた。

6 B : ホーケー [4] ?

そうかい。

7 A : オヤジサンニ ツイテ (B ホーヨ) イキヨッタンヤケンナ。

父親に ついて (B そうよ) 行っていたのだからね。

8 B : アー イッツイテイタ [5] ンカノー。 (A ンー)

ああ くっついて行ったのかね。 (A うん)

ホイテ アト サガシテ

そして 後 さがして

9 A : ツイテ イキヨッテ (B ウーン)

ついて 行っていて (B うん)

ホイテ ヒトリニ ナッテノ (B ウーン)

そして 一人に なってね (B うん)

ホイデ ヒトリニ ナッテ マヨイハジメテ。

そして 一人に なって 迷い始めて。

10 B : ホッテ ホーボーイ (A ウン) チ アノ チュイテイタ

そして 方々へ (A うん) × あの ついて行った

愛媛 01-3

アノ ナニカ シランガ オルンデノー。
あの 何か 知らないけれど いるのでね。

ホッテ ソノ ヒトノ ホーエ ソノ ヒトノ ホーエ
そして その 人の 方へ その 人の 方へ

チュイテイタ ユータノー。
ついて行った [と]言ったね。

11A : ウン。 ウン。 ホーヨ。
うん。 うん。 そうよ。

12B : ウンー。 チュイテイキヨッタラノー
うん。 ついて行っていたらね

13A : コイ コイ コイ コイ ユー モンジャケン
「来い 来い 来い 来い」 [と]言う ものだから

14B : ホーヨ ホーヨ (A ツイテイタン)
そうよ。 そうよ (A ついて行ったの)

ツイテイタンヤ テ
ついていったのだ って。

15A : ツイテイキヨッタラ ヨーガ アケタンデ
ついて行っていたら 夜が 明けたので

モー ワカッタンジャロ。
もう わかったのだろう。

16B：ホー。ホ。　　ヨーガ　アケテ　ヤ　タンバニ　オッタトカ
　　そう。　　そう。　夜が　　明けて　×　丹波に　　いたとか

　　ナントカ　ユーテ。
　　何とか　　言って。

17A：ホー。　ホー。
　　そう。　　そう。

18B：タンバノ　オクノ　ホーエ。
　　丹波の　　奥の　　方へ。

19A：ウン。　アノ　タンバノ　オク
　　うん。　あの　丹波の　　奥

20B：ホイテ　ウエノ　アノ　ソラヤマ[6]ノノー　イケノ　ハタニ
　　そして　上の　　あの　空山のね　　池の　　そばに

　　オッタ　ユー　　コトオ　シットライ。　（A　　ノー）
　　いた　　[と]いう　　ことを　　知っているよ。　（A　　うん）

　　コドモゴコロニノー。
　　子供心にね。

21A：タンバノ　（B　　ウン）　タン　タンバカラ
　　丹波の　　（B　　うん）　××　丹波から

　　チート　オクー　イタ　　トコニノー
　　少し　　奥に　　行った　所にね

ナガダ ナガダバ[7] ユー トコガ アンネガ
××× 長駄場 [と]いう 所が あるのだが

(B ウン) ソノ ナガダバ

(B うん) その 長駄場

22B : ホイテ トコロワ シランノジャケドガ。
そして 所は 知らないのだけど。

23A : ウンニヤ。

いいや。

24B : チョット タンバノ オクジャ ユー コトワ シッチョルヨ。
ちょっと 丹波の 奥だ [と]いう ことは 知っているよ。

25A : ウン。 タンバノ オクヨー。
うん。 丹波の 奥よ。

26B : ホイジャケン ミンナ クミ[8]ノ ヒトガ (A ウン)
そうだから みんな 組の 人が (A うん)

サガシタノー。

捜したね。

27A : クミ アノ ナガダ ナガダバノ オ オクニ オツテノー。
組 あの ××× 長駄場の × 奥に いてね。

(B ウーン) ホレカラ ナンジャワイ

(B うーん) それから 何だよ

愛媛 01-6

クミノ ヒトガ ゼンブ デテ (B ホーヨ ***)
組の 人が 全部 出て (B そうよ ***)

ヒー サガシヨッタラ
1日 捜していたら

ナガダバノ オクニ オッテ ツレテモンテ[9]
長駄場の 奥に いて 連れて帰って

ホイテ アレ アッコノ アノ カチヤマ[10]ニノー (B ウン)
そして あれ あそこの あの 勝山にね (B うん)

ハタ タテタラ ホシタラ オッタンジャケン ト ユー コトニ
旗[を] 立てたら そうしたら いたのだから と いう ことに

キメトイテ ホイテー アノ タズネアルクンジャケン。
決めておいて そして あの 尋ね歩くのだから。

ホイテ オッタケン ユーテ
そして いたから [と]いって

ハ ハタ タテニ カチヤマ アガッタンヤデ アレ。
× 旗[を] 立てに 勝山[に] あがったんだよ あれ。

ハタ タテニ。{笑}
旗[を] 立てに。{笑}

28B : ドーシン[11]ジャケン クミノ ヒトガノー
動員だから 組の 人がね

デルノワ デタンヨ。(A クミノ ヒトガ デタンヨ)
出るのは 出たのよ。(A 組の 人が 出たのよ)

デラサレタン ウチラー。
出させられたの 私たちは。

コドモゴロニワ ソー ユーテ キータワイ。ウン。
子供の頃には そう 言って 聞いたよ。 うん。

29A : ホイタラ モー ナンデ アノー キレーナ オバサンガ (B ア)
そうしたら もう 何で あのう きれいな おばさんが (B あ)

01↑02

コイ コイ コイ コイ ユーテ (B ホーヨ)
「来い 来い 来い 来い」 [と]言って (B そうよ)

ツ {笑} ツレテ コイ コイ ユー モンジャケン
× {笑} 連れて 「来い 来い」 [と]言う ものだから

ツイテイキヨッタラ ホイタラ アノ
ついて行っていたら そしたら あの

30B : アレ ソラヤマノ (A ソライ イトッタンヨ)
あれ[は] 空山の (A 空[山]へ 行っていたのよ)

ウン。クボノ[12]ノノー ソラヤマジャ ユータノー。
うん。窪野のね 空山だ [と]言ったね。

31A : ウン。ソラヤマヨ。
うん。空山よ。

愛媛 02-2

32B：ウン。 ソラヤマノ イケノ ハタマワリニ オッタ
うん。 空山の 池の そばあたりに いた

ユータロ。

[と]言っただろう。

33A：アッチー アコー イトツタンヨ。
あっちへ あそこへ 行っていたのよ。

34B：アッコ イトツタン ユータヨ。 ウーン。
あそこ[へ] 行っていたの [と]言っただよ。 うん。

35A：ソレカラ マイヤハジメタンヨ。
それから 迷い始めたのよ。

36B：ホー。 ホー。 ホーヨ。 ホーヨ。
そう。 そう。 そうよ。 そうよ。

37A：ソレデ ナガダバ ナガダバニ ナガダバエマデ
それで ×××× ××××× 長駄場へまで

オチトツタンヨ。

落ちていたのよ。

38B：ホジャケン ソリヤー ヤッパシ アノ ナニヨ {間}
そうだから それは やっぱり あの 何よ {間}

39A：ホイデ タ ソレデ タヌキニ バカサレタント
それで × それで 狸に 化かされたのと

愛媛 02-3

ホイテ アノ ナニワ シットルカーイ。
そして あの 何は 知っているか。

アノ X1サンガ ヤラレタン。
あの X1さんが やられたの[を]。

40B：ウン。アレワ シッチョライヨ。
うん。あれは 知っているよ。

アレワ ホン コナイダジャモン。(C ウン。アレワ ***)
あれは ほんの この前だもの。(C うん。あれは ***)

X1サガ アノ タキーエワ。(C イー)
X1さんが あの 滝へは。(C ××)

ホレーワ アノ ナニヤラヨ。
それは あの 何やらよ。

41C：アレデモ ジュー (B ウン。ウン) ナンネングライジャナ。
あれでも 10 (B うん。うん) 何年ぐらいだね。

42A：オリョ マダ[13] オー ジューニサンネン ナルカイナー。
あれっ まだ おう 12,3年[に] なるかね。

43C：ウーン。
うーん。

44A：ソレグライノ モンジャッタナー。
それぐらいの ものだったね。

45 B : ホーグライニ ナロカノー。

それぐらいに なるだろうかね。

ジューニサンネンニモ ナルカイノ。

12、3年にも なるかね。

46 A : アレモ ソヤケド

あれも そうだけれど

47 B : ホー。 ホー。 アレモー マータ

そう。 そう。 あれも また

48 A : アレモー ソヤケド イデグチ[14] イテ

あれも そうだけれど 出口[へ] 行って

イデグチー ヨージガ アッテ イテ ホイテ モドリガケニ

出口へ 用事が あって 行って そして 帰りがけに

49 B : アチラー イトッタンジャノ ユーケンノー。

あちらへ 行っていたのだ [と]いうからねえ。

50 A : ウン。 アカ (B ウーン) アカダ[15]ノ ホーエムイテ[16]

うん。 ×× (B うん) 赤田の 方へ

ズーット ハッイテシモーテ

ずーっと 入ってしまったて

ホイカラ ヨルジュー アノ アカダノ タニーノ マワリノ ヤマデ

それから 一晩中 あの 赤田の 谷の まわりの 山で

ガサリ ガサリト アルイタンヤロ? {笑}

がさり がさりと 歩いたんだろう。 {笑}

アルイタン アルイタンデ

歩いたの 歩いたので

モー ソヤケニ ホイデ アレモ

もう そうだから それで あれも

クミジューノ ヒトガ デテ サガシタンヨ。

組中の 人が 出て 捜したのよ。

51B: ホー。 ホー。(A シー) アレモ ナンヤッタ

そう。 そう。(A うん) あれも 何だった

52A: クミジューノ ヒトガ デテ サガシテ

組中の 人が 出て 捜して

ホイテ サガシタ スエニ アレ ダレジャッタンカイナー

そして 捜した 末に あれ[は] 誰だったのかね

アノ ムカイジョノ オナゴノ ヒトガ

あの 向かいの 女の 人が

オーオ ナニヨ X2ヤンヨ。 ウン。

そうそう 何よ X2さんよ。 うん。

X2ヤンガ イデグチ ヨージガ アッテ イクノニ

X2さんが 出口[へ] 用事が あって 行くのに

02↑03

愛媛 03-2

サルボ サルボ[17]ー イキヨッタラ
××× サルボへ 行っていたら

ナニヤラ オラブ コエガ スルノジャガ。
何やら 叫ぶ 声が するのだけど。

アラ マー ダレガ オラビヨルノジャローゾ ト オモーテ
あら まあ 誰が 叫んでいるのだろうか と 思っ

キキヨッタラ X1サンノ コエヤッテ。
聞いていたら X1さんの 声だっ

ホイテ モー ソコー ウゴカレンゼー ユーテ
そして 「もう そこを 動いてはいけないよ」 [と]言っ

オランダ ナン シトイテ ユーテ モンタン。
叫んで 何[を] しておい

ホイテ イテミタラ
そして 行ってみたら

(B ソー。アーン コトヤッタノー)
(B そう。ああいうような ことだったね)

モチート イゴイタラ (B ウン) シター タツカラ シタエ
もう少し 動いたら (B うん) ××× 滝から 下へ

オチルン オチル トコロエ イットツタンヨ。{笑}
×××× 落ちる 所へ 行っていたのよ。{笑}

愛媛 03-3

タツカラ シタエ オチル トコロエ イトツタン。
滝から 下へ 落ちる 所へ 行っていたの。

ウゴカレンゼ ユータ モンジャケー
動いてはいけないぞ [と]言った ものだから

ウゴカナズクニ ジーット オツタンヤロー。
動かないで じーっと いたのだろう。

ウゴイタラヤー ウゴイタラ シタイ オチトルンヤツタンヨ。
動いたらね 動いたら 下へ 落ちるところだったのよ。

シタノ カワエノー。アレ タカイ
下の 川へね。 あれ[は] 高い

53B : アノ タキワ ナガイケンノー。(A オー)
あの 滝は 長いからね。(A ええ)

アノ ウエノ ホージャケンノー。
あの 上の 方だからね。

54A : ジッケンカラ (B ンー) アル
10間[はあろうかという]ほども (B うん) ある

タキ タキノ ウエヒラノ アタマノ
×× 滝の 上あたりの 頭の

キノ カブノ ウエニ オツタンジャニ。
木の 株の 上に いたのだから。

愛媛 03-4

モー チョッポリ イゴイタラ シタエ オチルンジャケン。
もう 少し 動いたら 下へ 落ちるのだから。

ソレカラ マー アイナシニ〔18〕 ナッテ
それから まあ 間もなくに なって

ソレガ モトデ ネコンデ ホイテ シンダンヨノ。
それが 原因で 寝込んで そして 死んだのよね。

55B : ダイタイ ソーユー コッチャロナー。(A ンー)
だいたい そういう ことだろうね。(A うん)

56C : *** アル モンカナー。
*** ある ものかねえ。

57B : ウーン。ホレグライノ コッチャ アローノ。(A ンー)
うーん。それぐらいの ことでは あるだろうね。(A うん)

ハヤ トシモ トシジャッタケンノー。ウーン。
もはや 歳も 歳だったからね。 うん。

トシモ トシジャッタケン。
歳も 歳だったから。

58A : ソレモ ヤッパリ タヌキデワ アッタンジャロー。
それも やっぱり 狸では あったのだろう。

(B ソージャノー) アノー エノキノ オクニ
(B そうだね) あのう 榎の 奥に

愛媛 03-5

ジューマイダニ ユー タニガ アルンヤ。(B ウン)
十枚谷 [と]いう 谷が あるのよ。(B うん)

ジューマイダニ ユー タニガ アルノヤガ (B ーン)
十枚谷 [と]いう 谷が あるのだが (B うん)

ソコニ ソコノ タヌキガ モー アッコラ マワリ デテ
××× そのの 狸が もう あそこら あたり[に] 出て

ワルイ コト シテ イカナンダンヨ。
悪い こと[を] して いけなかったのよ。

59C : フン。フン。フン。フン
ふん。ふん。ふん。ふん

60A : アッチ マワッテ。(C フン。フン。フーン)
あっち[へ] 回って。(C ふん。ふん。ふーん)

コナイダモ ハナシタケドガ アノ ナンノ サクラ[19]ノ
この前も 話したけれど あの 何の 桜の

X3サンガ (B オー。ホーヨ。ホーヨ。アノ) コノ
X3さんが (B うん。そうよ。そうよ。あの) ××

コドモ トラレタン ユーノガノー。(B アレヤー)
子供[を] 取られたのだ [と]いうのがね。(B あれは)

アレジャ ジューマイダニノ タヌキジャッタンヤケン。
あれだ 十枚谷の 狸だったのだから。

61B：タヌキジャッタンケ。 キシネーカ オモトラ。

狸だったのか。 狐か [と]思ったら。

アー (A エー。 タヌキジャッタ) アー タヌキジャッタン。

ああ (A ええ。 狸だった) ああ 狸だったの。

03↑04

ドーセ コドモガ デキル ユンデ

××× 子供が できる [と]いうので

コーヤッテ テー アワスノニ (A ウン)

[狸が]こうやって 手を 合わすのに (A うん)

アノ ウッタテヤラ ドーヤラ シテー (B ソーヨ。 ソーヨ)

あの 撃ったとか どうとか して (B そうよ。 そうよ)

インデミタラ アノ ジブンノ コドモガ シンドottaケレ

帰ってみたら あの 自分の 子供が 死んでいたから

シンダケレ[20] ユータイノー[21]。

死んだから [と]言ったよね。

62A：ウン。(B ウン) ワガ コトー アノ (B ウン)

うん。(B うん) ×× ××× あの (B うん)

ワシガ テー アワシテ オガ オガムノニ (B ウーン)

私が 手を 合わせて ×× 拝むのに (B うーん)

ワシオ ウッタンジャケニ コドモ トッテヤル

私を 撃ったのだから 子供[を] 取ってやる

ユーテ。

[と]言って。

ホイデ コドモ トラレタン トヤ。

それで 子供[を] 取られたのだ と[いうこと]よ。

63B : ウン。トラレタンヨノー。

うん。取られたのよね。

アンナナリ アン キシネジャツタカ タヌキジャツタン。

あれは ×× 狐だったか 狸だったの。

64A : タヌキヨ。アレ。

狸よ。 あれ[は]。

65B : アー。ホーケ。

ああ。そうか。

ウチ ター キシネ キー キート キータンヨ。

私[は] ×× 狐[と] ×× ××× 聞いたのよ。

66A : ジュン ジューマイダニノ タヌキガノ。(B ウーン)

××× 十枚谷の 狸がね。(B うん)

ヤツマタサン カタエ クワーイニ イッテ

八股[狸]の ところへ 集会に 行って

モドリガケジャツタン トー。(C {笑})

帰りがけだったのだ って。(C {笑})

愛媛 04-3

67B : アー。アー フーン。フン。(A ンー)

ああ。ああ ふーん。ふん。(A うん)

ソンナ クワシー コトワ シランケドノー。

そんな 詳しい ことは 知らないけどね。

68A : ヤツマタサン カタエ (B ンー) クワーイニ イテ

八股[狸]の ところへ (B うん) 集会に 行って

モドリヨッタラ (B ンー) モドリヨッタラ

戻っていたら (B うん) 戻っていたら

ヨーガ アケテシモーテ (B ホーヤー)

夜が 明けてしまって (B そうよ)

ホイデ モー イッコー イニヨガ ナ アノ

それで もう まったく 帰りようが × あの

イニヨーガ ナーンヨ。

帰りようが ないのよ。

ワーガ アノ スミカエマデ イニヨーガ ナイノデ (B ウーン)

自分の あの すみかへまで 帰りようが ないので (B うん)

マヨイヨッタ トコオ イヌニ オワエラレテ[22] ホイテ マー

迷っていた ところを 犬に 追いかけて そして まあ

69B : キーノ ウエー アガットタンジャ トー

木の 上へ あがっていたのだ と

愛媛 04-4

70A : アノー マツノキー カケアガッタンヨ。 ウン。

あの 松の木へ 駆けあがったのよ。 うん。

71B : ホイタラノー コーヤッテ テー アワシテ オガミヨルノニ
そうしたらね こうやって 手を 合わせて 拝んでいるのに

ソノ オイサンガ テッポーデ ウッタ トヤラ ユーテノー。
その おじさんが 鉄砲で 撃った とか 言ってねえ。

(A ウン。 ホーヨ) ウッタン ウッタンヤ ト。

(A うん。 そうよ) ××× 撃ったのだ と。

ホイテ モー ジブントコ カエッタラ
そして もう 自分の家[へ] 帰ったら

コドモガ シンドッタン シンダ ユーテノ。
子供が 死んでいたの 死んだ [と]言ってね。

72A : ホヤケン ヤッパリ (B ウン) アノ ナンニー
そうだから やっぱり (B うん) あの 何[とかいう所]に

オハカガ コシラエタル トヤー。 カチヤマニ。
お墓が 作ってある って。 勝山に。

X3サンガ X3サンガ オハカ コシラエテ。
X3さんが X3さんが お墓[を] 作って。

73B : アー。 ホーケ。 (A ーン) フン フーン。
ああ。 そうか。 (A うん) ふん ふうん。

愛媛 04-5

74A : X3サンガ オハカ コシラエテノ。(B ンー)
X3さんが お墓[を] 作ってね。(B うん)

マツノキー イッポン ウエテ。
松の木を 1本 植えて。

75B : ホイタラ アノ サクラカラ コー ワタッタ オッ トコニ
そうしたら あの 桜から こう 渡った ×× 所に

サクラカラ コー コボル[23]ヨーナ トコ ワタッタ トコニ
桜から こう コボリ越えのような 所[を] 渡った 所に

オジゾーサンガ アロゲ。 アレワ チガウンケ。
お地蔵さんが あるだろう。 あれは 違うのか。

76A : アレワ チガウン。 アレワ
あれは 違うの。 あれは

77B : アレワ チガウン
あれは 違うの

78A : アレワ バットーサンジャ。
あれは 馬頭[観音]さんだ。

79B : アー バットーサンカ アレワ。(C *** ンー ンー ンー)
ああ 馬頭[観音]さんか あれは。(C *** うん うん うん)

アノ サクラカラ コー ワタッタ トコニ
あの 桜から こう 渡った 所に

オジゾーサンガ アロー。

お地蔵さんが あるだろう。

80C：アレワ ウチノ トコノ バトーサント イッシヨジヤ。
あれは 私の 所の 馬頭[観音]さんと 一緒よ。

81B：アー。 ホー。
ああ。 そう。

82A：アラ アラ バットーサン。
あれは あれは 馬頭[観音]さん。

83C：バトーサンナ。 (B アー アー アー ***)
馬頭[観音]さんね。(B ああ ああ ああ ***)

84A：アレジャ ナイノヨ。(B アー ア ホーケ)
あれでは ないのよ。(B ああ あ そうか)

ナルノカワ[24] ウエムイテ ズーット アガリヨッタラノー
ナルノカワ 上へ ズーっと あがっていたらね

(B ウーン) アノ ムカシノ サイソーチ[25]ト
(B うん) あの 昔の 採草地と

モチブン[26]ノ ヤマトノ サカイニ モッテイッテノー
持ち分の 山との 境に もっていったね

(B ウン) アノ イシグロ[27]ノガ ツンデアライ。
(B うん) あの 石ぐろ×が 積んであるよ。

ギョーサン イシ オイテ。(B ウン)
たくさん 石[を] 置いて。(B うん)

ホイテ ソレーニ マツノキ イッボン ウエテ。(B ウン)
そして それに 松の木[を] 1本 植えて。(B うん)

04↑05

ホイテ オコトワリ シタンヤケドノー。
そして お断り[を] したのだけどね。

85B : アー アー アー アー。
ああ ああ ああ ああ。

86A : ソノ マツノキガ モー コーイニ ナットライ。
その 松の木が もう こういうふうに なっているよ。

87B : ウーン。 ウーン。
うん。 うん。

88C : ウン。 ウーン。
うん。 うん。

89B : ソヤ ソージャローゼ。 アノ ヒトガ シンデカラデモ
それは そうだろうよ。 あの 人が 死んでからでも

ハヤ モー トージャモンノー。
もはや もう とつく[の昔]だものね。

90A : オンマツ ウエ オンマツ ウエータンガ
雄松 ×× 雄松[を] 植えたのが

愛媛 05-2

アー モー カレタンジャ ナイカシラン ト オモーガ。
ああ もう 枯れたのでは ないかしら と 思うが。

91B：モー カレトルジェ。(C ウン)
もう 枯れているよ。(C うん)

ハヤ モー アノ ヒトガ シンデカラデモ ソートー ナガイノニ。
もはや もう あの 人が 死んでからでも 相当 長いのに。

92A：オー オ。 オー。 モー (B ジュー)
おお お。 おお。 もう (B 10)

ジュー ジューシゴネン モッ ニジューネンモ ナローノ。
10 14,5年 ×× 20年も なるだろうね。

93B：ウン。 アノ ヒトガ シンデカラ ジュースーネン。
うん。 あの 人が 死んでから 10数年。

アノ ヒトガ ワカイ トキノ コトジャケンノー。
あの 人が 若い 時の ことだからね。

94A：ワカイ トキ ワカイ トキ
若い 時 若い 時

95B：ワカイ トキノ コトジャケンノー。
若い 時の ことだからね。

(A ンー ワカイ トキノ コト)

(A うん 若い 時の こと)

アノ ヒトガ ワカイ トキノ コトジャキン。 ソレワ
あの 人が 若い 時の ことだから。 それは

05↑

—— 中 略 ——

96C：ムカシーノ ヒトヤッタラ ナワー ノー ツルーツシデ
昔の 人だったら 縄[を] ×× //////////////

↑06

ナワー ノイヨッタケンナー。(A ナワー ソーヤナ)
縄[を] なっていたからね。(A 縄[を] そうだな)

ナワー ノーテ ソレ ウツタリ ***
縄[を] なって それ[を] 売ったり ***

ソテ ソレデ スミダス アンダリナー
そして それで 炭俵[を] 編んだりね。

97B：イヤ ナツ フユ アミヨッタヨ オバサンラ
いや 夏[も] 冬[も] 編んでいたよ、おばさんたち[は]。

(C ア ホーケ) ンーン (C ハー)
(C あ そうか) うん、(C はあ)

ソイガ マー ヒトツノ ゲンキンシュニュージャ ムカシノ
それが まあ、一つの 現金収入だ、 昔の。

(C ホー ホー ホー ホーヤケン)
(C そう そう そう そうだから)

愛媛 06-2

オンナノ ヒトワノー ノ。(A ***)

女の 人はね、 ね。(A ***)

ホヤケド オバサンワーナー トクベツヨ

そうだけど、 おばさんはね、 特別よ。

ゴケン ナッタケンナー オトコノ ヒトガ オランケン
後家に なったからねえ。 男の 人が いないから。

コドモ ヤシナワナ イカンケンナ
子供[を] 養わなくては いけないからね。

ホヤケン ヨケ アノー

そうだから よけい[に] あのう

98A：マー アノ ジブンニワ カレコレ アッタ。(B ホーヨ ン)
まあ あの 当時には いろいろ あった。(B そうよ ン)

ミンナ ナンギ シタケンノー。
みんな 苦労 したからね。

99B：ホーヨ。 ミンナーデワ アルケド
そうよ。 みんなでは あるけど

オバサン トクベツヨ。
おばさん[は] 特別よ。

100A：ヨルワ (B ウン) ヨルワ ヨナベデ セズクニワ[28]
夜は (B うん) 夜は 夜なべで しなければ

ニエラレン ニエラレン ナラナンダンジャケー。
寝てはいけない 寝てはいけない [寝ては]いけなかったのだから。

101B : ホーヨ。 ネラレナンダンジャケンノー。 ミンナ。
そうよ。 寝られなかったのだからね。 みんな。

ホイテ マー ダンナサンノ アル ヒトデモ ミンナ ハタ
そして まあ 旦那さんの ある 人でも みんな 機[を]

ドンドン オッテノー。(A ーン)
どンドン 織ってね。(A うん)

ソレコソ ドンドン ハタ オッタヨ。 ミンナー。
それこそ どンドン 機[を] 織ったよ。 みんな[が]。

102A : アー ウチラノ (B ーン) ウチラノ オバーラデモ
ああ 私たちの (B うん) 私たちの おばあさんたちでも

モー ハタ オッテ。 モー ギヤカマシー[29]テ
もう 機[を] 織って。 もう やかましくって

ナッポニモ イカンケン ハタナン ツチコーシテ[30]ヤル
どうしても いけないから 機なんか ぶち壊してやる

ユーテ オゴッタ コトガ アルノヨ。
[と]言って 怒った ことが あるのよ。

ソッ ソレデモ オッタケンナー。 {笑}
×× それでも 織ったからね。 {笑}

103B：ホーヨ。 アノ ハジメワ コー テバタデ アッタケドノ。
そうよ。 あの 初めは こう 手機で あったけどね。

シマイニワ アノー ミンナ キカイバタニ ナッテノー。
しまいには あのう すべて 機械機に なってね。

ドンドン ドンドン ミンナ オリヨッタヨ。
どンドン どンドン みんな 織っていたよ。

104A：キカイバタノ ハグルマ (B ウーン)
機械機の 歯車[を] (B うーん)

コー ** アノ ヒキヌイトイテアル ユーテ
こう ** あの ひきぬいておいてやる [と]言って

オゴッタ コトガ アル。
怒った ことが ある。

105B：ホーヨ。 ンー。
そうよ。 うん。

106A：アルケドナ。 {笑}
あるけどね。 {笑}

107C：ハイ。 ムカシャ ココ アノ カイコサン
はい。 昔は ここ[は] あの 蚕[を]

ダイブ カイヨッタケンナ。
だいぶ 飼っていたからね。

108B：ソー。 ソー。 ソー。 (A ーン)

そう。 そう。 そう。 (A うん)

オバサンラモ カイコサン コーター。

おばさんたちも 蚕[を] 飼った。

109A：カイコ カイヨッタ アガリヨ。 (C ーン)

蚕[を] 飼っていた 終わり[頃のこと]よ。 (C うん)

コナイノ キカイバタ オリヨッ オットンワナー。

こんな 機械機[を] ×××× 織ったのはね。

110C：ウン。 ウン。 ウン。

うん。 うん。 うん。

111B：カイコサンワ ハーイヨニ ヤメタノー。

蚕は 早くに やめたね。

112A：カイコワ ハーイニ ヤメタ。

蚕は 早くに やめた。

113B：ウン。 ハーイヨニ ヤメタンヨ。 カイコサンワ。

うん。 早くに やめたのよ。 蚕は。

114A：クサラ クサラシテシマウデ。

××× 腐らしてしまうので。

115B：ウン。 クサッテノー。 (A {笑})

うん。 腐ってね。 (A {笑})

愛媛 06-6

イチネンニ サンカイ カウンヨ。(C ウーン) ウーン。
1年に 3回 飼うのよ。(C うん) うん。

ホイデノー オバサンラガ アレ ムスメゴロジャッタ。
それでね おばさんたちが あれ[は] 娘の頃だった。

カイコサン コータンワ。
蚕[を] 飼ったのは。

116A : ハン ハー ムスメジャ ムスメゴロヨ。
うん そう 娘だ 娘の頃[のこと]よ。

117B : ウーン。 ムスメゴロジャッタ。
うん。 娘の頃だった。

ホヤケン アンナ ヤマノ ヤマカラノー
そうだから あんな ××× 山からね

ムカシジャッタラ アンナ オーキナ クワカゴニ
昔だったら あんな 大きな 桑[を入れる]かごに

ジューゴーカンワ アッタノー。 ソレ ドンドン ドンドン
15貫は あったね。 それ[を] どんどん どんどん

118A : アー マイ クワ ワリニ オモカッタケンノー。
ああ ×× 桑[は] 割と 重かったからね。

ハー ハー イレル ハー イレルノヤケン。
葉[を] 葉[を] 入れる 葉[を] 入れるのだから。

119B : オモタカッタケンノー。 オーキナンデノー。
重たかったからね。 大きなのでね。

オバサンラ ヒニ サンカー[31]シタヨ。 ウン。
おばさんたち[は] 1日に 3往復したよ。 うん。

アサ ヒル バント サンカイグライ イッタ。
朝 昼 晩と 3回ぐらい 行った。

ホヤケン オカゲニ コー ニクオ クーテ イキトッタッタヨ。
そうだから おかげさまで こう 肉を 食べて 生きていたよ。

06↑07

(B {笑})
(B {笑})

120A : アレワ オモカッタ***ノー
あれは 重かった***ね

121B : ウン。
うん。

122A : ホレガ アノ オーバナンジャケニ {笑} (B ホーヨ)
それが あの [桑は]大きい葉なのだから {笑} (B そうよ)

ヤマノ トコ ***
山の 所 ***

123B : アメデモ フッタラノー ズーット ツナ ヒーテ
雨でも 降ったらね ずーっと 綱[を] 引いて

ホイテ バタバタ バタバタ アオイデ ツユー ノケルンヨ。
そして バタバタ バタバタ あおいで 露[を] 除くのよ。

ホヤケン ソレ クワシタラノー
そうだから それ[=雨のついた桑][を] 食べさせたらね

カイコガ キーレーニ シンデシマウン。(C ウーン)
蚕が きれいに 死んでしまうの。(C うん)

ムクンデシモーテノー。
むくんでしまってね。

124A : イマゴロ イマゴロー ホヤケド
今頃 今頃[は] そうだけど

ミズ ウッテジャ ナケリャー クワサンゾナ。
水[を] 打って[から]で なければ 食べさせないのだよ。

125B : アラ ホーカイナー。(A {笑}) フーン。(A ***)
あら そうかね。(A {笑}) ふうん。(A ***)

126C : ジジョーガ カワッタンヤナ。
事情が 変わったのだね。

127B : ホジャケン ヨノナカ ハンタイニ ナッタワケヨノー。
そうだから 世の中[が] 反対に なったわけよね。

ウーン。
うん。

愛媛 07-3

128A : マー アンナンヨノ。 ナイショク トウ ユーノガ。
まあ あんなのよね。 内職 と いうのが。

マー ナンノ ナワナイジャヨノ。
まあ 何の 縄ないだよね。

オー ヨ ムカシワ アノ トベ[32]ノ トベニ
おお × 昔は あの 砥部の 砥部に

アノ カラツヤマ[33]ガ マー イマモ アルケドガ
あの 唐津山が まあ 今も あるけれど

カラツヤマガ ハズンドル[34] ゴロジャッタ。
唐津山が [景気が]いい 頃だった。

ホリエデ ナワオ ノーテノー
それで 縄を なってね

129B : コナーニ アノ セン タテノ アノ ナニー シタンデ
こんなに あの ×× 縦の あの 何を したので

ダイデノー コーヤッテ ナワオノー アノ チャント タグッテノー
台でね こうやって 縄をね あの ちゃんと 手繰ってね

ホイテ ソレオ イチワニシテノー
そして それを 1把にしてね

ホイテ イチワ ナンボ ユーテ
そして 1把[が] いくら [と]いって

トベー モッテイキヨッタン。

砥部へ 持って行っていたの。

130A : トベー トベー ニノーツサエ イタラ

砥部 砥部へ 担いでさえ 行ったら

タイガイワ コーテクレルンヨ。

たいていは 買ってくれるのよ。

131B : ホー ホー。 コーテクレルンデノ *** ンー。

そう そう。 買ってくれるのでね *** うん。

132A : カラッ カラツヤマガナー アノー ナンノ

××× 唐津山がね あのう 何の

133B : インマニシタラ ナンボグライノ (A ヤキ)

今にしたら いくらぐらいの (A 焼き)

カケネグライ アルンジャロカー。 アラー。

掛値ぐらい[が] あるのだろうか。 あれは。

134A : ヤキモンノ ニー スルノニ カウンヤケンナ。

焼き物の 荷[作り]を するのに 買うのだからね。

(B・C ウン。 ウン。 ウーン) ナンボデモ イルンヨ。

(B・C うん。 うん。 うん) いくらでも いるのよ。

135B : ホーヨ。 アノ コンナノー タテンボ[35]

そうよ。 あの こんなね 立て棒[を]

愛媛 07-5

コシラエテノー。 ノー。 (A オー)

作ってね。 ね。 (A おお)

ダイ コシラエテ タテンボ コシラエテ

台[を] こしらえて 立て棒[を] 作って

ホッテ ソレオ コーヤッテノー

そして それを こうやってね

ジュンジュンニ コーヤッテ アノ シテノー

順々に こうやって あの してね

ホイテ ソレデ イチワ ナンボジャ ユーテ。

そして それで 1把[が] いくらだ [と]いって。

136A : イチワガ サー ニセンゴリングライジャッタ。

1把が さあ 2銭5厘ぐらいだった。

137B : ソージャロノー。

そうだろうね。

138A : ゴジッピロジャケンナー。

50尋だからね。

139B : ウーン。

うん。

140C : ウーン。

うん。

141A : ゴジッピロガ イチワジャケンナー。

50 尋が 1 把だからね。

07↑08

142B : ワリアイ ダイブ アッタノー。アレ。

割合[に] だいぶ あったね。 あれ[は]。

コナー ナッテ (A コー マワシテ)

こんなに なって (A こう 回して)

コー コー ジュンジュンニ (A カケテイクンガ)

こう こう 順々に (A かけていくのが)

アノ マイテノ カケテイクンガ (A アレガ) ナニヤ ユーテ

あの 巻いてね かけていくのが (A あれが) なんとか いて

143A : ゴジュ コノ

50 この

144B : マイテイクンジャケン。

巻いていくのだから。

145A : ゴジュー カゾエンニヤ イカンノヨ。 (B ウーン)

50 数えなければ いけないのよ。 (B うん)

ゴジッピロジャッタ。

50 尋だった。

146B : ゴジュージャッタンカイノ。ナンボコソノ エート

50 だったのかね。 いくらなのか ええと

カズントコワ シランケドノー。(A ゴジッピロ)
数は 知らないけどね。(A 50尋)

コンナ タテニ シトルンデノ コヤッテ
こんな 縦に しているのね こうやって

ジュンジュンニ マワシタ。
順々に 回した。

コノ コノグライナ コノグライノ タバニ シテノー
この このぐらいな このぐらいの 束に してね

ホイテ アノ イチワ ナンボデ ウリヨッタワイ。
そして あの 1把[が] いくら[というの]で 売っていたよ。

147A：ニセンゴリングライジャッタワイ。
2銭5厘ぐらいだったよ。

148B：アッリヤー。
あつりや。

149A：シクシク シクシク ユー
しくしく ししく いう

150B：ムカシワ ホジャケド ソレガ マー
昔は そうだけど それが まあ

オカネ トルトカ。
お金[を] 取る[＝稼ぐ]とか。

アンナ アノ ナニー イッテ イシ ワッテノー。 ミナガー。
あんな あの 何へ 行って 石[を] 割ってね。 みんなが。

151A : ホーヨ。 アノ バラスワリ [36]ニワ ダーイブ イタワイナ。
そうよ。 あの バラス割りには だいぶ 行ったよね。

152B : ダイブ イタワイノー。
だいぶ 行ったよね。

アッ テーデ イチイチ ワッテノ。
×× 手で 一つ一つ 割ってね。

イッパイ ナンボジャ ユーテノ。 (A ***)
1杯[が] いくらだ [と]いってね。 (A ***)

ドンナ モンカ シラン。
どんな ものか[は] 知らない。

ウチワ イタ コト ナイケン シランケド。
私は 行った こと[が] ないから 知らないけど。

(A アレガ) アノ オーキナン
(A あれが) あの 大きなの

153A : イッスンカクノ オッケナンガ イッスンカク。
一寸角の 大きなのが 一寸角。

イッスンカク ユート イマノ ナニニ ナンノカナ。
一寸角 [と]いうと 今の 何に なるのかな。

(C ー)

(C うん)

154B : アレ ホイジャケド キーナ オマスジャケン

あれ[は] そうだけれど 木の 升だから

イッパイ ハカルン イッパイガ ナンボジャケン。

1 杯 量るの 1 杯が いくらだから。

コー キーノ ア ハコカ アノ マスミタイナンジャッタンジャロ。

こう 木の × 箱か あの 升みたいなのだったのだろう。

155A : アレワ セキタンバコ ユーテノー。 (B・C ー)

あれは 石炭箱 [と]いってね。 (B・C うん)

マー アノ イマノ セキユクワンガ (C ー ー)

まあ あの 今の 石油缶が (C うん うん)

フターツ ハイル

二つ 入る

156B : ハー。 ハー。 ハー。 ハー (C フーン)

はあ。 はあ。 はあ。 はあ (C ふうん)

157A : フターツ ハイル ハコジャッタンヨ。 (C ー ー)

二つ 入る 箱だったのよ。 (C うん うん)

158B : フン。 フン。 フン。 フン。 ***

ふん。 ふん。 ふん。 ふん。 ***

159A : イマノ セキユクワンガ アロー。 (B ウン) イマノ
今の 石油缶が あるだろう。 (B うん) 今の

160C : カークイ [37] アッカナ ミカンバコジャロー。
四角い [底の]空いている みかん箱だろう。

161B : ウン。 ウン。 ウン。
うん。 うん。 うん。

162A : カークイ カークイノガ。
四角い 四角いのが。

アレガ フターツ コー ナラベテ ハイルンガ。 (B・C ウン)
あれが 二つ こう 並べて 入るのが。 (B・C うん)

ノガ ソレガ ハコ ハコデナ。 (B・C ーン)
×× それが 箱 箱でね。 (B・C うん)

ホレガ イマノ マエノ アノ キーデ コシラエ
それが 今の 前の あの 木で ××××

キーデ ウチヨッタ ミカンバコモ
木で[作ってあって] [釘を]打っていた みかん箱も

ツイ [38] ヨー。 (C ウン。 ソー。 ソー。 ソー。 ソー)
一緒よ。 (C うん。 そう。 そう。 そう。 そう)

アレト フトサガ ツイジャッタンヨ。
あれと 大きさが 一緒だったのよ。

163B : ホヤケン アレ イッパイガ ナンボ ユーテノー。
そうだから あれ 1杯が いくら [と]いってね。

164A : アレニ アレニ ヤマモリガ ニセンゴリン。
あれに あれに 山盛りが 2 銭 5 厘。

165C : フーン。(A {笑})
ふうん。(A {笑})

166A : ホイテ ナニ ヒョッタラ チート チート ショッタラ
そして 何 していたら 少し 少し[の間] していたら

167B : ソノカワリ オカネモ トレル ワケヨノー。
そのかわり お金も 取れる わけよね。

168C : ソー。 ソー。 ソー。 ソー。
そう。 そう。 そう。 そう。

169A : サン サンセン クレヤル[39] ユーテ。(B・C ウン)
×× 3 銭 あげる [と]言って。(B・C うん)

サンセン クレヤル ユーテ。(B ***)
3 銭 あげる [と]言って。(B ***)

サンセン ナッタラ ダイブン ゼニガ ヨケ トレルヨーニ
3 銭[に] なったら だいぶん 銭が たくさん 取れるように

オモイヨッタケドナー。
思っていたけれどね。

170C : ウーン。

うん。

171B : ホイデモ ミンナ イキヨッタノー。

それでも みんな[が] 行っていたね。

172C : ゴリンノ コトデナー

5厘の ことでね

173B : ココラヘンデー (A エー) ミンナー アノ イッシヨデ

ここらあたりで (A ええ) みんな あの 一緒に

アッコー カカリヨッタヨ。

あそこに かかっていたよ。

174A : ホイデ マー ニジッ ゲン ゲンキナ モンデ

それで まあ ××× ×× 元気な 者で

08↑09

ニジッパイグライ イケリャー。

20杯ぐらい いけるよ。

175B : ウン。

うん。

176C : ホー。

ほう。

177A : ニジッパイカ エッポド[40] キヨーナ モンデ

20杯か よほど 器用な 者で

ニジューゴハイグライ ヤレヨッタワイナー。
25杯ぐらい やることができていたね。

ニジューゴハイ ユート ナナジュー
25杯 [と]いうと 70

ナナジューゴセンジャロ。{笑}
75銭だろう。 {笑}

178B : ソノカワリ マー ソレダキ ヒカクシテ
そのかわり まあ それだけ 比較して[みれば]

オコメカラ アノ ホカノ ブッカモ ヤスイ ワケヨ。
お米から あの 他の 物価も 安い わけよ。

179C : ウン。 ウン。 ウン。 ウン
うん。 うん。 うん。 うん

180A : ブッカモ ソリヤ ヤスイ
物価も それは 安い

181B : ソノ ナナジューゴセンガ ホント
その 75銭が ほんとう

イマニ ナオシタラノー ダイブン ナルケー。
今[のお金]に 換算したらね だいぶん[に] なるから。

(A マー ソレー) ブッカモ ヤスイ ワケヨ。
(A まあ それ) 物価も 安い わけよ。

182A : ソンナ シゴト オワエテナー。(B ウーン)
そんな 仕事[を] 追いかけてね。(B うーん)

ホイデ マー ゲンキンシューニュー トリヨッタ ワケヨ。
それで まあ 現金収入[を] 取っていた わけよ。

183B : ケド イマノヨーニ ソノ ネンキントカ ナントカ
けれど 今のように その 年金とか 何とか

カケル モンガ ナイケン。アノ
かける ものが ないから。あの

184A : ソンナ モノワ イランケン。
そんな ものは 要らないから。

185B : イラナンダッチャナ。(C ***)
要らなかったよね。(C ***)

ホイテ マー ミセナンカデモ ボーント セッキ[41]トノ
そして まあ 店なんかでも 盆と 決算日との

カンジョージャ アッタケンナー。
勘定で あったからね。

ソノ テン ショカッタンヨ。
その 点[は] やりやすかったのよ。

マイツイキ アノ ナンチャラ イル ッチュー コトガ
毎月 あの 何やら いる という ことが

愛媛 09-4

イランケンナー。(C ウン) ウーン。

いないからね。(C うん) うん。

イマワ モー マイツィキダー コセンケン ドーシテモ**

今は もう 毎月が 越せないから どうしても**

186A：イマワ ニチニチノ セッキージャケンナ。

今は 日々の 決算日だからね。

187B：ホーヨ。ニチニチノ セッキージャケー。

そうよ。日々の 決算日だから。

188A：アー。ムカシワ ソーデワ ナカッタケンネ。

ああ。昔は そうでは なかったからね。

189B：ウーン。ホーヨ。ソレガ ショカッタワケヨ。

うん。そうよ。それが やりやすかったわけよ。

190A：ソノ カーイ ボント セッキトニワ オマイ

その かわり 盆と 決算日とは おまえ

ナンギ ヤリヨッタンジャキン。

苦勞[を] していたのだから。

191B：ホー。ホー ホーヨ。(A・C {笑})

そう。そう そうよ。(A・C {笑})

ミンナー ボント セッキトニヤナー (A・C ー)

みんな[が] 盆と 決算日とはね (A・C うん)

ナンギ ヤッテナー。
苦勞[を] してね。

ホノカワリ ヒャクショーデモ ナニト オボンマデワ
そのかわり 百姓でも 何と お盆までは

ターデモ シェー ダシテ シテノー。
田でも 精[を] 出して してね。

ホイテ オボンガ スンダラ オナゴシ[42]デモ マー アノ
そして お盆が すんだら 女の人たちでも まあ あの

192A : モー ヨージガ ナーンジャ
もう 用事が ないのだ

193B : ヨージガ ナイノヨ。(A フトンノ センタク)
用事が ないのよ。(A 布団の 洗濯)

フトンノ センタクデノー。(C フーン フン フン) ウン。
布団の 洗濯でね。(C ふん ふん ふん) うん。

ヨージガ ナカッタ。ソシテ クラセヨッタンヨ。
用事が なかった。そうして 暮らせていたのよ。

194A : フトンノ セン フトンノ センタクヤ
布団の ×× 布団の 洗濯や

アノ ワラ[43]ガ (B ン) ヤッ コドモラガ (B ウン)
あの 自分などが (B うん) ×× 子供たちが (B うん)

愛媛 09-6

キルモ キルモンノ センタク シテナー。

××× 着るものの 洗濯[を] してね。

195 B : ソー。 ソー。 セン ソレデ オレヨッタンヨ。

そう。 そう。 ×× それで いることができていたのよ。

196 A : ホイデ モー フユノ (B ーン) フユノ シタク

それで もう 冬の (B うん) 冬の したく[を]

ゴソゴソ (B ホー *** ーン)

ごそごそ[と] (B ほう *** うん)

タガ スンダラ ソレ セニヤ イカンノヨ。

田が 終わったら それ[を] しなければ いけないのよ。

(B ホー。 ホー) イマノ オナゴシノヨーニ ナニ

(B そう。 そう) 今の 女の人たちのように 何

197 B : ネーカラネンジュー ドンドン ハタラキャ シェン。

年から年中 どんどん 働きは しない。

198 A : ネンカラネンジュー ハタラカンデモ スムナー スミヨッタ。

年から年中[は] 働かなくても すむのは すんでいた。

199 B : スミヨッタンヨ ソレデ。 ウン。

すんでいたのよ それで。 うん。

オボンノ ターノ トメグサ[44]オナー ズーット トットイタラ

お盆の 田の 止草をね ずっと とっておいたら

モー ゼーンブ スミヨッタ。

もう 全部 すんでいたの。

ソレデ スンデ スゴセヨッタ。

それで すんで 過ごすことができていた。

09↑10

ホイデモ イマワ

それでも 今は

200A : ホヤケド ムカ ムカシノ モナー オマエ

そうだけど ×× 昔の 者は おまえ

ハナカズキ[45]ヤ ユーテ

「花かずき」だ [と]いって

イマゴロ クサ トリヨッタンデ。

今頃[=9月初旬] 草[を] とっていたのだよ。

201B : ホーヨ。 トリヨッタンナー。(A {笑}) ウーン。

そうよ。 とっていたよね。(A {笑}) うん。

202A : ハナガ サイテ (B・C ンー) ナニ シトルノニ

花が 咲いて (B・C うん) 何 しているのに

ハナー オトシテシマウノニナー バカタレガ。

花を 落としてしまうのにな 馬鹿が。

203C : ウン。 フン。 フン。

うん。 ふん。 ふん。

204A：ホレノ ナカー ハイッテ
そのの 中[へ] 入って

ドーノコンナ マゼクリヨッタノヨ。
どうのこうの まぜかえしていたのよ。

205C：ホナ ハイモ トラ ハイモトッテー。
そうすると ××× ×× [稲株の根元を]はいながら。

206B：ウン。
うん。

207A：へー へー。
へえ へえ。

208C：フン フン フン フン。
ふん ふん ふん ふん。

209B：ハイ ユーテ Cサン ウエタ スグニ ナンカイノ
はい [と]言って Cさん 植えた すぐ[後]に 何かね

クサ アノ ナニヤ モトカキ[46]ジャ ユーテ
草[を] あの 何とか 元かきだ [と]いって

ターノ ナカ ゴザゴザゴゾ イーノ カーッテ
田の 中[を] ゴザゴザゴゾ [と]いいながら かいて

モト カクンヨ。
元[を] かくのよ。

210C : ウン。

うん。

211B : イネデモ。 イマワ モー タエ ハイランケドノー。

稲でも。 今は もう 田へ 入らないけどね。

212A : ソーユー チョーシデ。

そういう 調子で。

213B : ウン。 ソノカワリ マー セーカツモ ラクンナッタ。

うん。 そのかわり まあ 生活も 楽になった。

アノ ラクナ アッ アノ イマノヨーニワ
あの 楽に[なった] ×× あの[昔は] 今のようには

ソナーイニ カネ カネ カネ カネワ イワンノン。
そんなに 金 金 金 金は 言わないのよ。

214A : カネ カネモ イヤー センケド

金 金も 言いは しないけれど

215B : ウン。 イワナンダンヨ。

うん。 言わなかったのよ。

ソノカワリ イ アノ ムカシカラ カンガエタラ
そのかわり × あの 昔から 考えたら

セーカツ ユー モンワ イマノ ワカイ シワ
生活 [と]いう ものは 今の 若い 人たちは

愛媛 10-4

ムカシノ アノ ウチラ セーカツ シタ トキノヨーナ
昔の あの 私たち[が] 生活 した 時のような

セーカツワ ヨー センワイ。
生活は できないよ。

216A : ソリャ デケン デケン トテモ。
それは できない できない とても。

217B : イマジッターラ ウチラデモ (A ンー)
今であつたら 私たちでも (A うん)

イマノ[47] セーカツ セー ユータラ
今の 生活[を] しろ [と]言つたら

ウチラ セー ユータラ スルヨ。(A {笑})
私たち しろ [と]言つたら するよ。(A {笑})

ミンナガ ソーユー フーニ ナッテキタラ。
みんなが そういう ふうに なつてきたら。

ソヤケド イマノ ワカイ ヒトワ
そうだけど 今の 若い 人は

ソノ セーカツワ ヨー センワ。
その[=昔の] 生活は できないよ。

218A : ソリャ センケドガノー。(B ナン ウーン)
それは しないけれどね。(B ×× うん)

スルケドガ (B ヨー セン)

するけれど (B できない)

イマノ ワカイ モンジャッタラ ヨー センワイ。

今の 若い 者だったら できないよ。

219B : ヨー セン。(A ン) ウチラヤッタラ スルヨ。

できない。(A うん) 私たちだったら するよ。

ミンナ ソー

みんな[が] そう

220C : サー ソ ソレワ モンダイヤ ト オモウカナ。

さあ × それは 問題だ と 思うけどね。

221B : ホージャロカー

そうだろうか

222C : ヤッパリ ゼータク ト ユー オユー ツカッタラナー

やっぱり ぜいたく と いう お湯に つかったらね

(B ウーン) ウチワナー カンタンニ (B ***)

(B うん) 私はね 簡単に (B ***)

223A : カネ コシラエルヤ ユータラ

金[を] 作るのだ [と]いったら

224C : ヌケレン ト オモウガ。

抜け出せない と 思うけど。

愛媛 10-6

225 B : デキマイカ。 インニャ ソンナコト ナイデ。
できないだろうか。 いいや そんなこと[は] ないよ。

Cサン。 (C ***)

Cさん。 (C ***)

226 A : カネ コシラエルノジャッターラ ソヤケドガ
金[を] 作るのだったら そうだけど

ナンデ アー セニャ イカン。
何よ ああ[いうふうに] しないと いけない。

227 B : スル。 スル。 イマジャッターラ。
する。 する。 今だったら。

228 A : アー シタラ デケルデ。 カネワ。
ああ[いう生活を] したら できるよ。 金は。

229 C : アイーナ[48]カナー。
ああいうようなかね。

230 B : ムカシノ モンジャッターラ スル。
昔の 者だったら する。

アノ ネンダイヤッターラ スル。
あの 年代[の者]だったら する。

231 C : ホーカナー。
そうかな。

232B : ウン スル。 ケッコー。
うん する。 けっこう。

コソ コー コーユー フーナ
×× ×× こういう ふうな

233C : ジューニンガ ジューニンガ ジューニン ユーケドナー
10人が 10人が 10人 [そう]いうけどね

234B : ミンナガ ソーユー フーナ シェーカツジャッタラ スル。
みんなが そういう ふうな 生活だったら する。

235C : ウン **。
うん **。

236B : ウン。(A ウン) ホイジャロー。
うん。(A うん) そうだろう。

トシヨリガ ソナーニー アンター アノ
年寄りが そんなに あなた あの

ニク タベニャ イカンジャノ イマノヨーニ
肉[を] 食べないと いけないだの 今のうちに

イヤー ドコヤラ イカニャ イカンジャノ ****
いや どこそこへ 行かないと いけないだの ****

ユーコト ナカロー。
[と]いうこと[は] ないだろう。

(A ニクジャノ ユー モノワ) ホシテ タベル モンデモ

(A 肉だとか いう ものは) それから 食べる 物でも

237C : タブンナー。 シー

多分ね。 うん

238A : ニクジャノ ユー モノワ イチネンニ イッペンモ

肉だとか いう ものは 1 年間に 1 度も

クタリ クワナンダリジャ。

食べたり 食べなかったりだ。

239B : ホントヨ。 オマツリデモナー (A {笑})

ほんとうよ。 お祭りでもね (A {笑})

オショーガツ サンガニチワ サーキニ ユータグライデ

お正月[の] 三が日は 先に 言ったぐらい[のこと]で

10↑11

ヒャークショーノ タカラジャケン

百姓の 宝[物なみ]だから

ウン ニクワ タベラレンジャノ ユー (C {笑})

うん 肉は 食べてはいけないだの [と]いう (C {笑})

ジキモ アッタンジャケンナー。 (A ホージャ) ウン。

時期も あったのだからね。 (A そうだ) うん。

ホジャキン ソーユー フーナ シェーカツガ

それだから そういう ふうな 生活が

愛媛 11-2

ホヤケン マー ノーデ デキタ モンギリデナー
そうだから まあ 野で できた ものだけでね

タイテワ スクメテ オショーガツジャッタラ タイテワ スクメテ
炊いては 温めて お正月だったら 炊いては 温めて

タベヨッタヨ オバサン ウン。
食べていたよ おばさん うん。

ソヤキン イマデモ イマ ソーユー フーナ ナニー
そうだから 今でも 今 そういう ふうな 何

シェーカツ シェー ユータラ
生活[を] しろ [と]言ったら

ケッコウ オバサンラワ スル ト オモウ。
けっこう おばさんたちは する と 思う。

240C：ソーカナー
そうかね

241A：ウン。 ムカシ ヤリヨッタケン エー セン コトワ ナー。
うん。 昔 やっていたから できない ことは ない。

242B：ウン。 エー セン コトワ ナイヨ。
うん。 できない ことは ないよ。

マー シューイガ ズーット ソー イチリツニ ナッテ
まあ 周囲が ずーっと そう 一律に なって

愛媛 11-3

ソーユー フーナ シェ シェーカツニ ナラニヤ
そういう ふうな ×× 生活に ならなければ

イカンノジャッターラ。(C ソー イーナ)
いけないのだったら。(C そう 言うな)

ケッコ コタエル。ウン。
がまんできる。 うん。

イマデモ ソーカ ユーテ ソー トシヨリジャケー
今でも そうか [と]いって そう 年寄りだから

ニク タベニヤ イカンジャノ
肉[を] 食べなければ いけないだとか

アー アノ サカナ タベニヤ イカンジャノ
ああ あの 魚[を] 食べなければ いけないのだ

ユー コト ヨー アノー シェンモン。
[と]いう こと あのう できないもの。

トシ トッターラ ソーユー フーナ
歳[を] とったら そういう ふうな[肉・魚は]

アンマリ スカンモン。(C ンー)
あんまり 好きではないもの。(C うん)

243A : ナイショクガ ナイショクガ ナイ ナイケンノー。
内臓が 内臓が ×× ないからね。

愛媛 11-4

244B：ホー ホー ホー ホー。

そう そう そう そう。

ナイショクガ (A ンー ナイショクガ ナイン***)
内職が (A うん 内職が ないの***)

ムカシワ ナカッテ。

昔は なくて。

ホジャケン アノ スミダス アンダリ スルグライノ コッテ
そうだから あの 炭俵[を] 編んだり するぐらいの ことで

マダ アノ ゴムノ ナニヤンカ スルンワ
まだ あの ゴムの 何やらを するのは

ハヤ モー ダイブ ヨノナカ (C サイキンヨ)
もう すでに だいぶん 世の中[が] (C 最近よ)

ヒラケテキタ トキニ (C サイキンヨ ンー)
開けてきた 時に (C 最近よ うん)

ソレガ ナイショクダッタダケノコッテ。
それが 内職だっただけのことで。

ウチラヤッタラ モー スミダスデモ アムカ
私らだったら もう 炭俵でも 編むか

ヨソノ シゴトンデモ イクカジャ ナカッタラ ナカッタ。
よその 仕事にでも 行くかで なかったら なかった。

カネモーケ ユー テワ。
現金収入 [と]いう 手は。

245A : ナー。 ソージャノ。
ねえ。 そうだね。

246B : ウン。 ナカッタンヨ。(A ー)

うん。 なかったのよ。(A うん)

ダイタイ ソノ カネモーケジャノ ユー モンワ ナカッタ。
だいたい その 現金収入だの [と]いう ものは なかった。

247A : マー ナニガ アノ オマエ カタノ オジーガ
まあ 何が あの おまえの とこの おじいさんが

ウケオーテ モンテ カミソ[49] ダイブ キッタワイナ。
請け負って 戻って コウゾ[を] だいぶん 切ったよね。

248B : ホーヨ。 ホーヨ。 アレオナー キリニ イッタヨ。
そうよ。 そうよ。 あれをね 切りに 行ったよ。

マイヒニ マイヒニ イタナー。
毎日 毎日 行ったね。

249A : ー カミソオノー。
うん コウゾをね。

250B : ウーン。 アレオノ キリニ イタ。
うん。 あれをね 切りに 行った。

愛媛 11-6

ホイデ ミナ アノ ヒノキノ ミーオ トリニ イクシノー。
そして みんな あの ヒノキノ 実を 採りに 行くしね。

251C：フーン。
ふうん。

252B：ウン。 ヒ ンー ヒノキノ ミー ジョーズナ ヒトワノ。
うん。 × うん ヒノキノ 実を 上手な 人はね。

ウチラー キー ノボルンワ コーイニ オーキーケンナー
私たちは 木に 登るのは このいうふうに 大きいからね

(C ンー ンー) ニガテジャケン ヨー セナンダケドノー。
(C うん うん) 苦手だから できなかったけれどね。

253A：キーワ タカイ トコ ノボッタヨ。 ワシラ。 {笑}
木は 高い 所[に] 登ったよ。 私たち。 {笑}

254B：ノボラナ アカンケドノー。
登らない[と] だめだけどね。

255A：ヒノキノ ミー *** トッタケン。
ヒノキノ 実を *** 採ったからね。

256C：カ カミソ キル テテ。
× コウゾ[を] 切る といったって。

257A：エー
ええ

258C : カミソ キル ***
 コウゾ[を] 切る ***

259B : アノ カミソ ユーテノー (A カミソ)
 あの コウゾ [と]いってね (A コウゾ)

アノー (C ヤナギ) ミズ ウーン ヤナギジャー ナインヨ。
あのう (C 柳) 水 うーん 柳では ないのよ。

11↑12

コー アノー シューキオ エタ トコニノー コー アッテ
こう あのう 湿り気を 得た 所にね こう あって

ホイテ ソレオ コー アノ キッタラノー カワガ ムケルン。
そして それを こう あの 切ったらね 皮が むけるの。

ズルズル ズルズル ムゲル キーガ アルンヨノー。
ずるずる ずるずる むける 木が あるのよね。

260A : ウーン。 カミソ ユーテ (B ウン)
 うーん。 コウゾ [と]いって (B うん)

ナニヨ カミニ ナルヤトヨ。
何よ 紙に なるもののよ。

261C : ウン。
 うん。

262B : ウン。 ウン。 ウン。 ウン。 アレガ アルヨ。
 うん。 うん。 うん。 うん。 あれが あるよ。

愛媛 12-2

263A : ソレ ム ムカシノ アノ ミツマタ [50] ノナー
それ × 昔の あの ミツマタのね

(B アノ アッコノノー アノ ナニー アノ)

(B あの あそこのね あの 何 あの)

ミツマタノ イッシュヤケドガ
ミツマタの 一種だけれど

(B アレカラ アノ Cサンカタノ) ミツマタヨリワ

(B あれから あの Cさんのところの) ミツマタよりは

264B : オクノノー アッコノ ニーダノ オクノ アノ *** ノー
奥のね あそこの 新田の 奥の あの *** ね

265C : ヤマノ カミ イタラナー (B ウン。 ヤマノ カミノ)
山の 上[に] 行ったらね (B うん。 山の 上の)

アノ ヤナギワ アル。
あの 柳は ある。

266B : ウーン。 アレヨ。 (C ヤナギ) ヤナギ ユーカノ
うーん。 あれよ。 (C 柳) 柳 [と] いうかね。

(C ヤナギ ユーンヨ) アレ カミソノ コトヨ。

(C 柳 [と] いうのよ) あれ[が] コウゾの ことよ。

ウン アイニ ユー コトヨ。 シー
うん ああいうふうに いう ことよ。 うん

愛媛 12-3

267A : *** アレノ ホーガ カミガ ホントノ モンガ
*** あれの ほうが 紙が ほんとうの ものが

デキルノヤケナ。 (C ウーン)
できるのだからね。 (C うん)

アレオ ダイタイワ ムカ アノ ムカシワ アレオ
あれを だいたいは ×× あの 昔は あれを

シヘーニ ショットタンヨ。 (C ウン)
紙幣に していたのよ。 (C うん)

ソノ カミソデ トッタ カミオ。
その コウゾで とった 紙を。

268C : ウーン。 ソレ
うーん。 それ

269A : ミツマタ ミツマタヨリ マダ エー (C エー)
ミツマタ ミツマタより まだ いい (C ええ)

エー カミガ デキルンデナ。
いい 紙が できるのでね。

270C : ウン ウン ウン
うん。 うん。 うん。

271B : ホヤケド アレ トリニ イッタヨ。 (A ーン)
そうだけれど あれ[を] 採りに 行ったよ。 (A うん)

愛媛 12-4

マイヒニ マイヒニ。 ホイテ アノ アッチノ アノ ナニ
毎日 毎日。 そして あの あっちの あの なに

ノギ[51]ノ ウエノ ホーニモ アッタヨ。(C アー ***)
野木の 上の 方にも あったよ。(C ああ ***)

アレオ ンー アノ コー タニデノー アッコニ トリニ イッタ。
あれを うん あの こう 谷でね あそこに 取りに 行った。

アノ ヒノキノ ミーワ エー トラナンダカイ。
あの ヒノキノ 実は 採ることができなかったな。

カラダガ オーキーケン キー ヨー ノボランノデ。
体が 大きいから 木に 登ることができないので。

アレワ ヨー トラナンダ。
あれは 採ることができなかった。

272A：ヒノキノ ミーワ オトコガ オラン トコニワ
ヒノキノ 実は 男が いない 所では

エー トラナンダ。
採ることができなかった。

273B：ウーン。アレワ ヨー トラナンダ。
うーん。あれは 採ることができなかった。

274A：ワシワ マタ ヒノケノ ミワ ダイブ トッタケンネヤ。
私は また ヒノキノ 実は だいぶん 採ったからね。

275B : アー ホージャロー。 ウーン。
ああ そうだろう。 うん。

276A : ヒノキノ ミー トッテ マー
ヒノキノ 実を 採って まあ

277B : アンナ カミノ オバサンガ ダイブ トッタ。
あの 上の おばさんが だいぶん 採った。

(A アレ ダイタイ) アノ ヒトガ

(A あれ[は] だいたい) あの 人が

278C : ウーン。 フーン。
うん。 ふうん。

279A : ダイタイ ワシ ダイタイ ワシガ ウケオーテ
だいたい 私 だいたい 私が 請け負って

モンタンジャケンノ。
戻ったのだからね。

280B : ウン。 ウーン。
うん。 うん。

281C : ウン。 ウーン。
うん。 うん。

282A : ウケオーテ モンタンジャ ナーインヨ。(B ウン)
請け負って 戻ったのでは ないのよ。(B うん)

愛媛 12-6

イネ カリヨッタラノ (B ウン)

稲[を] 刈っていたらね (B うん)

ココ アノ オマエガ オマエ トコノ ソノ ムカイノ

×× あの ×××× おまえ[の] 所の その 向かいの

アノ オモヤニ ツクットル ブンデ

あの 母屋に 作っている 分[=田んぼ]で

イネ カリヨッタンジャ。(B ウン)

稲[を] 刈っていたんだ。(B うん)

アッコデ イネ カリヨッタラ ホイタラ アノ

あそこで 稲[を] 刈っていたら そしたら あの

X4サン ユーテ キタンヨ。(B アー)

X4さん [と]いって 来たのよ。(B ああ)

アノ ヒト ドコゾニ ヒノキノ ミー トツテクレル

あの 人[が] 「どこかに ヒノキノ 実[を] 採ってくれる

ヒト ナカローカ ユーテ。(B フーン)

人[は] いないだろうか」 [と]言って。(B ふうん)

ヒノキノ モモオ トツテクレル ヒト ナカローカ

「ヒノキ 桃[=実]を 採ってくれる 人[は] いないだろうか」

ユーテ。(B フーン)

[と]言って。(B ふうん)

12↑13

愛媛 13-1

ヨーイ オマエ コーコー ユーガ トッテ アゲーヤ
「おーい おまえ こうこう 言うが 採って あげろよ」

ユーテ X5ツァンヨ。(B シー)

[と]言って X5さんよ。(B うん)

トッタレーヤ ユーテ。

「採ってやれよ」 [と]言って。

サー ヒノキノ モモー トレン コトワ ナイワイナー
「さあ ヒノキノ 桃[=実]を 採れない ことは ないよね」

ユーノガ ハジマリジャッタンヨ。(C アー アー)

[と]いうのが はじまりだったのよ。(C ああ ああ)

ホイデ ワシガ ウケオッテノー。(C アー)

それで 私が 請け負ってね。(C ああ)

ホイカラ ミナニ アノ トッ トッテクレンカ。

それから みんなに 「あの ×× 採ってくれないか。

コーコージャガ ユーテ タノンデ トッテモライハジメテ
こうこうだが」 [と]言って 頼んで 採ってもらいはじめて

アレオ ゴロクネン ヤッタケンノー。

あれを 5、6年 やったからね。

283B : ナガイ アイダ ワリアイ ナガカッタノ アレー。 ウン。

長い 間 わりあい 長かったね あれは。 うん。

愛媛 13-2

カミソモ ホヤケド ナガカッタゼ アレ。
コウゾも そうだけれど 長かったよ あれ。

284A : カミソモ ナガカッタガ (B ンー アレモ ナガカッタ)
コウゾも 長かったが (B うん あれも 長かった)

カミソワ ソヤケド イチネン イチネン キッタラ
コウゾは そうだけれど 1年 1年 切ったら

オマエ アートエ フトランノヤケン。
おまえ 後へ 大きくならないのだから。

285B : ホーヨ。 ネーカラ キルケンノー アレワー。
そうよ。 根から 切るからね あれは。

(A *** ネーカラ キル)
(A *** 根から 切る)

アレワ ネー ネーカラ キルケンノー。 (C ウン)
あれは ×× 根から 切るからね。 (C うん)

286A : ネーカラ キル *** フトランノヨ。
根から 切る *** 大きくならないのよ。

287B : ウン。 ホーヨ。
うん。 そうよ。

288A : ヒノキ ヒノキノ モモワ マイトシ ナルンニヤガ。
ヒノキ ヒノキの 桃[=実]は 毎年 なるのだが。

愛媛 13-3

289B : ホーヨ。(A ダーイブ イタヨ)
そうよ。(A だいぶん 行ったよ)

アレワ ホヤケド イチ イチンチカ
あれは そうだけれど ×× 1日[ほど]しか

ナガモチワ セナンダノ。 チートナイダー オイタラ
長持ちは しなかったね。 少しの間 おいたら

ミーガ パーント ワレテ デヨッタノー。
実が パーんと 割れて 出ていたね。

290A : オー アン (B ノー) アンマリ (B ナー)
ええ ×× (B ね) あまり (B ね)

ホシタラ (B ウン。ホシタラノー)
干したら (B うん。干したらね)

デルンジャケー。
[実が]出るのだから。

291B : アノ ミーガ ポーント ナカカラ アノ フィタラ
あの 実が ポーント 中から あの 吹いたら

トブヨーニ ナッタンジャケン トー。
飛ぶように なったのだから と。

13↑

—— 中 略 ——

愛媛 14-1

292B : ムカシワ ナニヤラジャッタナー。

昔は 何やらだったね。

↑14

アノ コンナ タケノ ナーガイ ナニヤラデ

あの こんな 竹の 長い 何やらで

ヒャークハットー[52] ジャ ユーテ アノ コシラエテ

百八灯だ [と]いって あの 作って

ホイテ ジブントコカラ オカズ コシラエテナー。

そして 自分の家から おかず[を] 作ってね。

293A : ムカシワ ムカシワ (B ンー) ナンジャッタワイ。

昔は 昔は (B うん) 何だったよ。

アノー タケノ コノグライナ ヨンシャクグライニ キットッタ

あのう 竹の このぐらいな 4尺ぐらいに 切っていた

タケオナー。(B コノ) ワッテナ。(B コノ ワッテ)

竹をね。(B この) 割ってね。(B この 割って)

ホイデ コンナ タバオ サンバ コシラエテナー。

そして こんな 束を 3把 作ってね。

エー アン イッコノ ウチニ。(C ウン)

ええ ×× 1軒の 家に。(C うん)

ソレオ モッテキテ ホイテ ソレデ ヒーオ タイテナ。

それを 持ってきて そして それで 火を たいてね。

愛媛 14-2

294B : オミヤノ マエデ。 ***ミヤノ マエデ。
お宮の 前で。 ***宮の 前で。

295C : オミヤノ マエデ (B ンー)
お宮の 前で (B うん)

296A : *** アッコノ タテイシノ トコデ。(B ウン)
*** あそこの 立石の 所で。(B うん)

297C : ウン。
うん。

298A : ソコデ ドンドン ドンドン ヒー タイテナー。
そこで どんどん どんどん 火を たいてね。

ホレデ アノ ヒーオ ツケテ。
それで あの 火を つけて。

299C : アレ マタ ***** ドガイナ コト ションジャロ [53]
あれ また ***** どんな こと[を] しているんだろう

300A : ホイテ ナンジャガナ。 コドモガ ソレー カタイデ ハシルン。
そして 何ですよ。 子供が それを 担いで 走るの。

(C ウン) (B ウン) ソノ ヒーオ カタイデナ。

(C うん) (B うん) その 火を 担いでね。

ドンドン ドンドン ハシルン。
どんどん どんどん 走るの。

愛媛 14-3

アッコー モッテイテ オキ ソコー モッテイテ オキー
あそこに 持って行って 置き そこに 持って行って 置き

ターノ フチマワリニナ。 イネ ヤカン トコデ。
田の 周囲にね。 稲[を] 焼かない 所で。

モッテイテ (C ホーヨ。 *****) (B ンー)
持って行って (C そうよ。 *****) (B うん)

オイトイテモロタ。
置いておいてもらった。

301B : チョット ヤメテ モラウ *** [54]
ちょっと やめて もらおう ***

302A : イネノ ムシガ メー ムイダ ユーテ。
稲の 虫が 目を むいた[=驚いた] [と]言って。

(D イーデス。 イーデス イーデス) [55]
(D いいです。 いいです いいです)

アノ ヒルニワ ヒルアイダワ ナニ ショッタンヨ。
あの 昼には 昼の間は 何[を] していたのよ。

アノ クミノ ヒトガ ヨッテ
あの 組の 人が 集まって

ホイデ アノ オニギリオ コシラエテナー。
そして あの おにぎりを 作ってね。

303B : アレワ Aサン ドヨーギト [56] ジャケン。

あれは Aさん 土用祈祷だから。

304A : ドヨーギトジャケドガ

土用祈祷だけれど

コノ フーチンサイ [57] ニモ ヤリヨッタンヨ。

この 風鎮祭にも していたのよ。

305B : イン フーチンサイニモ シヨッタン。(A シー)

×× 風鎮祭にも していたの。(A うん)

ドヨーギトニワ シヨッタンヨ。(A フーチンサイワ ***)

土用祈祷には していたのよ。(A 風鎮祭は ***)

オニギリワ イッケーニ コドモニ ナーンボ ユーテノ。

おにぎりは 1軒に 子供に いくら [と]いってね。

(C ウン) アノ キナコ ツケタ オニギリオノ。

(C うん) あの 黄粉[を] つけた おにぎりをね。

(A シー) ミンナガ モライニ イクンヨ。

(A うん) みんなが もらいに 行くのよ。

イエ イッケンニ コドモガ ナンニン オルケン

家 1軒に 子供が 何人 いるから

ヒトツアテグライ クレヨッタンヨ。

一つずつぐらい くれていたのよ。

愛媛 14-5

ソノカワリ オコメ ダシヨッタノヨ。(C ンー)

そのかわり お米[を] 出していたのよ。(C うん)

ホシェ ソレ クレヨッタ。

そして それ[を] くれていた。

ウチラ ホヤケン ソレ モライニ イクンガ

私など[は] そうだから それ[を] もらいに 行くのが

ヒトーリジャロー。(A ンー)

一人だろう。(A うん)

ホヤケン ヒトーツシカ クレンノデノ。

そうだから 一つしか くないのでね。

ホシタラ アノ ウエノ オイサンガノー。

そうしたら あの 上の おじさんがね。

ホイタラ コレ ヤル ユーテ

そうしたら 「これ[を] やる」 [と]言って

ヒト フターツグライ クレル。 ソレ モローテ モッテ

×× 二つぐらい くれる。 それ[を] もらって 持って

トッ トッ トッ トッ モドッテ (A {笑})

とっ とっ とっ とっ[と] 帰って (A {笑})

ホンデ タベヨッタノヨ。

そして 食べていたのよ。

ソレガノー ジブントコデ イマジャッタラノー
それがね 自分の家で 今だったらね

ソナナ。 ソレガ タノシミデ。
そんな[ことはしないのに]。それが 楽しみで。

14↑15

(A タノシミデ) (C *** ンー ンー)

(A 楽しみで) (C *** うん うん)

ヨー フーチンサイニノー ヨー ソノ オニギリ
よく 風鎮祭にね よく その おにぎり[を]

モライニ イクンガ タノシミジャ ***
もらいに 行くのが 楽しみだ ***

306A : アノー フーチンサイノ オリモ ソレ ショッタワイ。
あもう 風鎮祭の 時も それ[を] していたよ。

(B ウーン) ホレワ アノ コドモニ ハシラシタノー。

(B うん) それは あの 子供に 走らせたね。

(B ホー。 ホー。 ホー) ハシラシタノジャ

(B そう。 そう。 そう) 走らせたのだ

307B : アンナ カミト ノ (A ン)
あの 上と ね (A うん)

アッチ シモト カミト
あちら[の] 下と 上と

愛媛 15-2

308A：ハラガ ハラガ ヘルシノ スルケンノー。（B ウン。ホイテ）
腹が 腹が 減るしね するからね。（B うん。そして）

ホヤケニ ヤシャクニ クワショッタンヨ。
そうだから 夜食に 食べさせていたのよ。

309C：ホー。 インネノ ムシガ メー ムイダ ユーテナー。
そう。 稲の 虫が 目を むいた [と]言ってね。

310A：エー。 ***
ええ。 ***

311C：***ヤロ ウン。
***だろう うん。

312B：***** ユーテナー。
***** 言ってね。

313A：ホイデ アノ ヤスマシヨ ハシラシテイテ
それで あの ××××× 走らせていって

キーオ カタイデ モッテイテ ホーボーノ ターノ フチマワリー
木を 担いで 持っていって 方々の 田の 周囲に

オイトイ （B ホー。 ホー。 ホー。 ホー） オイトイテ
×××× （B そう。 そう。 そう。 そう） 置いといて

314B：アーノ ムカイニ オキヨッタノ。 カワエモ。
あの 向かいに 置いていたね。 川へも。

愛媛 15-3

(A オー。 オー) アッコノ カワエモ イキヨッタヨ。

(A ええ。 ええ) あそこの 川へも 行っていたよ。

315A : ホーボーイ イキヨッタ。(B ーン)

方々へ 行っていた。(B うん)

ホーボーイ イキヨッタンヨ。(B イキヨッタノ。 ウン)

方々へ 行っていたのよ。(B 行っていたね。 うん)

ヨルヤケンナー。

夜だからね。

316B : ヨルヨー。(A ン) ウーン。 ヨルジャケン。

夜よ。(A うん) うん。 夜だから。

アッコー イキヨッタワイ。

あそこへ 行っていたよ。

317A : ヨル ***

夜 ***

318B : ウーン。 ホイテ ヨルワー ***

うん。 そして 夜は ***

319A : ヒャクハチホン アノ サイトーイ ヒー ツケテ

108本 あの 採灯へ 火を つけて

ホイテ ナニ スルケン

そして 何[を] するから

愛媛 15-4

ヒャクハットージャジャノ ユーテ **
百八灯だだの [と]言って **

320B：イマワー (A ナルホドナ) アノー イマワ コノ クミデノー
今は (A なるほどね) あのう 今は この 組でね

アノ オカズ コシラエヨー。
あの おかず[を] 作るだろう。

ホイジャケド コノ アレワ シゴネングライ マエカラノー。
そうだけど ×× あれは 4、5年ぐらい 前から[で]ね。

ミンナ ソレマデワー ジブンゴ オカズ
みんな それまでは 自分自分で おかず[を]

コシラエテイキヨッタロー？ ノー。
作っていただろう。 ね。

321C：モッテキヨッタナ。
持ってきていたね。

322B：ウン。 モッテキヨットロ。 (C ンー ンー)
うん。 持ってきていただろう。 (C うん うん)

ジブン トコデ。
自分の 家で[作って]。

(C ンー ジブンガタニ オクグライワ モッテ) ウン。
(C うん 自分のところに 置くぐらいは 持って) うん。

愛媛 15-5

ジブン ガタノ モー ミンナガ モッテ (C ンー)
自分の ところの[ものを] もう みんなが 持って (C うん)

ヨッテ ホイテ オカズ コシラエテ
集まって そして おかず[を] 作って

オサケワ クミカラ デルンデノー。(C ウン。 ウン)
お酒は 組から 出るのね。(C うん。 うん)

ショッタケド イマワ モー ゼンブ コレ
[そうやって]していたけど 今は もう 全部[を] これ

クミガ モツヨーニ ナッタケンノー。
組が 持つように なったからね。

323A : ホイカラ オマエ モット ムカシワノー (B・C ンー)
それから おまえ もっと 昔はね (B・C うん)

コノ フーチンサイニワ (C ン)
この 風鎮祭には (C うん)

ダレデモ カマアン。(C ン)
誰でも かまわない。(C うん)

ダレデモ カマン。 キテカマワナンダン。(C フーン)
誰でも かまわない。 来てかまわなかったの。(C ふうん)

ウン。 ノミニ コイ イヨッタ。(B ンー) (C ホー)
うん。 飲みに 来い [と]言っていた。(B うん) (C ほう)

ホイデ クミニナー (C ン) サケ コーテ マットルケ
そして 組にね (C うん) 酒[を] 買って 待っているから

(B ソレワ シラン) ノミニ コイ
(B それは 知らない) 飲み来い

(C フン。フン。フン。フン)
(C ふん。ふん。ふん。ふん)

ホヤケニ サケノ スキナ トシヨリヤンカ
そうだから 酒の 好きな 年寄りなどは

ダーイブ ノミニ イキヨッタ。(C アー。アー)
だいぶ 飲みに行っていた。(C ああ。ああ)

ソレガナー (B ン) アノ オーザク[58] シトル モンガ
それがねえ (B うん) あの 大作 している 者が

ゼニ ヨーケ ダスンデナ。(C {笑})
銭[を] たくさん 出すのでね。(C {笑})

ホイデ (B ンー) チョッポリ ツクットル モンワー
そして (B うん) 少し 作っている 者は

マー ワリアイガ アノ チョッポリ ツクットル モンガー ア
まあ 割合が[少ない] あの 少し 作っている 者が ×

15↑16

ゴジッセン[59] ダスンヤッタラ オーザク シトル モナ
50銭 出すのだったら 大作 している 者は

愛媛 16-2

イチエンゴジッセンモ ニエンモ ダシタ。 ホカ ソノ
1 円50銭も 2 円も 出した。 ×× ××

ソノカワリ サケガ ナンジャ ハチジューゴセンカラ (C ウーン)
そのかわり 酒が 何だ 85銭から (C うーん)

キュージッセングライケナ セナー。
90銭ぐらいしか しない[のだから]。

ソレデ イットーグライ コーテナー。
それで 1 斗ぐらい 買ってね。

アノ ソコニ オイトルンヤケン。
あの そこに 置いているのだから。

324B : ドーモ アレギリワ[60]ノ ムラビトワ イチバン ウレシー。
どうも あれだけはね 村人は 一番 うれしい。

シー ウレ (A ノミ ノミニ イキヨッタ)
うん ×× (A ×× 飲みに 行っていた)

ヒトリジャケンノー ヨケ クレナンダワイ。
[私は]一人だからね たくさん[は] くれなかったよ。

325A : ホヤケン ワガ ワガ サイ[61]オノー コシラエテ
そうだから ×× 自分の おかずをね 作って

モッテイットラナンダラ サイガ ナイケン。
持っていったいなかったら おかずが ないのだから。

愛媛 16-3

(B ホーヨ。 オカズガ ナイン) ホヤケン

(B そうよ。 おかずが ないの) そうだから

サケノ サカナニ コシラエテ モッテイキヨッタンヨ。
酒の 肴に 作って 持っていったのよ。

326B : ミンナー サイ モッテキテノー。
みんなが おかず[を] 持ってきてね。

オベントバコカラ ナーニカエ イレテ ジューバコ イレテノー。
お弁当箱か 何かへ 入れて 重箱[に] 入れてね。

ミンナガ ジブンガ ナニシテクルンヨ。
みんなが 自分で 何[=準備]してくるのよ。

コノ シゴネン マー クミデ シハジメタンヨノー。
この 4、5年 まあ 組で し始めたのよね。

327A : ホーヨ。 アレ モー アーユー コト
そうよ。 あれ[は] もう ああいう[ような] こと[では]

ナンデ イカンケニ (B ウン)
何よ いけないから (B うん)

モー クミデ ヒトツニ マトメヨーヤ ユーテ
もう 組で 一つに まとめようよ [と]言って

クミニ ヒトツニ マトメタンヨ。
組に 一つに まとめたのよ。

愛媛 16-4

328B : ソー。 ソー。 クミデ シハジメタンヨ。 ウン。
そう。 そう。 組で し始めたのよ。 うん。

モー クミガ (A サーケン) ハジメテカラ
もう 組が (A そうだから) 始めてから

シゴネングライニ ナラノー。
4、5年ぐらいに なるよね。

329A : アー モー ゴネンモ ヒチネンモ ナロゾイノー。
ああ もう 5年も 7年も なるだろうね。

(B ウン ナルノー) ジュン ジューネンマデニワ ナラン。
(B うん なるね) ××× 10年までには ならない。

330B : ジューネンニワ ナラン。 (C ウン ナラン)
10年には ならない。 (C うん ならない)

マダ アンタラ ジューノ
まだ あなたたち ××××

(C ウン *** オトーサン[62] イキトル ゴロヤケン)
(C うん *** お父さん 生きている 頃だから)

ホージャロー。 ホジャケン マー シゴ ゴロクネンカノー。
そうだろう。 そうだから まあ 4、5 5、6年かね。

(C ンー) ヨー タットツテ ゴロクネンジャ。
(C うん) よく 経って[たとし]て[も] 5、6年だ。

(C ホージャ)

(C そうだ)

331A : ソー。 (C ウーン)

そうだ。 (C うん)

332B : ウーン ジューネンニ ナラン。 (A ナラン。 ナラン)

うん 10年に ならない。 (A ならない。 ならない)

ン。 マー ハジメタンガ ゴロクネングライジャ。

うん。 まあ 始めたのが 5、6年ぐらいだ。

ウーン。 ゴロク

うん。 5、6

333A : アノ ホーガ アノ ホーガ エーワイ。 (B ホーケニ)

あの ほうが あの ほうが いいよ。 (B そうだから)

ヒトツニ マトメテ ホイテー

一つに まとめて そして

(B ソー。 ソー。 ソー。 ソー) クミニ コシラエテ

(B そう。 そう。 そう。 そう) 組に 作って

ミンナガ ツイナ モン クーテナー。

みんなが 一緒の もの[を] 食べてね。

(B ホーヨ。 ホーヨ。 ホーヨ。 ウン)

(B そうよ。 そうよ。 そうよ。 うん)

愛媛 16-6

ホイデ イッパイ ノンデ ナンゾカンゾ ユー
そして たくさん 飲んで 何やかや 言う

334B : ハジメワ チョットシタ オカズジャッタケンド
初めは ちょっとした おかずだったけれど

(A カミサンニ オガム オガム)

(A 神様に 拝む 拝む)

シマイニワ ミンナ オリニ ナッテー
終わりには みんな[が] 折り箱に なってね

ホイテ モー オセックノ オベントト オンナシニ ナッ
そして もう お節句の お弁当と 同じに ××

ミンナー シトッタージャ ユータリ シテカラノー。
みんな していたのだ [と]言ったり してね。

イーヨッタワイ。 ソーユー フーニ ジュンジュンニ
言っていたよ。 そういう ふうに 順々に

ハデニ ナッタケンノー。 ホイテ ワカイ ヒトガ ジュンジュンニ
派手に なったからね。 そして 若い 人が 順々に

(C ソー。 ウン。 ウン。 ウン)

(C そう。 うん。 うん。 うん)

オベント スルヨーニ ナッタラ コー イマノ コドモガ
お弁当 するように なったら こう 今の 子供が

愛媛 16-7

(C ソーヨ。 ソーヨ。 ホージャ)

(C そうよ。 そうよ。 そうだ)

アノ キューショクニ オベント モッテイコー。
あの 給食に お弁当 持っていこう。

アーユー フーニ ハデニ ナッテキテ
ああいう ふうに 派手に なってきて

ホイデ ヤメタンジャロ。(C ウン。 ノー)
それで やめたのだろう。(C うん。 ねえ)

ハジメ マー ウチラガ ナニ コドモゴロジャッタラ
初め まあ 私たちが 何 子供の頃であったら

モー ミンナ オベントバコエ ナンデデモ
もう みんな お弁当箱へ 何をでも[入れて]

モッテキョットタンジャケド
持って行っていたのだけど

ソレガノー ソーユー フーニ ナランヨーニ ナッタ。
それがね そういう ふうに ならないように なった。

イマノ ワカイ ヒト オベント コシラエルンガ
今の 若い 人[は] お弁当[を] 作るのが

ジョーズジャケン オリ モッテキタン。
上手だから 折り箱[を] 持ってきたの。

16↑17

愛媛 17-1

オリモ　　オリモ　　マダ　オセックミタイニ　シテキチョッタ
折り箱も　折り箱も　まだ　お節句みたいに　してきていた

ユーテ。　　（C {笑}）　イーヨッタヨ。

[と]いって。（C {笑}）　言っていたよ。

ウエヘンノ　ヒトワ。

裕福な　　人は。

335C：ホージャロゾイナー。

そうだろうね。

336B：ウン。ウエヘンノ。

うん。裕福な[人は]。

ソレガ　ソノ　ワカイ　ヒトノ　ヨンナ

それが　その　若い　人の　×××

ヒトノ　ヨン　ナットロー。

人の　世に　なっているだろう。

ホヤケン　ジュンジュンニ　キレーニ　シティク。

そうだから　順々に　きれいに　していく。

ヒトナカエ　デルンジャケン　オモテ

人中へ　出るのだから　[と]思っ

（C　ウン。　ウン。　ウン）

（C　うん。　うん。　うん）

愛媛 17-2

ジュンジュンニ キレーニ シテキヨル ユータ。 ウーン。
順々に きれいに してきている [と]言っていた。 うん。

ムカシノ ヒトワ ソンナ コト シヤ センノジャケンノー。
昔の 人は そんな こと しは しないのだからね。

ナンデモ モッテイク。
何でも 持っていく。

337A : アー。 ムカシノ ヒト *** ソンナ コト
ああ。 昔の 人 *** そんな こと [=きれいにすること]

シヤ センモン。 ソコエ
しは しないもの。 そこに

(B ウン モー ナンデ アル モンデ スマシヨッタ)
(B うん。 もう 何で[も] ある もので すませていた)

アリヤ アリアワセモングライノ コトジャッタンヨ。
××× ありあわせものぐらいの ことだったのよ。

338B : ホーヨ。 ホーヨ。 ソレガ ワカイ ヒトノ ヨニ ナッタラ
そうよ。 そうよ。 それが 若い 人の 世代に なったら

ヤッパシ キレーニ シハジメタン。
やっぱり きれいに し始めたの。

339C : フーチンサイワ ボーサン クルンカナ。
風鎮祭は 坊さん[は] 来るのかね。

愛媛 17-3

340A : ボーサンワ キャー セン。

坊さんは 来は しない。

341B : タユーサンヨノー。 (A タユーサン)

大夫 [= 神主] さんよね。 (A 大夫さん)

(C タユーサンカ) バンニ タユーサンガ クルノ

(C 大夫さんか) 晩に 大夫さんが 来るの

342A : バンニ タユーサンガ キテ (B ホシテ ウーン)

晩に 大夫さんが 来て (B そして うーん)

ホイテ オハライ オハライ アゲテナ

そして お祓い お祓い[を] あげてね

343B : ンー オミヤデノ (C ン) スルンヨ。

うん お宮でね (C うん) するのよ。

ホイテ ドヨーギトン ナッタラ オボーサン

そして 土用祈祷に なったら お坊さん

(C アー ドヨーギトニ アルノ)

(C ああ 土用祈祷に あるの)

ウーン。 ドヨーギトワ。

うん。 土用祈祷は。

344A : ホイデモ クミ クミジューノ ヒトガ

それでも ×× 組中の 人が

愛媛 17-4

クミジューノ ヒトガ ヤッテ。 ホイテ ナニ スルノヤケドガ。
組中の 人が やって。 それで 何 するのだけど。

345B : ウン。 アノ オーキン ドヨーギトワ

うん。 あの ×××× 土用祈祷は

イマワ スルカ センカ シランケド
今は するか しないか 知らないけど

オーキナ ジュズデノー コナーニ マワシテノー
大きな 数珠でね こんなに[して] 回してね

アノ Cサン (C アリヤ センワイ)
あの Cさん (C あれは しないよ)

イシズツツァン[63] (C ウン)
石鎚山 (C うん)

イシズツツァン イタラ ショーゲ。 (C ウン)
石鎚山[へ] 行ったら するだろう。 (C うん)

アンナン。 モッテタ マエワー (C *****)
あのようなもの。 持っていた、前は。 (C *****)

ホテ オハンニャサン[64] ツクツタリノー (A ホーヨ)
そして お般若さん[を] 作ったりね (A そうよ)

(C ***サンジャ セナイ) エー?
(C ***さんでは しない) え?

愛媛 17-5

(C ***サンジャ セナイ) ホーヨノー。(C ー)

(C ***さんでは しない) そうよね。(C うん)

オハンニャサン ユーテ アノー クミガ ジュンジュニ ナッテ
お般若さん [と]いって あのう 組が 順々に なって

オーケナ カークイ マー ムカシノ アノー カゴミタイナノノ
大きな 四角い まあ 昔の あのう 駕籠みたいなもの

オーケナ カザリ アン ナンオ
大きな 飾り あの 何を

シタ シタオ イタリ キタリネー *** オーフクシヨッタノー。
下 下を 行ったり 来たりね、 *** 往復していたね。

ソーラ オハンニャサンガ キタゾー ユーテ
「そら お般若さんが 来たぞ」 [と]言って

アノシタ イテ タッタ タッタ イテ
あの下[に] 行って タッタ タッタ 行って

シタ クグッテキテサー (A アー)
下[を] くぐってきてね。(A ああ)

マー ソレデ アノー (A ダイタイ)
まあ それで あの (A だいたい)

ビョーキセントモ ナントモ カギランケドナー
病氣しないとも 何とも かぎらないけれどね

愛媛 17-6

(A ダイタイ センガンキョーガ イレテ アッタンヤケドナ)

(A だいたい 千願経が 入れて あったんだけどね)

ホー ホー ホー (C ウーン) ウーン (A ***)

そう そう そう。(C うーん) うん (A ***)

ワリアイ ホヤケド アレ オオキカッタデ。

わりと そうだけど あれ 大きかったよ。

タット コノクライ アッタデー。(C ー) ノー

/// このくらい あったよ。(C うん) ね、

コノ コノ ハンダイ[65] グライノ タケ アッタヨ。

この この 飯台くらいの 高さ[が] あったよ。

346A : サン アー サンジャク (B ー) ヨコハバガ サンジャクニ

×× ああ 3尺 (B うん) 横幅が 3尺に

タテガ ヨンシャクグライ アッタゾー (C フーン)

縦が 4尺くらい あったよ (C ふーん)

347B : アレワ イキモドリスルンヨ。

あれは 行ったり戻ったりするのよ。

ミンナ クミノ ヒトガノー (C ー) イテ

みんな 組の 人がね (C うん) 行って

ホテ オハンニヤサン ****

そして お般若さん ****

348A : アー アノー マダー ナニー エンプクジ[66]ニ マダ
ああ あのう まだ 何 円福寺に まだ

ナンジャロガナ ニワノ ソラニ ツ ツッテアロガナー
何だろうね 庭の 上に × つりさげてあるだろうね。

(C ウン オカゴ ツッタアル) アレ

(C うん お駕籠 つりさげてある) あれ。

17↑18

349B : シ オカゴジャーナイ (C アレ オカゴヨ)
うん お駕籠ではない (C あれ[は] お駕籠よ)

オカゴジャー ナインデ Aサン
お駕籠では ないのよ、 Aさん。

350C : アレ オカゴヨ
あれ[は] お駕籠よ。

アレ オボーサン ノリヨッタ オカゴヨ
あれ お坊さん[が] 乗っていた お駕籠よ

351B : ウン アレワーノー オハンニャサンワー チガウゼー
うん、 あれはね、 お般若さんは 違うよ。

352A : イヤ アコニー ノソラニ アゲテー オリヨッタンジャガノー
いや、 あそこに //に あげて いたのだがね、

オハンニャサンノ ナニモ
お般若さんの 何も

愛媛 18-2

353C : アルンジャローケド モー ナイワイ
あるのだろうけれど もう ないよ

(B ムシガ クットルワイノー ンー ***)

(B 虫が 食っているよね うん ***)

ボロボロデ ヤイテシモタンジャローナー
ぼろぼろで 焼いてしまったのだろうね。

(A モー ヤイテシモタンジャロカ)

(A もう 焼いてしまったんだろうか)

アレワー オカゴヤケンナー オ オ オテラノ ***
あれは お駕籠だからね、 × × お寺の ***

354B : ウン オカゴワ チガウンヨ オカゴヤ ナシデ
うん お駕籠は 違うのよ お駕籠では なくて

オハンニャサン ユーテ アノ コッカラノー (C ウン)
お般若さん [と]いって あの ここからね (C うん)

コナイダグライマデ クミノ ヒトガ ロクシチジュウモ
この間くらいまで 組の 人が 6,70[人]も

ダーブコト イッテノー ミンナガ (C ウーン)
大勢 行っってね、 みんなが (C うん)

カールガールニ アノ ナニー (A カイテ モドリヨッタ)
かわるがわるに あの 何 (A 担いで 戻っていた)

愛媛 18-3

ウン カイテ モンテ ホデ ヨツカド ヨツカドエ
うん、担いで 戻って そして 四つ角 四つ角へ

アノ ユーテクレルンデノー (C ウン)
あの 言ってくれるのね、 (C うん)

オハンニャサン キタゾ ユーテ
「お般若さん 来たぞ」 [と]言って

ホイテ ミンナガ ダーット イテノー {笑}
そして みんなが ダーッと 行ってね {笑}

オーフク ソノシタ クグッテクルンヨ
往復 その下[を] くぐってくるのよ、

ムコ イタラー {笑} コンド コッチ モトニ モドッテ
向こう[に] 行ったら {笑} 今度 こちら 元に 戻って

(C フン フン) クグッテクルンヨ。
(C ふん ふん) くぐってくるのよ。

ホタラ アレー シトイタラ
そうしたら あれ しておいたら

ビョーキニナランカ シャーンケド カカラン テヤ
病気になるのか 知らないけど [病気に]かからない とか

(A ダイタイノー) ユーテノー (C フーン)
(A だいたいね) いってね、 (C ふうん)

愛媛 18-4

ホヤケン オハンニャサンガ キタゾー ユータラ
そうだから、「お般若さんが 来たぞ」 [と]言ったら

ミーンナガ ダン ダン ダン ダン デテイテノー
みんなが ダン ダン ダン ダン 出ていってね、

ホテ オハンニャサン クルン
そして お般若さん[が] 来るの

355A : ダイタイ センガンキョーオ イレタンヤッタンヤケド
だいたい 千願経を 入れたのだったのだけれど

センガン イレタラ ***
千願[経を] 入れたら ***

356B : オーキー アノ ジュズガ アロ (C ウン ウン)
大きな あの 数珠が あるだろう (C うん うん)

アレオ グルリ アノ ナンマイダ ナンマイダ
あれを ぐるり[と] あの 「なんまいだ なんまいだ」

イイモッテ コー グルグル グルグル マワスンヨノー
[と]言いながら こう ぐるぐる ぐるぐる 回すのよね

18↑

愛媛県松山市1981注記

〔1〕ヌケトッタ

「ヌケル」は、学校を卒業する。

〔2〕キン

原因・理由を表すには、この方言では「ケン」がもっとも一般的であるが、「キン」も散見される。

〔3〕ケーエ

軽い疑問の「ケ」が「ケーエ」となって、「卒業していなかったと思うけど、卒業していたのかねえ」と、深い疑問を表現している。

〔4〕ケー

「ケー」は、軽い疑問表現として親しい間柄で用いられる。

〔5〕イタ

行った。「イッタ」は「イタ」となる。この傾向は、きわめて特徴的に認められる。

〔6〕ソラヤマ

地名。空山。

〔7〕ナガダバ

地名。長駄場。

〔8〕クミ

組。地域社会で生活の必要上結ばれた組織。

〔9〕モンテ

戻って。帰って。「モドッテ」からきたもの。

〔10〕カチヤマ

地名。勝山。

〔11〕ドーシン

動員。ある目的のために、人や物をかり出すこと。

〔12〕クボノ

地名。窪野。

- [13] マダ
「もう」の言い誤りと思われる。
- [14] イデグチ
地名。出口。
- [15] アカダ
地名。赤田。
- [16] ホーエムイテ
「～エムイテ」は、動作・作用の方向を表す。
- [17] サルボ
地名。
- [18] アイナシニ
まもなく。「アイダナシニ」の省略。
- [19] サクラ
地名。桜。少し山間部寄り。旧三坂峠道に沿った集落。
- [20] ケレ
「ケレ」は、原因・理由を表す少し古風な言い方。
- [21] ユータイノー
「ユータワイノー」の短縮形。
- [22] オワエラレテ
「オワエル」は、ずっと追っていく、追いかける。「オワエラレテ」は、その受身表現。
- [23] コボル
地名。「コボル」は、「コボリゴエ」の省略。
- [24] ナルノカワ
地名。
- [25] サイソーチ
採草地。村有林。
- [26] モチブン
持ち分。私有分。

〔27〕 イシグロ

石を集めて高く盛り上げて、お墓としたもの。

〔28〕 セズクニワ

「センズクニ」の「ン」が脱落して、「セズクニワ」となっている。「～ズク」は、「～のまま」。多く、打消の助動詞を受けて、「～しないまま」の意味で用いられる。

〔29〕 ギヤカマシー

「ヤカマシー」を強調し、口汚くののしった言い方。「ジャカマシー」と同じ。

〔30〕 ツチコーシテ

「ツチ」は、動詞の上につけて、荒々しい動作でそのことをすることを示す接頭語。「ブチ」とも。「コース」は、壊す。

〔31〕 サンカー

「サンカエリ」の省略形。3往復のこと。

〔32〕 トベ

地名。砥部。

〔33〕 カラツヤマ

唐津山。瀬戸物焼窯。

〔34〕 ハズンドル

ここでは、「ハズム」は、調子がよい、景気がよい、という意味で用いられている。

〔35〕 タテンボ

立て棒。縄をなうための道具だと思われる。

〔36〕 バラスワリ

バラス割り。「バラス」は、道路・線路などに敷く砂利・砂礫。バラスト。

〔37〕 カークイ

四角い。角ばっている様子。ここでは、直方体。

〔38〕 ツイ

対。一緒。同類。

- [39] クレヤル
クレテヤル。あげる。
- [40] エッポド
ヨッポド。よほど。
- [41] セッキ
節季。盆・暮や節句前に、商店が売上げの総勘定・精算を行う時期。
- [42] オナゴシ
「オナゴシュ」が変化したもの。女衆。女の人たち。男の場合は、「オトコシ」, 「オトコシュ」, 男衆。
- [43] ワラ
「ワ」は、我。自分。「ラ」は接尾語。
- [44] トメグサ
止草。田草とりで三番草をとった後、20日目くらいに行う最後の草とり。
上草（アゲグサ）。
- [45] ハナカズキ
花かずき。稲の花が垂れ下がること。その時期。
- [46] モトカキ
元かき。稲株の根元を耕すこと。
- [47] イマノ
「昔の」の言い誤りと思われる。
- [48] アイーナ
「アーユーヨーナ」の省略形。
- [49] カミソ
植物名。紙麻（カミソ）。楮（コウゾ）。カゾ。クワ科の落葉低木。山地に
自生し、また、各地で栽培する。葉はクワに似て大きく、春、薄い黄緑色
の花を開く。6月頃、キイチゴに似た実が赤く熟す。雌雄同株。木の皮の
繊維を和紙の原料とする。コウゾは、カミソの音便。
- [50] ミツマタ
植物名。三桮（ミツマタ）。三叉（ミツマタ）。ジンチョウゲ科の落葉低木。
葉は披針形。冬の間中、各枝先に筒状の白いつぼみを密に下垂してつけた

まま過ごし、早春、黄色の頭状花を開く。枝は3本ずつに分かれる。古く中国から渡来、樹皮の繊維は強く良質である。和紙の原料にするため栽培。和紙は良質で虫害を受けにくく、紙幣や証券用紙に使われる。

[51] ノギ

地名。野木。

[52] ヒャクハットー

百八灯。百八連灯。仏具の一つ。蓮の花模様のついた108本の灯明。

[53] アレ マタ **** ドガイナ コト ションジャロ

談話収録中に外で行われている剪定をとがめることば。ここの話題とは非連続。

[54] チョット ヤメテ モラウ ***

談話収録中に外で行われている剪定をとがめることば。ここの話題とは非連続。

[55] イーデス イーデス

話し手B氏の発言に対することば。ここの話題とは非連続。

[56] ドヨウギト

土用祈祷。土用の時期に行う祈祷のことか。

土用は、陰暦で、二十四節気中の立春・立夏・立秋・立冬の前各18日間。陰陽五行説で、春・夏・秋・冬をそれぞれ木・火・金・水に配し、土を各季節の終わりの18日間にあてはめたことからいう。一般には、夏の土用のこと。7月20日頃から立秋の前日までの1年中で最も暑い時期。

[57] フーチンサイ

風鎮祭。暴風を鎮めるための祭。風祭。

[58] オーザク

大作。たくさん作っている、大百姓のこと。

[59] ゴジッセン

「十銭」の発音は、この方言では、「ジュッセン」とはならないで、「ジッセン」が一般的である。

[60] アレギリワ

「ギリ」は、「限り」という名詞から転じた副助詞「キリ」。この方言では、

「～だけ」という場合には、最も多く用いられている。

[61] サイ

菜。副食物。おかず。添え物。

[62] オトーサン

話し手C氏の夫。

[63] イシズツツァン

石鎚山（イシズチサン）。愛媛・高知の県境にある山。四国山地中の最高峰。山頂に石鎚神社がある。この土地の人々は、「イシズツツァン」と、敬愛の念をこめて呼ぶ。

[64] オハンニャサン

「ハンニャ」は、「般若経」の省略。経文を入れた木箱の下をくぐって、1年間の無病息災などを祈願する行事だと思われる。

[65] ハンダイ

飯台。何人かが囲んで一緒に食事をするように作った台。食卓。ちゃぶ台。

[66] エンプクジ

円福寺。愛媛県松山市木屋町にある寺院のことと思われる。

Ⅱ. 高知県高知市

1977

高知県高知市



高知県高知市1977話者・担当者

「各地方言収集緊急調査」

話者	今井 幸澄 岡林 静子
司会者	川崎 重幸
収録担当者	木野田 れい子（現姓・篠木）
文字化担当者	木野田 れい子（現姓・篠木）
共通語訳担当者	木野田 れい子（現姓・篠木）
解説担当者	木野田 れい子（現姓・篠木）

（敬称略 項目別50音順）

「全国方言談話データベース」

編集担当者	佐藤 亮一 江川 清 田原 広史 井上 文子
編集協力者	吉田 鈴香 鳥谷 善史 熊谷 康雄

高知県高知市1977解説

収録地点名 高知県高知市^{りょうけ}領家、^{はりはら}針原

収録地点の概観

位置

高知市は、高知県の中央やや東寄り、土佐湾に面して位置する。高知市の西北部、土佐郡鏡村と接する山間部には、領家、針原、^{なめがわ}行川、^{じょうり}上里などの小集落が形成されている。

交通

高知市のほぼ中心部の^{ちよりちょう}知寄町より朝倉を経由し、バスで約50分。行川が終点。行川以外の集落には公共交通の便はなく、もっぱら自家用車や徒歩である。

地勢

鏡川の支流である行川の流域に位置する。平地はほとんどなく、人家はかなり傾斜した山腹に点在している。

行政区画

1871(明治4)年、高知県に所属。1889(明治22)年に十六村、1928(昭和3)年に朝倉村の大字となる。1942(昭和17)年、高知市となる。農協としては朝倉地区に入れている。

戸数・人口

1976(昭和51)年現在、領家、針原、行川、上里の4集落の世帯数142戸、人口606人。

産業

農業。ショウガ・コウゾ・ミツマタなどの栽培、養蚕。以前はこれらの産業に従事する人がほとんどであったが、最近は勤めに出る人が多くなり、兼業農家が増えている。梶草や蚕を扱う人がいなくなっている。

収録地点の方言の特色

方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

高知県の方言は大きく土佐方言と^{はた}幡多方言とに二分される。この両方言間の

顕著な相違はアクセントに見られる。前者は京阪式アクセントであり、後者は東京式アクセントである。

高知市は土佐方言の代表的な地点である。

音韻

- (1) 四つ仮名の区別がある。老年層においては、この四つ仮名の区別が明瞭になされている。

ジ [ʒi]	フ <u>ジ</u> (富士)
ヂ [˜dʒi~dʒi]	フ <u>ヂ</u> (藤)
ズ [zu]	ク <u>ズ</u> (葛)
ヅ [˜du~˜dʒu~˜dzu~˜dzu]	ク <u>ヅ</u> (屑)

- (2) ダ行、ガ行に前鼻音が現れる。語頭以外の場合に顕著であるが、時に語頭の場合にも認められる。前鼻音の程度は一定ではなく、極めて明瞭に鼻音が認められる場合と、ほとんどそれが聞こえない場合とがある。

ンドゥ [˜du]	ミ <u>ンドゥ</u> (水)
ンガ [˜ga]	カ <u>ンガ</u> ミ (鏡)

- (3) 「トゥ」・「ドゥ」の音がある。

トゥケテ (漬けて)
ミンドゥ (水)

- (4) 母音の無声化は認められない。

- (5) 連母音もほとんど融合せず、ひとつひとつ丁寧に発音される。

エイケンドノー (いいけどね)

- (6) [a] の母音に挟まれた [w] 音は脱落する傾向が顕著である。

ナアニヤ ([縄を] なわないと)

- (7) 「ン」が語頭に来る場合がある。

ンメ [mme] (梅)
ンマレル [mmareru] (生まれる)

アクセント

高知市方言のアクセントは、京阪式アクセントであり、現在の京都のアクセントよりも一時代前のアクセントを留めている。

文法

- (1) ナ行変格動詞のなごりが見られる。

シヌル (死ぬ)

イヌル (帰る)

- (2) サ行五段活用動詞の連用形はイ音便になる。

サイタ (刺した)

- (3) バ行・マ行五段活用動詞の連用形はウ音便になる。

トーダ (飛んだ)

ツッこーダ (突っ込んだ)

- (4) 共通語の上一段動詞「借りる」、「足りる」に対応するのは、ラ行五段活用動詞「借る」、「足る」であり、その音便形は促音便になる。

カル (借りる)

カッタ (借りた)

タル (足りる)

タッタ (足りた)

- (5) 2拍の一段活用動詞「似る」・「煮る」・「着る」・「寝る」の連用形は、語幹が長音化される。

ニータ (似た)

ニータ (煮た)

キータ (着た)

ネータ (寝た)

- (6) 命令表現は、動詞の連用形のほかに、動詞の連用形+終助詞「ヤ」の形をとる場合が多い。

オキ (起きろ)

オキヤ (起きろ)

カキ (書け)

カキヤ (書け)

- (7) 意志の助動詞は、一段活用動詞では、「ヨー」のほかに、「ロー」が用いられる。

オキヨー (起きよう)

オキロー（起きよう）

ミロー（見よう）

ネロー（寝よう）

- (8) 使役の助動詞は、「ス」・「ラス」が用いられる。「ス」は五段・ナ行変格活用動詞に、「ラス」はそれ以外の活用動詞に接続する。

カカス（書かせる）

イナス（帰らせる）

コラス（来させる）

セラス（させる）

ミラス（見させる）

- (9) 禁止表現には、動詞未然形に「レン」・「ラレン」が接続した形と、動詞連用形に「ナ」が接続した形とがある。

ヨマレン（読むな、読んではいけない）

ミラレン（見るな、見てはいけない）

ヨミナ（読むな）

ミナ（見るな）

- (10) 可能・不可能表現には、「ヨー」・「エー」のような副詞がついた形が使われる場合と、可能動詞やそれに助動詞「レル」などがついた形が使われる場合とがある。

ヨー ヨム（読める、読むことができる〈可能〉）

ヨー（エー）ヨマン（読めない、読むことができない〈不可能〉）

ヨメル（読める、読むことができる〈可能〉）

ヨメン（読めない、読むことができない〈不可能〉）

ヨメレル（読める、読むことができる〈可能〉）

ヨメレン（読めない、読むことができない〈不可能〉）

ヨメレレル（読める、読むことができる〈可能〉）

ヨメレレン（読めない、読むことができない〈不可能〉）

- (11) 進行態は、動詞連用形に「ヨル」・「ユー」がついた形で、結果態は、動詞連用形に「チョル」・「チュー」がついた形で表現される。

フリヨル（降っている）

フリユー（降っている）

トチオ モツチヨル（土地を持っている）

ツコーチューキニ（使っているから）

- (12) 過去・完了の助動詞「ツ」がある。これは、必ず推量を表す助動詞「ロー」を伴って用いられる。

カキヨツツロー（書いていただろう）

- (13) 準体助詞「の」に相当する「ガ」がある。

ドーユーガガ（どういのが）

- (14) 間投助詞「ホラ」が頻繁に用いられる。

（以上の解説は、基本的に、「各地方言収集緊急調査」当時の報告原稿によるものである。）

高知県高知市1977凡例

談話資料は、方言談話音声、方言談話音声の文字化、方言談話の共通語訳から成る。CD-ROM には、ページ単位で切った方言談話音声を、CD には、方言談話音声全体を収録した。

文字化と共通語訳

方言談話音声の文字化はカタカナで表記し、方言談話の共通語訳は、漢字かなまじりで表記した。方言談話音声の文字化と共通語訳とは、対照ができるように、上下2段を1組として示した。上段が文字化、下段がその共通語訳である。

文字化については、表音的カタカナ表記を用いている。つまり、長音は「ー」で示し、助詞「は」は「ワ」、助詞「を」は「オ」、助詞「へ」は「エ」と表記する。「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」はガ行鼻濁音を表す。

また、分ち書き、句読点などは、便宜的なもので、厳密なものではない。

「各地方言収集緊急調査」における、方言談話音声の文字化の方法は、後に掲げる「調査実施上の留意事項について」などに詳しく記されている。ただし、今回、「全国方言談話データベース」として公開するにあたり、文字化・共通語訳を整備する際には、当時のマニュアルにはとらわれず、読みやすさ、意味のとりやすさを優先して処理をした部分がある。

また、この文字化は、時間の流れを忠実に反映することを意図していない。したがって、発話の重なりや、複線的な会話の進行の構造が、文字化からは読み取れない。データを使用する際には、文字化・共通語訳を見るだけでなく、実際に、音声を聞いて判断していただきたい。

発話単位

ひとりの話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発言を1発話とする。途中にあいづちが入る場合もある。

発話番号 〈半角〉

発話の通し番号を、各発話の話者記号の前に付した。

例：1A

話者記号 〈全角〉

話者、調査者など、談話の場にいる人物について、A、B、C、D、E、F、……のように、アルファベットで示した。

例：1A

固有名詞

話者および一般の人名については、文字化・共通語訳の該当個所を、A、B、C、X1、X2、X3などのアルファベットに置き換えた。話者、調査者など、談話の場にいる人物については、A、B、C、D、E、F、……のように示し、話題の中の第三者については、X1、X2、X3、……のように示した。ただし、音声は、該当個所に加工をしなかった。

歴史上の人物や、有名人の人名については、記号に置き換えることはせず、個人名を出すことにした。また、会社名、店名、製品名などについても、発言されたとおりに記している。

地名については、そのまま扱うことにした。

記号

。(句点) 〈全角〉

ポーズがあって、意味的にひとつのまとまりを持つ文と考えられる個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して句点をつけた場合もある。

例：ソーデス ソーデス

そうです。 そうです。

、(読点) 〈全角〉

基本的に息をついた個所、または、ポーズのある個所。

共通語訳については、実際の発話でポーズが置かれていないところでも、意味の取りやすさを優先して読点をつけた場合もある。

また、文字化と対応しなくなっても、読みやすさを優先して、取り去った場合もある。

例：シ、ヤクシヨ

市役所

? 〈全角〉

上昇イントネーションと判断した個所。

例：アズケイトイテ？

預けておいて？

() 〈全角〉

あいづち。ひとりの人が連続して話している時にさえぎったり，口をはさんだりした個所。

(A ………) のように，開き括弧の次にあるアルファベットは，発言している話者を示す。() の閉じ括弧の直前の句読点は省略した。

なお，() 内のあいづちと，独立した発話扱いされているあいづち的発話との違いは必ずしも明確ではない。

例：(A アー ソーデスカ)

{ } 〈全角〉

笑，咳，咳払い，間，などの非言語音。

例：{笑}

{咳}

{手を叩く音}

××× 〈全角〉

言い間違いや言い淀みなど。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

*** 〈全角〉

聞き取れない部分。

例：オチャズケノ*

お茶漬けの*

/// 〈全角〉

対応する共通語訳が不明な部分。

例：モーゼーノ モジナンデスナ、

//////// 「文字」 なんですネ。

[] 〈全角〉

方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

= 〈全角〉

[] 内の=は、意味の説明や、意識であることを示す。

例：イマ ユー

今 いう [=今話題にあがった]

| | 〈全角〉

注意書きなど。

例：| Aに対して|

{ } 〈全角〉

注記。方言形の意味・用法、特徴的音声などについて説明し、文字化・共通語訳の後にまとめてある。[] 内の半角数字は、注記の番号を示す。

例：ホシツキサンのオモチ [1]

音声

CD-ROMには、冊子のページ単位で区切った方言音声の wave ファイルを収録している。冊子のページを pdf ファイルにしたものに、方言音声をリンクさせていて、各ページにある「再生」の部分をクリックすると、そのページの音声を聞くことができる。

CDには、談話全体の音声を収録している。以下にあげるように、適当な個所で、トラックに区切っている。

CD トラック番号

文字化・共通語訳のヘッダは、方言音声を収録した CD のトラック番号を示している。「高知19-1」は CD トラック番号が19で、その1ページ目ということである。「高知19-1」「高知19-2」……「高知19-6/20-1」……「高知35-6」のように表示される。

また、文字化・共通語訳部分には、CD のトラックの切れ目を表示した。矢印の部分の部分がトラックの切れ目を表し、その両側の数字はトラック番号である。

↑19, 19↑20, …… 34↑35, 35↑ のように表示される。

第17巻の CD (67分53秒) には、高知県高知市の談話、【昔の仕事】の全体の音声を収録している。各トラックの開始ページ・行、終了ページ・行、時間は下記のとおりである。行は、文字化の行を表示した。

トラックNo.	開始ページ・行	終了ページ・行	時間:分:秒
19	p.141・0.1	p.146・0.13	0:02:02
20	p.146・0.13	p.152・0.9	0:01:59
21	p.152・0.9	p.158・0.7	0:02:02
22	p.158・0.7	p.164・0.7	0:02:00
23	p.164・0.7	p.170・0.17	0:02:05
24	p.170・0.17	p.178・0.1	0:02:05
25	p.178・0.3	p.184・0.15	0:01:58
26	p.184・0.15	p.191・0.17	0:02:01
27	p.191・0.17	p.198・0.11	0:02:01
28	p.198・0.11	p.204・0.15	0:02:03
29	p.204・0.15	p.211・0.9	0:02:01
30	p.211・0.11	p.218・0.3	0:01:59
31	p.218・0.3	p.224・0.11	0:02:00
32	p.224・0.11	p.231・0.1	0:02:00
33	p.231・0.1	p.238・0.3	0:02:00
34	p.238・0.3	p.244・0.15	0:02:02
35	p.244・0.17	p.249・0.17	0:01:21
計			0:33:39

高知県高知市1977談話

収録地点 高知県高知市^{りょうけ}領家, ^{はりはら}針原

収録日時 1977(昭和52)年9月14日

収録場所 高知県高知市^{なめがわ}行川 河湊峯猪氏自宅

話題 昔の仕事

話者

A	女	1907(明治40)年生	(収録時70歳)	農業
B	男	1911(明治44)年生	(収録時66歳)	農業

司会者

C	男	1936(昭和11)年生	(収録時41歳)	
---	---	--------------	----------	--

調査者

女	(収録談話中に発話なし)	大学教員
他4名	(収録談話中に発話なし)	

収録時間 (CD) 33分39秒

【昔の仕事】

話し手

A 女 明治40年生 (収録時70歳)
B 男 明治44年生 (収録時66歳)
C 男 昭和11年生 (収録時41歳) 司会者

1 C : イマワ コー ココラヘンモ ミチガ ツイテー
今は こう このあたりも 道が ついて

↑19

クルマモ ハシリユケンド
車も 走っているけれど

ムカシワ キオ キッテモ ダスニ クローシタロー。
昔は 木を 切っても 出すのに 苦勞しただろう。

2 B : ソレヨ ムカシワ シンドー シタチ エライモノヨ
それよ。 昔は 苦勞[を] したって たいへんなものよ

オンシャー。 タカデ[1]ノー。
おまえは。 実にね。

3 A : ソー ソー。(B エー ショー ダカラ アレガ マー ***)
そう そう。(B ええ とても だから あれが まあ ***)

ソナー シンドー ワタシラワ ソノ シンドーワ シランケド
そんな 苦勞[は] 私たちは その 苦勞は 知らないけれど、

ヒトノ シンドーオ ミトーヨ。(B シー) シー
人の 苦勞を 見たよ。(B うん) うん

4 B : ワシラー ヤリモシタケンド (A シー)

私たちは やりもしたけれど (A うん)

ワシラーノ ジンダイヨリ ムカシノヨナ ヒトワ
私たちの 時代より 昔のような 人は

マダ エラカッタノー。(A エラカッタ) (C {咳})
もっと たいへんだったね。(A たいへんだった) (C {咳})

ソンデ オーケナ ザイモクオー カタキ°ダイタ[2]キノー。
それで 大きな 材木を 担ぎ出したからね。

5 A : ソーヨ (B シー)

そうよ (B うん)

オマサン ヤマカラ アレオ カタキ°ダイタカ°
おまえさん 山から あれを 担ぎ出したが

アリヤー ズルイ モンヂャ[3] ナカッタゼヨネー。
あれは たやすい ものでは なかったよね。

(B ナカナカ) シー ナカナカ。

(B なかなか) うん なかなか。

アタシ クノ ハタオネー ウエカラ
私の ところの そばをね 上から

高知 19-3

ナメカ°ワ[4]ノー X1サン ト ユー オヂサント
河川の X1さん と いう おじさんと

コノ コーブチ[5]ノ X2サン ト ユー オンヂサンカ°
この 河淵の X2さん と いう おじさんが

(B ンー) マー {咳払い} カタイダカ°
(B うん) まあ {咳払い} 担いだが

マー ヒノウチニ ニカイパー トーツツローカネー。
まあ 1日のうちに 2回くらい 通っただろうか。

トット コヤマ[6]カラ ンダスニ。
ずっと[遠い] 小山から 出す[の]に。

6 B : ソリャー トーイキノー ナント ユータチ。 ンー
それは 遠いからね 何と 言ったって。 うん

7 B : トーイキニ ナニケ°ノ トーイキニネー。
遠いから // // 遠いからね。

ソレカ° オマサン ホイショ ホイショ ホイショ ホイショ
それが おまえさん ホイショ ホイショ ホイショ ホイショ[と]

オモシロイト ユータ ソノ カケンゴエカ°ネ。(B ンー)
おもしろいと いったら その かけ声がね。(B うん)

ソレオ キクカ° マー ソノ アシンドリカ°ネー
それを 聞く[の]が まあ その 足取りがね

高知 19-4

オンナショーニ フターリガ アトサキ ナカ°イ アノー
同じように 二人が 後先 長い あの

ナカナカ タバキッタ キンチャ ナイケニ ナカ°イケンネー。
なかなか // // // 木では ないから 長いからね。

8 B : シー ヒ ヒータ キンチャッタノー？
うん × 挽いた 木だったね？

9 A : シー ソレオネー (B シー) ヒータ キオ
うん それをね (B うん) 挽いた 木を

コビキ[7]カ° ヒータ キオ ホラ (B アー ソーカ)
木挽きが 挽いた 木を ほら (B ああ そうか)

カーモ ハカ°ン スキ°カラ
皮も 剥がない 杉から

マー ダイタイ スンギオ カキヨッタ[8]カ°ネー。(B フーン)
まあ だいたい 杉を 担いでいたね。(B ふうん)

ソレオー ワタシャ コンドモノ ジブンニ
それを 私は 子供の 頃に

ヒヨイカラ ノゾイテ ミリヤー ワラヂバキノ オンチャンカ°
堀から 覗いて 見れば 草鞋履の おじさんが

ホイシヨ ホイシヨ ホイシヨ ホイシヨ
ホイシヨ ホイシヨ ホイシヨ ホイシヨ[と]

高知 19-5

アシモ カルイ ト ユータチ
足も 軽い と いったって

マー ヨー マエウシロカ° アシカ° オーテネー。
まあ よく 前後が 足が 合ってね。

マー オモシロカッタ ソノ ノ マー ソノ
まあ おもしろかった その × まあ その

10B : デモ アリャ カケコ°エ ユーテモー アリャー
でも あれは かけ声 [と]いっても あれは

カケコ°エ シタラ ダイブ ニオ
かけ声[を] かけたら だいぶ 荷を

(A シン アリャ チョーシヂャケンネ) シー チョーシデ
(A うん あれは 調子だからね) うん 調子で

ニオ カルー オモータガヨ ダイブ
荷を 軽く 思ったものよ だいぶ

11A : ハイ ハー チョーシヨ (B シー) ハー チョーシヨ
「はい はあ 調子よ (B うん) はあ 調子よ

ホイシヨ ア ホイシヨ ユーテ マーネ
ホイシヨ あ ホイシヨ」 [と]言っ て まあね

ソレカ° オモシロカッ トーネー。 {笑} (B {笑})
それが おもしろかったよね。 {笑} (B {笑})

12B : キクカ° タノシミチャツロー。 {笑}
聞くの[が] 楽しみだっただろう。 {笑}

13A : ンー ソレカ° キクカ° タノシミネー。
うん それを 聞くの[が] 楽しみね。

マー ホント ソノ カケゴエガネー
まあ ほんとう[に] その かけ声がね

ア チョーシヨ ア チョーシ アー チョーシヨ
「あ 調子よ あ 調子 ああ 調子よ」

マー オモシローニ。
まあ おもしろく。

ヒトノ シンドーワ シラン。
人の 苦勞は 知らない。

ソノ マー カイテイク アシンドリカラ コドモナガラニ
その まあ 担いでいく 足取りから 子供ながらに

19↑20

マコトニ オモシロイ エライ オンチャンチャヨ
ほんとうに おもしろい すごい おじさんだよ

ト オモータガネ。(B ンー)
と 思ったよ。(B うん)

イマ オモータミリヤー ナカナカ アレカ°
今 思ってみれば なかなか あれが

高知 20-2

ヒトトリーノ シンドデ ナカナカ デキルカ°
一通りの 苦勞で なかなか できるの[が]

ダレマワリ [9] デキル コトチャ ナイケンネ。
誰にでも できる ことでは ないからね。

14B : ムカシワ シンドーガ フトカッタ。
昔は 苦勞が 大きかった。

イマノヨーニ ドーロガ アリヤ エイケンドノー。
今のように 道路が あれば いいけれどね。

ヤマミチオ
山道を

15A : ソーカト ユーテ ダレンマレ ヤレヨ ユータチ
そうかと いって 誰にでも やれよ [と]言っただって

アレモ コーシャ [10]ガ ナケリヤ ヤレルモンチャ ナイ。
あれも 技巧が なければ やれるものではない。

16B : ヤレン ヤレン。 (A ン)
やれない やれない。 (A うん)

コーシャト チカラトガ (A ン)
技術と 力が (A うん)

ナケリヤ ヤレナヤ (A ソー ソ) アリヤー
なければ やれないよ (A そう そう) あれば

高知 20-3

17A : ナカナカ (B ンー) ヒトニワ コーシャガネー ダイジチャ。
なかなか (B うん) 人には 技術がね 大事だ。

マー コノ ナメガワノ ヒトニモ ココノ オヂーサンラー
まあ この 行川の 人にも ここの おじいさんたちは

X3サン ト ユー オヂーサンラモ ナカナカ
X3さん と いう おじいさんたちも なかなか

カミヤガワ[11]カラ カイタ ト ユーガ
上八川から 担いだ と いうが

マッコト オマサン ソノ ユータチ ナンチャネ
ほんとうに おまえさん その 言っても 何だね

ヒトニ マケント ユー ヤルト ユー ソノ ソノー ナンチャネ
人に 負けないと いう やると いう その その 何だね

キリョク ト ユー モンガ アッタ ホリャ。
気力 と いう ものが あった ほら。

18B : アッタ。(A ンー) ソレニ ムカシノ モナー モー
あった。(A うん) それに 昔の 者は もう

クルマワ ナイモンチャキン ンマー ヒーテ ホラ。
車は ないものだから 馬を 引いて ほら。

19A : ソー ソー ンマー ヒーテネー。
そう そう 馬を 引いてね。

高知 20-4

ワタ

××

20 B : シマエ ツケテ シマト オンナジバー (A シー)
馬へ つけて 馬と 同じほど (A うん)

ニノーテ[12] モドッタ ト ユーキノー。
担いで 戻った と いうからね。

21 A : ワタシラガ (B シー) コンドモノ ジブンニ
私たちが (B うん) 子供の 頃に

X4チンマサン ト ユーテカラ (B シー)
X4おじいさん と いて (B うん)

アノ ナカヤマ[13]ニ オットーネ。(B アー)
あの 中山に いたよね。(B ああ)

ソノ オンチャンカ° チンバコ チンバコ シテ
その おじさんが チンバコ チンバコ して

ムカシノ コトニヤ ソノ スミオ ラチン[14]ニ
昔の ことには その 炭を 荷として

トゥケタチャ シマデネ。
つけたのだ 馬でね。

22 B : ソー ソー スミ ツケニ イタ ト
そう そう 炭[を] つけに 行った と

高知 20-5

23A：アタシラカ° ソノ ガッコーエ イク。

私たちが その 学校へ 行く。

アタシワ ウメノキガッコウ ジューロクソンノ トージニ

私は 梅ノ木[小]学校 十六村の 当時に

ウメノキショーガッコーエ カヨータ。

梅ノ木小学校へ 通った。

ウチノ ウエオ ホラ (B ー)

家の 上を ほら (B うん)

アルイタトコロガ ウネサカ[15]スル クオ チンバコ

歩いたところが 山の起伏がある ところを チンバコ

ソレ ウウ ンマエ クロンマエ リンオ ツケテ

それ[へ] ×× 馬へ 黒馬へ 鈴を つけて

リン チリン チリン オンチャンモ オンヂーサンモ

リン チリン チリン おじさんも おじいさんも

オマサン ヒョッコリ ヒョッコリ ンマモ

おまえさん ヒョッコリ ヒョッコリ 馬も

オマサン ソロリコ ソロリコ (B・C {笑})

おまえさん ソロリコ ソロリコ (B・C {笑})

チリンコ チリンコ (C {笑})

チリンコ チリンコ (C {笑})

24B：マコト アノ フーリンワ マヨケデ ツケタ ト
ほんとうに あの 風鈴は 魔よけで つけた と

ユーチャカ。
いうではないか。

25A：ソーヤテネ。 (B ンー)
そうだってね。 (B うん)

ソレカラ ソノ X4 ト ユー オンチャンカ° {咳払い}
それから その X4 と いう おじさんが {咳払い}

コリヤ オマエラー キョーモ イキヨルカ
「こら おまえたち 今日も [学校へ]行っているか

チット ンマノ チンポオ アローチャッテ。
ちょっと 馬の おちんちんを 洗ってやって」

(B・C {笑}) ワタシラ ソレガ オカシューテネー。 {笑}
(B・C {笑}) 私たち それが おかしくてね。 {笑}

26B：マコト ンマモ シンドーシタラー (A シンド)
ほんとうに 馬も 苦労したら (A 苦労)

キンタマノヘンカ°ー アワン ナッチューキンノー。 {笑}
睾丸のあたりが 泡に なっているからね。 {笑}

27A：ソーカ シランカ° (B ンー {笑})
そうか 知らないが (B うん {笑})

ソレカ° オカシューテネー。 (B {笑})

それが おかしくてね。 (B {笑})

ソノ オヂサンカ° ソノ アルキブリカ°

その おじさんが その 歩き振りが

チンバコ チンバコ ウー ンマモ オマサン マコト

チンバコ チンバコ × 馬も おまえさん ほんとうに

ソロリコ ソロリコ (C {笑})

ソロリコ ソロリコ (C {笑})

チーン チーン (B {笑}) ユーテ ソノ {笑}

チーン チーン (B {笑}) [と]って その {笑}

20↑21

オマサン スズオ ツケテネー (B フーン?)

おまえさん 鈴を つけてね (B ふうん)

マー ラチンオ シタカ°。

まあ 馬に荷をつけて運ぶことを したが。

アノ オヂサンモ トシカ° イクマデ アリヤ エラカッタネー

あの おじさんも 年が いくまで あれは たいへんだったね

(B ソーカヨ) ソナーニ オモウ。 {笑}

(B そうか) そんな[ふう]に 思う。 {笑}

マコト ゲニ ソノ オヂサンカ°

ほんとうに ほんとうに その おじさんが

高知 21-2

ソーユー コト ユーガ オカシューテ。{笑}
そういう こと[を] 言うの[が] おかしくて。 {笑}

アノ マー ナンチャネ
あの まあ 何だね

ンマデ ソノ シャリキ[16]モ ナイケニ (B ソーヨ)
馬で その 荷車も ないから (B そうよ)

ドーロワ ナイケニ (B ン) ラチンオ ツケトー。
道路は ないから (B うん) 馬に荷を つけたよ。

28B : ギッチリ ツケニ イタ ト ユーケンノー。
休みなく つけに いった と いうからね。

29A : マー ドレバー ンマニ
まあ どれくらい 馬に

ヒョー スミンダーラオ ツケタ ト ユータラ
俵[を] 炭俵を つけた と いったら

ナンチャ ニヒョー ツケトツツローカネー イッカイオヨー。
何だ 2俵 つけていただろうか 1回をね。

30B : ソーカヨ?
そうか

31A : マッタイ ンマチャキ。
弱い 馬だから。

高知 21-3

32B : シー。 マッタイ シマー ニヒョーバーシカ ツカン。
うん。 弱い 馬は 2俵ほどしか つかない。

(A ニヒョーバー オ オーチョッタ)

(A 2俵くらい × 背負っていた)

ソノカワリ エライ ヒター シロガ (A シ)
そのかわり すごい 人は / / / (A ×)

ニノーテ (A ソー ソー)

担いで (A そう そう)

シー シマヨリ エラカッタ ト ユーゼヨ。
うん 馬より すごかった と いうよ。

33A : シー (B シー) ジブンニ ニノーテ シマーニ ツケテ
うん (B うん) 自分に 担いで 馬に つけて

(B ソーニカーラン) ホラ。 (B シー)

(B そうらしい) ほら。 (B うん)

マー ソノ オヂサンカ° カワイラシー オンヂサンヨ
まあ その おじさんが かわいらしい おじさんよ

アタシラオ ミツケテ ソーユー コト ユーテネ (B シー)
私たちを 見つけて そういう こと[を] 言ってね (B うん)

ニッコリ ニッコリ ワローテ。

にっこり にっこり 笑って。

高知 21-4

マー ナンチャネー ソンナニ シテカラ ナカナカ
まあ 何だね そんなに して なかなか

アノ ナカ[°]ネン イキタ ヒトンチャネ。(B フーン)
あの 長年 生きた 人だね。(B ふうん)

ソー ンデ マー ナニヨネー マー ムカシワ
うん それで まあ 何よね まあ 昔は

ダチンオ ツケテ ソー ヤッテ ホラ (B ソー ソー)
[馬に]荷を つけて そう やって ほら (B そう そう)

ダチンデ ナニヨネ
[馬に]荷[をつけて運ぶこと]で 何よね

カセインダモノヨ ホラ。
稼いだものよ ほら。

34B : マー トニカク (A ン)
まあ とにかく (A うん)

ムカシワ シンドーシタモノヨナー (A ン ソー)
昔は 苦勞したものよね (A うん うん)

アリヤ ホリコオ シタチノー (A ソー ソー)
あれは 開墾を したってね (A そう そう)

イマノヨーニ ナイ。
今のようでは ない。

アノ モッコー[17]オ コシラエテノー (A ソー ソー)
あの もっこを 作ってね (A そう そう)

ソレエ カキボーオ ツッコーデー カイタカ°。
それへ 天秤棒を 突っ込んで 担いだの。

35A : モッコーオ オマサン ヒルワ ミヨラセンデ ヨナベニ
もっこを おまえさん 昼は 見ていないで 夜なべに

36B : タイテー ヨナベヨノー。
たいてい 夜なべよね。

37A : ソレカ°ー (B ンー) ヒルワ オマサン アノー ホラ
それが (B うん) 昼は おまえさん あの ほら

マエニワ タオ タオ ヒライタケニ
前には 田を 田を 開いたから

38B : ヒルワ イッショーケンメー シゴト セニャ イカンキ
昼は 一生懸命 仕事[を] しないと いけないから

39A : オマサン ブンゴー[18] ト ユー コー[19]オ
おまえさん 夫講 と いう 講を

コシラエテ ホラ (B ソー ソー ンー)
作って ほら (B そう そう うん)

オマエサン ソレンデ カブオ ヒトツ モッチョリ
おまえさん それで 株を 一つ 持っていたり

高知 21-6

フターツ モッチョリシトツテ
二つ 持っていたりして

アタシ トコロニ イツモ クレ ハルワ
私[の] ところに いつも 暮れ 春は

ブゴーノ シゴトヨ ホラ。(B ソー ソー)
夫講の 仕事よ ほら。(B そう そう)

ウチノ タオ ヒライテモロータラ
自分の家の 田を 開いてもらったら

コンド ツキニ ヒトノ クノ タエ ソノ ブゴーデ イテ
今度 次に 人の ところの 田へ その 夫講で 行って

カネ イラズニ ジブンラーノ ソノ ナニヨネー ヒヤクデ
金[は] いらずに 自分たちの その 何よね 日役で

ホラ タオ ヒライト
ほら 田を 開いたよ

40B : ソーヨ ブンデ ブンデー ホラ アノー
そうよ 夫で 夫で ほら あの

41A : ンー ソーヨ ソレパー ムカシャ カネカ°
うん そうよ それくらい 昔は 金が

トレザッタモノヨネ。
取れなかった[=稼げなかった]ものよね。

42B : ソーヨ カネカ° ナイキニ ホラ。(A ン)
そうよ 金が ないから ほら。(A うん)

ホンデ ソー シタモンヨ。
それで そう したものよ。

43A : ソーヨ ソーヨ。(B ンー)
そうよ そうよ。(B うん)

マー ソレンデネ アノ アタシラー クモ ブンゴーンデ
まあ それでね あの 私たちの ところも 夫講で
21↑22
オカゲサマデ タオ ヒライテモローテ
おかげさまで 田を 開いてもらって

マー ゲンザイ ツクリヨウ ワケンチャガ ホラ。
まあ 現在 [米を]作っている わけだが ほら。

44B : ソーヨ (A ン) イマー フトイ イシカケ[20]ノ
そうよ (A うん) 今 大きい 石垣が

アルヨーニ ナッタガ ゼンブ ブゴード ヤッタ
あるように なったの[は] 全部 夫講で やった

ホリコーデ ヤッタガヨノー。
開墾で やったものよね。

45A : ンー ソー ソー。(B ンー) マー ムカシワ ソー ヤッテ
うん そう そう。(B うん) まあ 昔は そう やって

高知 22-2

ソレカラ タノモシゴー〔21〕 ト ユーテ
それから 頼母子講 と いて

ソノ ウチニ イロイロ サイナンカ° アルトカ
その 家に いろいろ 災難が あるとか

オカネカ° イラニャ イカン ソーユー アノー ナンチャネー
お金が 入らないと いけない そういう あの 何だね

マー サイナンノ カカッタ ト ユオーカ ソーユー トキニワ
まあ 災難の かかった と いおうか そういう 時には

トチノ ヒトガ ブゴー アノ アノ
土地の 人が 夫講 あの あの

タノモシゴ°ー ト ユー モノオ トウクツテ タスケタネー。
頼母子講 と いう ものを 作って 助けたね。

46B : ソー ソー (A ー)

そう そう (A うん)

コーンデ ホラ (A ソー ソー) タスケチャッタ。
講で ほら (A そう そう) 助けてやった。

イマー キョーサイチャ ユーテ アルケンド
今は 共済だ [と]いて あるけれど

マエワ ソレガ ナイキニ ホラ (A ソー ソー)
前は それが ないから ほら (A そう そう)

高知 22-3

ホンデ コーオ シテー コーオ ヨソブラクカラ
それで 講を して 講を 他[の]集落から

コンド ドッコモ アツメテ ホラ ヒトオ
今度 どこも 集めて ほら 人を

47A : ソー マー マエノ コトニヤ (C {咳})
そう まあ 前の ことには (C {咳})

イチエンガケノ コーチャ ユーテ ヨナベニ コーガ
1 円がけの 講だ [と]いって 夜なべに 講が

ワタシドモノ ヘンニヤ ホーボーニ アッタガネー。
私などの あたりには 方々に あったよ。

48B : ソー アッタチ (A エー) ワシラ クニモ
そう あったって (A ええ) 私たちの ところにも

ウント アッタワヨ。(A エー)
うんと あったわよ。(A ええ)

49A : ソレカ° マー カケツメタラ ナニヨネ
それが まあ かけ終わったら 何よね

ハヨー トッタ モノガ オヤニ ナッタラ
早く 取った 者が 親に なったら

アト カスニ ナッテ。
後[は] 負債者に なって。

50B : ソレヨ オヤニ ナッタラ (A {咳払い})

そうよ 親に なったら (A {咳払い})

カスニ ナッテ リオ ハローテー (A ソーヨ)

負債者に なって 利を 払って (A そうよ)

ハラワニャ イカンキニ (A ーン)

払わないと いけないから (A うん)

タカー ウルサカッタゼヨ アリヤー。

ほんとうに たいへんだったよ あれは。

51A : マー ナニヨ マー ソレモ モクテキニ ヨッテ オモワクデ

まあ 何よ まあ それも 目的に よって 思惑で

ジブンカ° トロー ト オモーテ ホラ (B ソー ソー)

自分が 取ろう と 思っ て ほら (B そう そう)

コーオ オトイテ マタ ソレオ アル リヨースルケニ

講を 落として また それを ×× 利用するから

マコタ イッショチャケンド ホラ。

ほんとうは 一緒だけれど ほら。

52B : ソーヨ マー ナンゾ ンドーシテモ イル コトカ° アッタラ

そうよ まあ 何か どうしても 要る ことが あったら

ホラ (A ソー ソ)

ほら (A そう そう)

ソレノ コーオ オトイテ {間} オトイテ
その 講を 落として {間} 落として

ソノ モノオ コータリ カマエタリ シタ トキャ エーケンド
その ものを 買ったり 準備したり した 時は いいけれど

アトンデ オヤワ ウルサカット カケルカ°
後で 親は たいへんだったよ かけるの[が]

53A : ソーヨネ (B ンー)
そうよね (B うん)

マー ソレモ オモイヨーンチャーケンド ホラ。{笑}
まあ それも 考えようだけれど ほら。{笑}

54B : ソーヨ マー ジブンニ ハジメニ ツコーチューキニ
そうよ まあ 自分に はじめに 使っているから

イワレヤ セナーノー。{笑}
言われは しないね。 {笑}

(A ソーヨ ソーヨ チャケンド) ンー
(A そうよ そうよ だけれど) うん

55C : ソノ タオ ヒラク ユーカ°ワ
その 田を 開く [と]いうのは

ソノ コー コー チ イー[22] イーミタイナ モンカヨ。
その × 講 って 結 結みたい な ものか。

高知 22-6

56 B : (A ソー プンゴー ユー) タワ イーデ ヤッター
(A そう 夫講 [と]いう) 田は 結で やったり

プゴーデ ア イヤ (C プゴート ユーノワ)
夫講で あ いや (C 夫講と いうのは)

プゴーデ ヤッター ホラ。
夫講で やったり ほら。

57 A : マー (B ンー) ダイタイ イ イー ト ユーヨリ
まあ (B うん) だいたい × 結 と いうより

プンゴーヨネ マイニチ ハツカ カカルカラ
夫講よね 毎日[来て] 20日 かかるから

58 B : イート オンナシ コト。 プゴーワ マー
結と 同じ こと。 夫講は まあ

イート イッショヂャケンド ホラ ンー。
結と 一緒だけれど ほら うん。

59 A : マイニチ ハツカ キテ ヒライテクレテ ホラ。
毎日[続けて] 20日 来て 開いてくれて ほら。

イーワ ヒートイ キタラ ヒートイ モドスカ°
結は 1日 来たら 1日 戻すの

コレガ イーヂャケンドネ。
これが 結だけれどね。

ソノ ブンコー ト ユー モノワ ソノ トチオ
その 夫講 と いう ものは その 土地を

ソノ タオ ヒラク ウチャ キテクレトーヨ
その 田を 開く うちは 来てくれたよ

ナンジューニンヤクト ユーヨニ ホラ。(C シー)
何十人役と いうように ほら。(C うん)

ンデ マター ソノ ヒトカ° ヒラク トキニヤー
それで また その 人が 開く 時には

22↑23

ジブンカ° ソノ ナンジューヤンニ イキテ
自分が その 何十××× 行つて

マー ソノ (B キ) ブヤクオ モドス ト コレオ ホラ。
まあ その (B ×) 夫役を 戻す と これを ほら

60B : ソーヨ キテモロータバー (A ン)
そうよ 来てもらっただけ (A うん)

イチャラナ イカナ マタ。
行つてやらなければ いけないよ また。

61A : シン ソーヨ (C シー) (B シー)
うん そうよ (C うん) (B うん)

ソンデ ブンゴニ ヨッテ マー イマコソ コノー オコメオ
それで 夫講に よつて まあ 今こそ この お米を

高知 23-2

アマリ アノ アリカ°タガラシ ト ユーヨーンチャーケンド
あまり あの ありがたがらない と いうようだけれど

ホラ ムカシャ コメカ°ネ ユーテモ
ほら 昔は 米がね [何と]いっても

ジンケンヒ マ ヒョーチント ユーカヨ
人件費 まあ 日当と いうか

ソレワ コメニ ヨッテ サンダマッテイタキニ
それは 米に よって 定まっていたから

ホラ コメノ ネダンニ ヨッテ
ほら 米の 値段に よって

62B : ソー ナンニモガ コメ。(A エー)
そう 何でもが 米。(A ええ)

ソレカラ カジクサ[23]カダケデ
それから カジノキの皮なんかで

ソーバオ キメタ コトモ アッタワ ホラ。
相場を 決めた ことも あったよ ほら。

(A ソー ソー ンー ホンマ)
(A そう そう うん ほんとう)

63C : マー ソノー タオ ヒラクンニヤ
まあ その 田を 開くのには

高知 23-3

イマーミタイニ ホラ アノー ドーグモ ナシ。
今みたいに ほら あの 道具も なし。

イシオ ワル ユーテモー (A ン)
石を 割る [と]いっても (A うん)

イマミタイナ カヤクモ ナカッタ。
今みたいな 火薬も なかった。

カヤクワ アルノワ アッタカヨ。
火薬は あるのは あったかね。

64 B : カヤクワ アッタ アッタ クロカ°ヤク。(A アー)
火薬は あった あった 黒火薬。(A ああ)

マー ダイタイ ムカシャ クロカ°ヤクンチャッタノー。
まあ だいたい 昔は 黒火薬だったね。

65 A : シー カヤクワ アッタケンド
うん 火薬は あったけれど

アタシラー クノ オヂーサンラガ ヒラク ジブンニヤ
私たち[の] ところの おじいさんたちが 開く 頃には

ソノ カヤクカ° ナイ トキニヤ オマサン
その 火薬が ない 時には おまえさん

ヒトコロオ ゲンノー[24] ナヌカ タタイテ
1 か所を げんのう[で] 7日 叩いて

高知 23-4

ヨーヨー ヒビガ イッタ ト ユーテ
やっと ひびが 入った と いて

ヨロコーダ ト ユーガ (B シー)
喜んだ と いうが (B うん)

ソレバー クローシテ ヒライトーケンネ。
それくらい 苦労して 開いているからね。

66B : シー アンマリ ワレン イシャー (A シー)
うん あまり 割れない 石は (A うん)

アノー タイモノ ズイキ[25]ヨ ホラ (A シー)
あの サトイモの 芋茎よ ほら (A うん)

アレデ ヤイチョイタラ ヤリコイ ユーテカラ
あれで 焼いておいたら 柔らかい [と]いて

アレオ {笑} モテイテ ヤイチョイテ
あれを {笑} 持っていて 焼いておいて

ソレカラ タタイタ ト ユーチャカ。 (A シー ソノ ノ)
それから 叩いた と いうではないか。 (A うん その ×)

ソンナ ハナシモ キーチューゾヨ。
そんな 話も 聞いているぞ。

67A : ソノ ノナカケンザン[26] ト ユー ヒトカ° ヒロオカ[27]エ
その 野中兼山 と いう 人が 弘岡に

高知 23-5

アノ オーケナ イオ ツケタ ト ユーモ チャント
あの 大きな 用水路を つけた と いう[の]も ちゃんと

ソノー イツー コイ ユーヤラ シランケニネ (B ンー)
その いつ 来い [と]言うか わからないからね (B うん)

ソノー イモジ[28]ノ ホイタモノト
その 芋の茎の 乾したものと

ソレカラ キャハン[29]ト ジュバン[30]ワ
それから 脚絆と 襦袢は

チャント カマエチョラニヤ イカザッタ ト。
ちゃんと 準備しておかないと いけなかった って。

(B アー ソーカヨ ンー)
(B ああ そうか うん)

ンー ソー ヤッテネ ソー ヤッテ
うん そう やってね そう やって

ソノー イモチノ ジュータン ジュータン トカ ジュータン
その 芋茎の /////
と か /////
と か /////
と か //

ナニヤロ ユーテ イモチデ ワッタ トネー。
何やら [と]いって 芋茎で 割った ってね。

68B : イモジオー アノー ヤイタラー
芋茎を あの 焼いたら

イシカ° ヤリコーナルカ シラン ユーテ ホラ。
石が 柔らかくなるか しれない [と]言って ほら。

ヤッタ ト ユーロ。
やった と いうだろう。

69A : シー ソノ イモジオ ソンデ カマエチョカニャ イカザッタ
うん その 芋茎を それで 準備しておかないと いけなかった

ト アソコノ オーバーサンガ ハナイタガネ。 デー
と あそこの おばあさんが 話したよ。 [それ]で

70B : アー イトゥ モテコイ ト ユーヤ ユーヤラ シレンキニ。
ああ いつ 持って来い と 言うか 言うかも しれないから。

71A : イツー デテコイヤ ユーヤ シレンケンネー。 (B シー)
いつ 出てこいよ [と]言うか わからないからね。 (B うん)

ソノ コンノ ジュバント (B フーン?) キャハントワネ
その 紺の 襦袢と (B ふうん) 脚絆とはね

カナラズ ソノー カマエチョカニャ イカザッタ
必ず その 準備しておかないと いけなかった

ト ユーカ (B シー)
と いうか (B うん)

ソノ イモジノ ホイタ モノトオネー。 (B ハハー)
その 芋茎の 乾した ものをね。 (B ははあ)

デ アノー ホラ ノナカケンザンガ ヒラ ナニオ
[それ]で あの ほら 野中兼山が ×× 何を

オーケナー ヒロオカノ ホーエ
大きな 弘岡の ほうへ

スイロオ ツケチャラーネ (B ー)
水路を つけているよね (B うん)

アノ ホラ ハタ[31]ノ ホート
あの ほら 幡多の ほうと

カガ アノー ニヨドカ°ワ[32]トノ サ ワカレノ クニ
×× あの 仁淀川との × 分かれの ところに

オーツケナ アノー ドウンドウン ユーテ
大きな あの ズンズン [と]いって

ヨーヨー ノゾクヨーナ オソロシー
やっと 覗くような 恐ろしい

イワオ ワッタ クカ° アラーネ。 (B ソーカヨ?)
岩を 割った ところが あるよね。 (B そうか)

アソコラー ナカナカ アリヤ アノ
あそこなんかは なかなか あれは あの

23↑24

イモジガ ヨケー イッツロート オモウネ。 {笑}
芋莖が たくさん 要っただろうと 思うね。 {笑}

高知 24-2

72B : ナンボカ イッツローノー。(A アレオ ミナサイヤ)
さぞかし 要っただろうね。(A あれを 見なさいよ)

エッコロ イモジオ (A ンー ソー ソー)
かなり 芋茎を (A うん そう そう)

コシラエチヨカザッタラ タラザツツロー。
作っておかなかったら 足らなかつただろう。

73A : ソー ヤッテ ムカシワ ソーユー フニ (B ンー) シテネ。
そう やって 昔は そういう ふうに (B うん) してね。

アノー カマエチヨカナ イカザッタ ト。
あの 準備しておかなければ いけなかつた って。

74B : ンデ ムカシワ ホンナ シンドー シチューゼヨ
それで 昔は そんな 苦勞[を] しているよ

ホンナ コト シテ イシオー ワッ ワッテノー。
そんな こと[を] して 石を × 割ってね。

75A : ワタシラ クノ ムカシノ オンヂーサンラワ
私たち[の] ところの 昔の おじいさんたちは

ナンチャッタゾネ オーケナ イシオ ヒトコロオ
何だったよ 大きな 石を 1か所を

ナヌカ オマサン ゲンノーデ タタイテネ。(B ンー)
7日 おまえさん げんのうで 叩いてね。(B うん)

マー ソリャ ワレラー ヤスミニャ ゲンノーウチオ セー
まあ それは「おまえたち 休みには げんのう打ちを しろ」

ユータト ユーガ ホンデ ヤスミワ
[と]言ったら いうが それで 休みは

タイテイ ナカツツローネ
たいてい なかっただろうね

ヤスミニ (B・C {笑}) ゲンノーウチオ セー
「休みに (B・C {笑}) げんのう打ちを しろ」

ユーバーチャケニ。 {笑}
[と]言うくらいだから。 {笑}

76B：ソーチャツツローヨ。 {笑}
そうだっただろうよ。 {笑}

77A：ホンデ オマサン (B ーン) ヒトコロオ ナヌカ タタイテ
それで おまえさん (B うん) 1か所を 7日 叩いて

ナヌカメニ ヒビガ イタ テテ
7日目に ひびが 入った [と]いって

シッカト ヨロコーンダ ト ユーカ°ネ。(B フーン?)
たいへん 喜んだ と いうよね。(B ふうん)

ソンデ ムカシャ オーケナ イワオ トウンチャウチャナイカ
それで 昔は 大きな 岩を 積んであるではないか

高知 24-4

ソレエ モツテキテ

それへ 持って来て

78B : ソーヨ モー ドーシテモ エー[33] ヤワラン[34] カ°ワ
そうよ もう どうしても 矢割りすることができないものは

ホラ (A ンー) {間} ボクトーデー アノ テコヤロンデ
ほら (A うん) {間} 木の棒で あの てこやらで

コネテ[35] コネコロバイチョイテ ステタガー アラーヨ。
動かして てこで転ばしておいて 捨てたの[が] あるよ。

79A : ソー ソーユー (B ンー) タオ イマ アラシユーカ°ネ
そう そういう (B うん) 田を 今 荒らしているがね

ヨーヨー コシラエタ クオ モッタイナイモンゾネ。
やっと 作った ところを もったいないものよ。

80B : ソレヨ モッタイナイモンゾ イマ カンガエテミリャ。{笑}
それよ もったいないものよ 今 考えてみれば。 {笑}

エーン

ええ

81A : マコト ムカシノ ヒトカ° {咳払い} ニノデ カクレター
ほんとうに 昔の 人が {咳払い} 叢で 隠れた

イタカ°サンデ カクレタ[36] ユーケンD
ひのき笠で 隠れた [と]いうけれど

高知 24-5

ソレモ オマサン セイゼイ ヨーヨー ト コシラエテ アルガ
それも おまえさん せいぜい やつと のことで 作って あるの

ホラ

ほら

82B : ソレモ ヨーヨー (A ン) コシラエタカ°チャキ ホラ。
それも やつと (A うん) 作ったのだから ほら。

83A : ソー ソー ナカナカ。
そう そう なかなか。

84B : ソコオ ホゼリ ココオ ホゼリ シテ
そこを 掘り ここを 掘り して

85A : ンー ソノ マー ソンデ ノナカケンザンカ° コシラエタ
うん その まあ それで 野中兼山が 作った

トージモ ソノ ホーヤクワ ナカッタモンネ ホラ。
当時も その 砲薬は なかったものね ほら。

86B : マー (A ンー) モチロン ナカツツローノー
まあ (A うん) もちろん なかっただろうね

ソノ ジブンニヤ。
その 頃には。

87A : ナカッタ ト。 ソー ユーテネ (B ンー)
なかった と。 そう 言ってね (B うん)

高知 24-6

イモジ ト ユー モノオ タイモオ トウクッテ
芋茎 と いう ものを サトイモを 作って

イモジト ユー モノオ ホイテ カコーチョコカニャ イカザッタ
芋茎と いう ものを 乾して 蓄えておかないと いけなかった

ト ユーテ (B ソーカ ンー) エー ハナイタケンネ。
と 言って (B そうか うん) ええ 話したからね。

マー ナニニセヨ ジンリョク ト ユー モノカ[°]ー
まあ 何にせよ 人力 と いう ものが

イヨイヨ ナンチャ ヒツヨー^ンチャットーネー。(B ン)
いよいよ 何だ 必要だったよね。(B うん)

88B : トニカク (A ンー) ヒトノ チカラチャ ナケリヤ
とにかく (A うん) 人の 力で なければ

ナンチャー デキザッタモノ。
何にも できなかったもの。

89A : ソー ソ (B ンー) ナンチャー デキザッタケニ。
そう そう (B うん) 何にも できなかったから。

90B : ソーヨ。
そうよ。

91C : ケッキョク モッコーデ ゼンブ ツチオ カイテ ヨセタ
結局 もっこで 全部 土を 担いで 寄せた

ワケチャロ？

わけだろう？

92 B : ソレヨ (A ソー) オマン ホッチョイテ ホラー

それよ (A そう) おまえ 掘っておいて ほら

ソレオー マタングワ[37]デー モッコーエ カキコーンデー

それを 股鉋で もっこへ 掻き込んで

93 A : ソーヨ (B ソレカ°ー) フターリシテ (B エー)

そうよ (B それが) 二人して (B ええ)

カイトモノヨネー。

担いだものよね。

94 B : フターリンデ カイトモンヨ。

二人で 担いだものよ。

95 A : ラチガ アクカノー。 ラチガ アクカ。

埒が あくかな。 埒が あくか。

96 B : ラチカ° アクカ。 イマ オモヤ オカシイモンヨ。

埒が あくか。 今 思えば おかしいものよ。

97 A : ケンド ソレンデー (B ンー) ヤ ヤリアケ° タケンネ。

けれど それで (B うん) × 仕上げたからね。

ソレカラ

それから

高知 24-8

98B : ソレンデ オーケナ イッタン[38]モ イッタンゴセン[39]モノ
それで 大きな 1反も 1反5畝もの

ユーヨナ (A ン) タオ ヤリアゲタキンノー。
いような (A うん) 田を 仕上げたからね。

99A : マー (B ンー) ソノ タオ ヤルニ
まあ (B うん) その 田を する[の]に

ヂンドウキ[40] ト ユー モノオ シトーヨ。
地づき と いう ものを したよ。

100B : ソー ソー チヅキオ シタ ンー。
そう そう 地づきを した うん。

101A : ジンドウキ ト ユー モノオ シテカラ
地づき と いう ものを してから

オーケナ マルイ イシオ コシラエテ
大きな 丸い 石を 作って

ソレオ シチハチニンカラ ジューニンパー
それを 7、8人から 10人くらい[で]

ソノ イシオ アノ マルイ イシノ ナカエ ナカオ ズット
その 石を あの 丸い 石の 中に 中を ずっと

ハリガネンデ ククッテネ (B ククッ ソー ソー)
針金で くくってね (B ××× そう そう)

ソレー (B ンー) オーケナ ナーノー ナニオー
それに (B うん) 大きな ×××× 何を

24↑25

オー ツケテ ホラ。 ウトーテ
緒を つけて ほら。 歌って

102B : ソーヨ ソレオ ゴニンモ ジューニンモー (A ン)
そうよ それを 5人も 10人も (A うん)

ヨケ フトイカ°ニナッタラ
いっそう 大きいのになったら

ニジューニンモ タカッテ ホラ。 (A ソー ソー ソレー)
20人も 集まって ほら。 (A そう そう それ)

ソノ オマン ウタ シツチャ センカヨ ウタオ
その おまえ 歌[を] 知っては いないかね 歌を

ソノ デヅキノ ウタオ。
その 地づきの 歌を

103A : ソノ ウター イロイロ ソリャ ヨサコイオ ウトーテモ
その 歌は いろいろ それは よさこいを 歌っても

デヅキノ ウタ アルローケンド (B フーン?)
地づきの 歌[は] あるだろうけれど (B ふうん)

ワタシャ ジブンー ウチノ タオ トウイタ トキニ
私は 自分[の] 家の 田を ついた 時に

高知 25-2

コートーエ イキヨッタ ジブシニネー (B アー ソーカ)
高等[小学校]へ 行っていた 頃にね (B ああ そうか)

オーケナ タオ ヤッテモロータ (B ンー)
大きな 田を やってもらった (B うん)

マー ソノ チヅキノ ウーター イロイロ アルケンド
まあ その 地づきの 歌は いろいろ あるけれど

オカ オモシローオカシー ウタマデ
×× おもしろおかしい 歌まで

ワタシャ ココチャ ヨー[41] ウタワン
私は ここでは 歌えない

ソノ オカシゲナ ウタチャケ。{笑} (B・C {笑})
その 変な 歌だから。 {笑} (B・C {笑})

(B マー マ ヒットツ ウトーテミーヤ ソレオ)
(B まあ まあ 一つ 歌ってみろよ それを)

(C ソレオ ウトーテミ) (B ンー)
(C それを 歌ってみろ) (B うん)

アノー オマサンガ ジョーズンチャキ
あの おまえさんが 上手だから

オマサンノ ホーガ ウタ ウタウ。
おまえさんの ほうが 歌[を] 歌う。

104B：ワシャー イカナ。
私は だめだ。

ソノ ギヅキノ ウタオ シランキ イカン。 イカンキ。
その 地づきの 歌を 知らないから だめだ。 だめだから。

105A：ヂンヅキノ ウタ ト ユーテモ
地づきの 歌 と いても

106B：オマン ウトーテ マー ヒトツ ウトーテ。
おまえ 歌って まあ 一つ 歌って。

107A：ヂンヅキノ ウタ ト ユーテモ ワタシャー スーンドウモ
地づきの 歌 と いても 私は // // // //

ロクニ シリモ センケニ マー。
ろくに 知りも しないから まあ。

108B：ン マー ロクニモ クソニモ アルカヨ。
ん まあ ろくにも くそにも あるか。

テンボースッポー〔42〕 ウトーテ。
思い切って 歌って。

109A：ケド マー ソノ ギドゥキオ シテネ。
けれど まあ その 地づきを してね。

マー ソリヤー {咳払い} チクト オサケオ ノーデカラ
まあ それは {咳払い} 少し お酒を 飲んでから

110B : ワシャー テーパー タタカーヨ コー {手を叩く音}
私は 手だけ 叩くよ こう {手を叩く音}

111A : イヤ ワタシャ ソンナ
いや 私は そんな[ことは]。

エー ウタワン。 {笑} (C {笑})
歌えない。 {笑} (C {笑})

112B : マー ソー イーナ。
まあ そう 言うな。

マー ヒトツ ウトーテ。 ヒトツ ウトーテ。
まあ 一つ 歌って。 一つ 歌って。

マー ヒトツ ソノー ゼツキノ ウター キカイテ。
まあ 一つ その 地づきの 歌[を] 聞かせて。

113A : ゼンツキノ ウタ ユーテモ (B ー)

地づきの 歌 [と]いっても (B うん)

カンカ°エテモ ミョーニ エー カンガエダサンケド。
考えても 妙に 考え出せ[=思い出せ]ないけれど。

{咳払い}

{咳払い}

114B : ダカラ ゼーンマ[43] バンバ[44]カシラン ユーローガヨ
だから 「ゼンマ バンバ」とか いうだろうが

アリヤ。

あれは。

115A : ソー ソー (B ソー)

そう そう (B うん)

デンマ バンバ ユーテネ (B ソー)

「デンマ バンバ」 [と]いってね (B うん)

ヨホーエ ヨホーエ ト ユーテ ウタワーヨ。

「ヨホーエ ヨホーエ」 と 言って 歌うよ。

116B : ヨホーエ ユンカノー (A ソー)

「ヨホーエ」 [と]言うのかね (A うん)

ソー (A ヨホーエ ヨホーエ ト)

うん (A 「ヨホーエ ヨホーエ」 と)

ダカラ ワシモ キータ コトガ アルケンド (A ソー)

だから 私も 聞いた ことが あるけれど (A うん)

ハッキリ ヨー シラン。

はっきり よく 知らない。

マー マー ウトーテ ヒトツ。

まあ まあ 歌って 一つ。

117A : ドー ユートウロー。 (B ヒトツ)

どう 言っただろう。 (B 一つ)

ドー ユートウロカネー。{間}

どう 言っただろうか。{間}

118B：ナニヤロ ユー？

何やら 言う？

119A：ン イー ドー ユー テ ユータラ (B シー)

ん ええ どう 言う と いったら (B うん)

ヂンマ バンパノ ケンゴナ ウチニ
「おじいさん おばあさんの 元気な うちに」

120B：アー ズンマ バンパ ユートローガ？

「ああ ズンマ バンパ」[と]言っているだろうね？

121A：ヨメオ モランセ ホンマニ ハナヨメオ

「嫁を もらいなさい ほんとうに 花嫁を」

122B：アー ヨーイヤセー ヨーイヤセー イヨツツローガヨ？

「ああ ヨイヤセ ヨイヤセ」[と]言っていたらうがね？

123A：ヤー ヨーイヤセー テ マー ソー ウトートーヨ。{笑}

「やあ ヨイヤセ」 って まあ そう 歌ったよ。{笑}

(B シー ソーナ イヨッタノー)

(B うん そんな[に] 言っていたな)

オモイダイタ イヤ。{笑}

思い出した いや。{笑}

124B : オマン ナカナカ (A エッ {笑}) ジョーズチャ
おまえ なかなか (A えっ {笑}) 上手だ

ジョーズチャ。(A ジョーズチャ チ {笑}) {笑}
上手だ。(A 上手だ って {笑}) {笑}

125A : マーネ ア ソー ユーテ ウトーテ ミンナーガ マー ナニヨネ
まあね あ そう 言って 歌って みんなが まあ 何よね

トニカク タオ ヒラク トキニワ マー
とにかく 田を 開く 時には まあ

ムカシワ マー タカ° サイコーチャッタケンネー。
昔は まあ 田が 最高だったからね。

126B : ソーヨ ナン ト ユータチ タガ イチバンチャッタキニ。
そうよ 何 と いったって 田が いちばんだったから。

127A : シー ホンデ マー シンドーシテ モッコーンデ カイテー
うん それで まあ 苦勞して もっこで 担いで

ヤット ウワトウチオ サガス ソノー
やっと 表土を 掻きひろげる その

25↑26

128B : ウワツチオ サガスマデニモヨ。
表土を 掻きひろげるまでにもね。

129A : サガスマデニ ウタニヤ イカンケン ホラ
掻きひろげるまでに 打たないと いけないから ほら

130B : バンカ°ー (A ン)
／／が (A うん)

ホラ バンオ キメナ イカンキンノー。
ほら ／／を 決めないと いけないからね。

131A : ソー ソー ソコネリ [45] オ シテノーシ。
そう そう 底練りを してね。

132B : ンー ソレエ (A ンー) ミヅオ タメチョイテ (A ン)
うん それへ (A うん) 水を 溜めておいて (A うん)

ネッテ ホラ (A ソー ソー)
練って ほら (A そう そう)

バンネリ [46] カシラン ユーテ (A ン)
ばん練りとか いって (A うん)

ヤッツロカ°ヨ?
やっただろうがね?

133A : ソコネリ ト (B ンー) ユー モノオ シテネー。
底練り と (B うん) いう ものを してね。

134B : ソー シチョイテ ソレカラ (A ソレカラ)
そう しておいて それから (A それから)

ホイチョイテ (A ンー)
乾しておいて (A うん)

高知 26-3

コンド ウワツチオ サガサニャ イカナ ホラ。
 今度[は] 表土を 掻きひろげないと いけないよ ほら。

135A : ソー ソー コンド ウワツチオ サカ°イテネー (B ンー)
 そう そう 今度 表土を 掻きひろげてね (B うん)

ソノ マー ウワトウチノ イシワ
 その まあ 表土の 石は

ワタシモ コートー イク ジブンチャッタケニ
 私も 高等[小学校に] 行く 頃だったから

ホラ (B アー)
 ほら (B ああ)

アノー チット テツダイニ コイ ユーテネ。
 あの 「ちょっと 手伝いに 来い」 [と]言ってね。

136B : ヒライニ イタ。
 拾いに 行った。

137A : チット ヒライニモ (B ンー) イッタカ° イタカ°ネ。
 ちょっと 拾いにも (B うん) ×××× 行ったがね。

マー ソー ユーテ オ {咳払い}
 まあ そう 言って × {咳払い}

ヨメサンカラー ワカエ アノー オヂーカラ
 嫁さんから ××× あの おじいさんから

カレコレ アツマッテ

誰彼 集まって

ソノ マー オモシローニ チドウキオ シタモノヨ。 ンー。

その まあ おもしろく 地づきを したもののよ。 うん。

138B : ソーヨ ニギヤカナ ヤットー ソリャー。

そうよ 賑やかに やったよ それは。

139A : ソー ソー (B ンー) ソー ヤッテ マー ソレワ

そう そう (B うん) そう やって まあ それは

モー ワタシラカ° シッテカラノ コトヤキ

もう 私たちが 知ってからの ことだから

ホーヤクモ アッテ ホリャ マー ワッテ マー トニカク

砲薬も あって ほら まあ 割って まあ とにかく

ソノ アノー X5サン ト ユー ヒトガ ソレワ

その あの X5さん と いう 人が それは

イシカケツミノ サイコー ジョーズナ ヒトチャッタ。

石垣積みの 最高[に] 上手な 人だった。

140B : フーン? アー ソーカヨ。

ふうん? ああ そうか。

141A : ソノ ヒトカ° ツンダ イシカケワ (B ン)

その 人が 積んだ 石垣は (B うん)

高知 26-5

クルワナーネ (B ア ソーカヨ?)

狂わないわね (B あ そうか)

チョット イマデモ (B ンー) ヒトツ

ちょっと 今でも (B うん) 一つ

ワタシ トコノ イシカケガ タカイケンドネ (B ンー)

私[の] ところの 石垣が 高いけれどね (B うん)

ソレワ マー ヨー ソライテ ツンチョルカ°ネー。

それは まあ よく 反らして 積んでいるがね。

(B フーン?) エー ソレカラ

(B ふうん) ええ それから

ソノ ヒトラーノ アトエ ツインダ ヒタ

その 人たちの 後へ 継いだ 人は

オラ クノ {咳払い} タオ ソーシニ シタ。

「俺の 家の {咳払い} 田を / / / / / / 。

タカー (B {咳払い}) ネサイテ トウンデ オンシャー

ほんとうに (B {咳払い}) 寝させて 積んで おまえは

コレ ンゴシャクパー ネーチューンガ

これ[は] 5尺ほど 寝て[=石を寝かせて積んで]いるが

ナカナカ タガ セバツテ ヤリヌカシタ ユーテネー。 {笑}

なかなか 田が 狭まって 失敗した」 [と]言ってるね。 {笑}

142B : ソーヨ ダイタイ ムカシノ ヒター ホラ
そうよ だいたい 昔の 人は ほら

タオ ヒロメヨー オモーター (A シー ソライタ)
田を 広くしよう [と]思って (A うん 反らした)

イマミタイニ ネササンヅクニ ホラ (A シー)
今みたいに 寝させないで ほら (A うん)

タテチョイテ マダ オマケニ ウエノ ハシデ
立てておいて まだ おまけに 上の 端で

コー チョット モドシヨッタ ホラ。
このように ちょっと 戻していた ほら。

143A : シー (B シー)
うん (B うん)

ソ ソノ モンドスオ ダレマーレ エー セナヨ。
× その 戻す[の]を 誰にでも できないよ。

144B : アーノ モドシガ ムツカシー ト。
あの 戻しが 難しい って。

145A : ソノー ソノ X5サン ト (B シー) ユー ヒトカ°
×× その X5さん と (B うん) いう 人が

ツンダネー イシカケワ ヒトツモ クルワンケン。
積んだね 石垣は 一つも 狂わないから。

146B : ソーカヨ。

そうか。

147A : ソリヤー ヒトツツモ (B ン一)

それは 一つも (B うん)

アレワ ア フシギネ。(B フーン?)

あれは あ 不思議ね。(B ふうん)

イシノ ナラベカタカ° チガウローカネ。(B アー)

石の 並べ方が 違うだろうか。(B ああ)

ン ソリャー マー ジョーブナ モンヂャ。

うん それは まあ 丈夫な ものだ。

マーネ　ダレンマレカ°　ツンダチ　ネーテ　ミタリ

まあね 誰彼なしに 積んだって 寝て みたり

タカ^ンデ ダレヤロ クノ イシガケワ シロート

実に 誰やらの ところの 石垣は 素人

オラ　クノ　イシカケワ　タカヂャニ

俺の 家の 石垣は / / / / /

イシカケ　オサエンチ　サッサ　アカ°レルカ°

石垣[を] 押えなくても さっさ[と] 上がれるが

ヤリヌカレタヂャ

失敗したなんて

テガセ タカ° セバッタゾ ユーテネ。 {笑}
××× 田が 狭くなったぞ [と]言ってね。 {笑}

148B：ソーヨ セバラー
そうよ 狭くなるよ

ネカイタラ ドーシテモ セバイキ ホラ。
寝かせたら どうしても 狭いから ほら。

149A：ヨータ ヒョーシニ (B ソー) オコラエル
「酔った 拍子に (B うん) 怒られる」

ユーテネー (B {笑}) {笑}
[と]言ってね (B {笑}) {笑}

ユー コトンチャッタカ°ネ。
[と]いう ことだったね。

マー トニカク マー ソーユーネ
まあ とにかく まあ そういうね

150B：アレモ ジョーズ ヘタカ° アラー。
あれも 上手 下手が あるよ。

151A：ン。 マー カネノ トレン ジブンワ
うん。 まあ 金の 取れない 頃は

26↑27

カネン トレンナリノ ヤリカタンデ ホラ。(B ソー ソー)
金の 取れないなりの やり方で ほら。(B そう そう)

高知 27-2

イー。(B ンー) タオ ヒライテネ ヤッチョルカ°
ええ。(B うん) 田を 開いてね やっているが

マー ナニヨ イマンデ ユータラ ハナシニ ナラン
まあ 何よ 今で いったら 話に ならない

シンドー シチョルケンド ソノ シンドー シテ ヤル ヒトカ°
苦労 しているけれど その 苦労 して やる 人が

ヤリヤ ト ユーテ (B ソー ソ)
やり手 と いて (B そう そう)

ホメラレ (B ンー) エライ ヒトヨネ。ン
誉められ (B うん) すごい 人よね。ん

152B : シンドーシタ ヒトカ°ー (A ンー ンー)
苦労した 人が (A うん うん)

セイコーシチョラー (A ンー)
成功しているよ (A うん)

ツマリ ホラ。(A ソー ソー) シュッセシチョラーヨ。ンー
つまり ほら。(A そう そう) 出世しているよ。うん

153A : シュッセオ シチョーチ マー ナニヨネ
出世を しているって まあ 何よね

ソンデ マー ダレソレ クノ ダレカ° エラカッタチ
それで まあ 誰々の ところの 誰が 偉かったって

高知 27-3

リョーケナラ リョーケ イチンドーノ
領家なら 領家 一同の[ために]

ソレカ° ヤクンダチニ ナツショラーネ。
それが 役立ちに なっている [=役に立っている] よね。

オカケ°サマデ
おかげさまで

154B : ソーユー コトヨ。 シー
そういう ことよ。 うん

155A : トチ ト ユー モノワ
土地 と いう ものは

ヒトリカ° モチツメル モノチャ ナイ。
一人が 持ち続ける ものでは ない。

156B : モチツメヤ センキンノー。 シー
持ち続けは しないからね。 うん

157A : ダレガ ドコ カウヤ ワカラン モンチャーケンネ。
誰が どこ[を] 買うか わからない ものだからね。

(B ソー ソー) ソレデ センゾノ マー
(B そう そう) それで 先祖の まあ

オカケ°サマ ト ユー コトカ° アル ワケヨ ホラ。
おかげさま と いう ことが ある わけよ ほら。

158B：ソーユー コトヨ。

そういう ことよ。

159A：ン。 ソンデネ マー アノ {咳払い}

うん。 それでね まあ あの {咳払い}

ムカシノ ヒトワ ムカシノ ヒトナリニ

昔の 人は 昔の 人なりに

ショーンヂキニ ハタライテ

正直に 働いて

クワノ ミミ[47]デ ザイサンオ トウクツテネー。

桑の 虫で 財産を 作ってね。

(B ソー ソー) エー (B ンー) ヒトトーリヂャ ナイ。

(B そう そう) ええ (B うん) 並では ない。

ワタシモ {咳払い} オヂサンラーカ° ホントニ

私も {咳払い} おじさんたちが ほんとうに

ソノ マコト アノネー ハタライテ ソノ コーオ

その ほんとうに あのね 働いて その 功を

ワタシニ コー シタ コー シタ ユーテ

私に こう した こう した [と]言って

ハナイテ クレタカ° (B フーン?)

話して くれたが (B ふうん)

マッコト ソノ マネワ デキンゾネ。

ほんとうに その まねは できないよ。

160B : イマー {笑} ソンナ マネラ デキン デキン。

今は {笑} そんな まねなど できない できない。

161A : ンー ナカナカネ (B ンー) ソノ マネワ デキン。

うん なかなかね (B うん) その まねは できない。

マー ソンデ マー ムカシノ ヒトワ ソショクンデ。

まあ それで まあ 昔の 人は 粗食で。

ホリヤ タベモノモ ヘコ^ナ モノ バッカシ クテ。

ほら 食べ物も 粗悪な もの ばかり 食べて。

162B : ソーヨ ヘコ^ナ モノ バッカシ クテ

そうよ 粗悪な もの ばかり 食べて

ムカシノモナー マー ユータラ (A ンー)

昔の者は まあ 言ったら (A うん)

ドンナー コタ ドンナケンド

馬鹿な ことは 馬鹿だけれど

ソレガ ソー セニヤ クテイケザッタキ イカンケンド

それが そう しないと 食べていけなかったから いけないけれど

エー モナ ウッテノー (A ソー ン)

いい ものは 売ってね (A そう うん)

ヘコ[°]ナ モノ バッカリ クテ (A ソー ソー)
粗悪な もの ばっかり 食べて (A そう そう)

ヤッテイトーヨ。
やっていたよ。

163A : シー (B シー)
うん (B うん)

マー ソレチャキニ ザイサンカ[°] デキツローデ?
まあ それだから 財産が できただろうよ

164B : ソーヨ (A シー)
そうよ (A うん)

ソレチャキニ ザイサンカ[°] デキタケンド (A シー ソーヨ)
それだから 財産が できたけれど (A うん そうよ)

イマノ モナ ハンタインデー エー モノオ クチョイテ
今の 者は 反対で いい ものを 食べておいて

ヘコ[°]ナ モノオ ウルヨーニ ナッタワヨ。
粗悪な ものを 売るように なったわよ。

ホ ンデ
× それで

165A : マー ソー ヤッテ ソレカラネ トチオ モッチョル ヒトモ
まあ そう やって それからね 土地を 持っている 人も

高知 27-7

ジブンニャ ヤブダ[48]ノ ヘコ[°]ナ クオ ツクッテ
自分には 藪田の 粗悪な ところを 作って

エー クオ アテテネ。
いい ところ[=田]を 賃貸してね。

166B : ソーユー コトヨ。
そういう ことよ。

167A : シー (B シー) クモトゥオ ホラ モローテネ。
うん (B うん) 年貢を ほら もらってね。

168B : ソーヨ クモツ クモトゥオ (A シー)
そうよ ××× 年貢を (A うん)

ヨケ モラワニャ イカンキ ホラ。
たくさん もらわないと いけないから ほら。

169A : ソー ソー。 マー ソーシテ アノ ナンチャネ
そう そう。 まあ そうして あの 何だね

ザイサン ト ユー モノオ モッチョル モンカ[°]
財産 と いう ものを 持っている 者が

エライ ト ユー (B シー) コト[°]チャツツローネ。 ソノ
すごい と いう (B うん) ことだっただろうね。 その

170B : ソノ クモトゥカ[°] ムカシャ ホラー ゾンカ[°]イ タカカッタキ
その 年貢が 昔は ほら 案外 高かったから

オマンラー　ヂヌシチャッタキ　モーケタ　クチチャローケンド
おまえたちは　地主だったから　儲けた　口だらうけれど

ワシラ　アタッタ　ブンチャーキ　イカンカ°ノー。
私たちは　小作した　身分だから　いけないがね。

171A：ソリャー　アノー　ワタシラーモ　センゾノ　オカケ°サマデ
それは　あの　私たちも　先祖の　おかげさまで

(B　シー)　ドーニカ　マーネー　アノー　{咳払い}
(B　うん)　どうにか　まあね　あの　{咳払い}

コドモニモ　ドウンドウカッティモ　セン　ヤッテキタケンド
子供にも　//////////　//　やってきたけれど

ホラ。ムカシノ　ヒトノー　マッコト　クローワ
ほら。昔の　人の　ほんとうに　苦労は

27↑28

ムカシノ　ヒト　ユータチ
昔の　人　[と]いっても

ジューネン　ヒトムカシ　ト　ユーガ
10年　一昔　と　いうが

ワタシラカ°　コドモ　ジブン　ユータチ
私たちが　子供[の]　頃　[と]いっても

モー　ゴジューネン　ムカシチャケンネ。
もう　50年　昔だからね。

高知 28-2

172B : ソーヨ ンゴジューネン ムカシヨ?

そうよ 50年 昔よ

173A : ンゴジューネンモ ***ネンモ ムカシチャケン。

50年も ***年も 昔だから。

174B : シー ソンデ イクムカシニモ ナラーヨ。

うん それで 幾昔にも なるよ。

175A : マー ムカシャー オマン カチ[49]ヨ ムイタチ

まあ 昔は おまえ 梶を 剥いたって

ホントー トリオ サカイニ ヤッタケンネ
ほんとう[に] 鶏[の鳴き声]を 境に やったからね

(B ソレヨ ソレヨ)

(B それよ それよ)

トリオ イチバンドリオ。 (B シー)
鶏[の鳴き声]を 一番鶏[の鳴き声]を。 (B うん)

ソレオ オマサンー ナンゼヨ ソノアイダ コンドモオ オーテ
それを おまえさん 何だよ その間 子供を おぶって

モリョー シテ フトンエ スカッテ ネートーヨ。
守りを して ふとんへ すがって 寝たよ。

176B : ソノハズヨノー。

そのはずよね。

177A : シー ソー ヤッテネー。

うん そう やってね。

178B : シー ソー セニャ イカザッタキ ショーナイ。

うん そう しないと いけなかったから しかたない。

179A : シー ソー セニャー イカナーネ。 (B シー)

うん そう しないと いけないね。 (B うん)

ソー ヤッテカラ マー オマサン ミンナーカ°

そう やってから まあ おまえさん みんなが

コンドモモ コンドモ コノ トシヨリモ トシヨリ トモドモニ

子供も 子供 この 年寄りも 年寄り ともどもに

ヤットーヨ ホラ。 (B ソー ソー) シ (B シー)

やったよ ほら。 (B そう そう) うん (B うん)

ソンド マー カテイ ト ユーモンカ°ー ホラ ナニヨネ

それで まあ 家庭 と いうものが ほら 何よね

ミンナーシテ ハタラクケニ ホラ

みんなで 働くから ほら

180B : ソーヨ ミンナーデ ハタライタワ。

そうよ みんなで 働いたよ。

181A : シ マー ソンデ ワタシモ チクチク シンドーノ

うん まあ それで 私も 少しずつ 苦勞の

高知 28-4

イタ コタ シッチョルカ° ナカナカ エンエン
要った ことは 知っているが なかなか 延々[と]

ムカシノ ヒトワ ソノ コンカ° トーカッタネー。
昔の 人は その 根が 続いたね。

182B : ソーチャー。(A ン) マー シブトカッタノー
そうだ。(A うん) まあ しぶとかったね

ヤリンダイタラ ドーシタチ ヤメザッタキニ。 ンー
やり出したら どうしたって 止めなかったから。 うん

183A : ンー コンカ° トーカッタネ トーカッタゾネ。 ソンデ
うん 根が 続いたね 続いたよ。 それで

ソノ クセカ° ワタシラカ° アルケニ ナニヨネ
その 癖が 私たちが あるから 何よね

モー ヤメタラ エー ト コー ユワレラーヨ。 ホラ
もう 止めたら いい と このように 言われるよ。 ほら

184B : ソーヨ (A ンー) モー タイテーナラ ヤメヤー
そうよ (A うん) 「もう いいかげんに 止めな」

(A {笑}) ユーテヨ ヨバー。 {笑}

(A {笑}) [と]言ってね 呼ぶわ。 {笑}

185A : ソーヨ。 ンデ マー トニカク ココノ オヂーサンラニセヨ
そうよ。 それで まあ とにかく ここの おじいさんたちにせよ

高知 28-5

ナメカ°ワノー X1サン X2サンニセヨ
行川の X1さん X2さんにせよ

マー キオ カクニワ エラカッタ。
まあ 木を 担ぐには すごかった。

マー ソノ カケコ°エカ° オモシロカッタカ°ー
まあ その かけ声が おもしろかったの[を]

ワスレタ オリバ オーカタンチャケド
忘れた 時が ほとんどだけれど

オモイダイテミリヤーネー (B ンー)
思い出してみればね (B うん)

ナカナカ アノ ヒトラーワー アーノ アシカ° トウオカッタゾ
なかなか あの 人たちは あの 足が 強かったぞ

アリヤー アシカ°。
あれは 足が。

186B : エライヒト ンー エライヒトカ° オッタノー。
すごい人 うん すごい人が いたね。

187A : アシカ° トウオカッタネー マッコト オモシローニ ヤッタ。
足が 強かったね ほんとうに おもしろく やった。

ソレカラ マー クレ ハルカ° クリヤー
それから まあ ×× 春が 来れば

高知 28-6

トチオ ヒラク ヒター トチオ ヒラク。

土地を 開く 人は 土地を 開く。

カラ カミゾ[50]オ ヘグ[°]ル モナー ヘングルネー。

[それ]から 梶の皮を 剥ぐ 者は 剥ぐね。

マー ナンチャネー ヨッピト ヤラニヤ イカザッタキ。

まあ 何だね 夜通し やらないと いけなかったから。

188B : ソーヨ (A ン) ヨカラー ヨルマデヨ。 ***

そうよ (A うん) 夜から 夜までよ。 ***

189A : ソー ソー。 ソノ オマサン カチオ ヘグ[°]ルニ

そう そう。 その おまえさん 梶を 削る[の]に

ヒルカラ ヒル ヤリヨッタラ

昼から 昼 やっていたら

ヒトツモ デキンモノ ホラ。

一つも できないもの ほら。

190B : カンヂヘグリラワ モー ヨナベ バッカリチャッタキニ ホラ。

梶削りなどは もう 夜なべ ばっかりだったから ほら。

191A : ヨーナベ ヨナベ ヨナベ バーッカシヨネ オマサン。

夜なべ 夜なべ 夜なべ ばっかりよね おまえさん。

192B : アノ (A ン) カンヂガーラ[51]

あの (A うん) 梶殻[で]

タイチョイテノー。 (A ソー ソー ンー)

[火を]燃やしておいてね。 (A そう そう うん)

ヨ ナニカニ ウタ ウタイモッテ タイチャー

よく 何やかや 歌[を] 歌いながら 燃やしては

オバーラカ° ヤリヨッタカ°。

おばあさんたちが やっていたの。

193A : マー ウトータ モノヨ (B ンー)

まあ 歌った ものよ (B うん)

タカンデ ウタインデモ セニヤ

実に 歌いでも しないと

ネブッタラ イカン。 (B ン)

眠ったら いけない[から]。 (B うん)

ヒルワ トウケアゲ[52]オ シテ ヒヤイメニ オーチャーケン

昼は つけ上げを して 冷たい目に 遭っているから

ヒノ ハタエ キタラ ナルホンド ヌクモッタラ ネブタイガ

火の 傍に 来たら なるほど 温まったら 眠たいの[は]

28↑29

194B : ネプト ナラヨー。

眠たく なるよ。

195A : ホントーチャ ホントーチャ ユーテ

ほんとうだ ほんとうだ [と]言って

高知 29-2

196B : アリヤー クサー ヘク°ルカ°ー (A ンー)
あれは [梶の]皮を 削るのは (A うん)

ホーチョーカ° キレルキニ ネブリヨッタラ シマイヨ
包丁が 切れるから 眠っていたら たいへんなことよ

(A ソーヨ ソーヨ) テオ キルキニ ンー
(A そうよ そうよ) 手を 切るから うん

197A : ホンデ マー ソノー ヒトツ ヒトツ ハインデ
それで まあ その 一つ 一つ 剥いで

ヒトツ ヒトツ ヘングッテ (B ンー)
一つ 一つ 削って (B うん)

ナカナカ エンエン
なかなか 延々[と続いて]

ズルイ モンチャ ナイゾ アリャネー。
たやすい ものでは ないよ あれはね。

198B : アリヤー (A ン)
あれは (A うん)

ナカナカ ズルイ モンチャ (A ン) ナイゾヨ?
なかなか たやすい ものでは (A うん) ないよ

199A : マー ソレオ ヤッテキタカ° ワタシラーモ マー
まあ それを やってきたが 私たちも まあ

高知 29-3

シュン センソー シューセンニ ナッテカラ
×× × 戦争 終戦に なってから

カミソ ト ユー モノオ
紙麻 と いう ものを

ソリヤ ムンギオ ツクラニヤ イカン
そら 麦を 作らないと いけない

カンチャ コング ミツマタ[53] コング ユーテ
梶は 抜き取れ ミツマタ[は] 抜き取れ [と]言って

ホラ ムギオ ツクラニヤ イカン ユーテネー。
ほら 麦を 作らないと いけない [と]言ってね。

200B : ソーヨ クー モンカ° ノーナッテカラー
そうよ 食べる ものが なくなってから

ソンナ コト イーダイテ ホラ。
そんな こと[を] 言い出して ほら。

201A : イーシ カライモ ツクラニヤ イカン ユーテ。
ええ サツマイモ[を] 作らなければ いけない [と]言って。

モー アン
もう ××

202B : シー イモ ツクレ イモ ツクレ ユーテ。
うん 芋 作れ 芋 作れ [と]言って。

203A : ソー ソー。 アーユー モノワ
そう そう。 ああいう ものは

イマ マー スタッタケンドネ。
今[は] まあ すたれたけれどね。

アー ナンチャ アタシャー オモータ。
ああ 何だ 私は 思った。

マー コリヤ スミオ ヤカンドウトウ
まあ これは 炭を 焼かないで

カイコオ カワンドウトウ
蚕を 飼わないで

カラ カミソオ ツ克蘭 ヒャクショーニ ナッテミタイ
[それ]から 紙麻を 作らない 百姓に なってみたい

ト オモータ。
と 思った。

204B : {笑} マッコトー ソノジブンニヤ ソーヨノー。
{笑} ほんとうに その頃には そうよね。

205A : ソレッパー クローカ° イタキンネー。
それくらい 苦勞が 要ったからね。

206B : イタ イタ クローガ。
要った 要った 苦勞が。

207 A : シー マッコト ヨワ ネーケニナラザッタケンネー。
うん ほんとうに 夜は 寝ることができなかったからね。

(B シー) マー ナカナカ ナニオ ユツテモ
(B うん) まあ なかなか 何を 言っても

コノ コノ ミチガ ナイバー
×× この 道が ないほど

マッコト イカン コタ ナイ ホラ。
ほんとうに いけない ことは ない ほら。

208 B : ソーヨ (A シー)
そうよ (A うん)

ミチカ° ナカッタキン マッコト ミチガ セバカッタキノー。
道が なかったから ほんとうに 道が 狭かったからね。

209 A : イマコソ オマサン ハタケカ° サンタン アリヤ
今こそ おまえさん 畑が 3反 あれば

ハヤ ンドーロガ ツイチョルカ°ネ。
もう 道路が ついているよ。

210 B : ソーヨ (A シー) モー イマー (A シー)
そうよ (A うん) もう 今 (A うん)

ソノ ハタケマデ ドーロガ イチョランヨーナ
その 畑へまで 道路が 行っていないような

高知 29-6

ハタ クワ ヨケ ナイモン。
×× ところは 多く[は] ないもの。

211A : ナイ ナイ。 マー (B ンー)
ない ない。 まあ (B うん)

ソンド ムカシノ ヒトワ マー ナンチャネー
それで 昔の 人は まあ 何だね

コノ ヨーソノ コトワ シランケンド
この よその ことは 知らないけれど

ジューロクソノ ココノ ヘンノ コト^ンチャッタラ
十六村の ここの あたりの ことだったら

アタシラモ チクチク シッチョルカ[°]
私たちも 少しずつ 知っているが

アー ナカナカ ドコノ ヒトモ
ああ なかなか どこの 人も

カネオ トル セーカツオ スル
金を 取る 生活を する

カゾクオ ヤシナウニオイテワ クローシタゼヨ。
家族を 養う[こと]においては 苦労したよ。

212B : ナカナカ (A ン) クローシチョラーヨ。 ソリヤー
なかなか (A うん) 苦労しているよ それは

213A : シ カネガ トレザッタモノ。

うん 金が 取れなかったもの。

214B : シー カネガ トレンキノー。

うん 金が 取れないからね。

215A : シ ソー ソー シ トレザッタガ

うん そう そう うん 取れなかったが

マー ソンデ イマワ マー ナニヨ カネカ° トレルケニ
まあ それで 今は まあ 何よ 金が 取れるから

ムカシノ ハナシオ シタチ イカンケンド。
昔の 話を したって いけないけれど。

216B : シー ワライグソヨヨ イマー。

うん 笑い種よね 今は。

217A : シ シー ムカシワネー。

うん うん 昔はね。

センゾワ ソンデ タットバニャ イカン。
先祖は それで 尊ばないと いけない。

218B : ソーユー (A シー) コトチャーケンド

そういう (A うん) ことだけれど

ワリアイ ソレカ° イカナ。 (A シ)
わりあい それが だめだよ。 (A うん)

イマノ ワカイ モナ イカンケンド モー ショーガナイワ
今の 若い 者は いけないけれど もう しかたがないよ

ホラ (A アー) ヨナミチャキンノー
ほら (A ああ) 世並 [=世の風潮] だからね。

219A : マー ナンチャネー アタシワ マー コンドモラー マコ°ラーニモ
まあ 何だね 私は まあ 子供たち 孫たちにも

ソーユー ハナシオ スル。(B ーン)
そういう 話を する。(B うん)

マー センゾワ * ダイジニシテ
まあ 先祖は * 大事にして

29↑30

タンダー センゾノ ハカマイリオ スルニ
ただ 先祖の 墓参りを するに[しても]

テヤテヤンデ シチャ イカント。
いいかげんで しては いけないと。

コノ ヒトワ コレクライ エラカッタ ト
この 人は これくらい すごかった と

ウチノ キソオ ツクツテクレタ ト
家の 基礎を 作ってくれた と

コノ ヒトノ ジンカクワ コーユー ヒトンチャッタ ト
この 人の 人格は こういう 人だった と

高知 30-2

ジブンモ ナライ オボエテイキタイ ト ユーヨナ
自分も 習い 覚えていきたい と いうような

ソノ ソーユー ココロネンデ オカ°マニャ
その そういう 心根で 拝まないと

ナンチャーニ ナリャー セン ト ユーテ (B エー エー)
何にも なりは しない と 言って (B ええ ええ)

ワタシワ ユーチャル コドモニ。 シ
私は 言ってやる 子供に。 うん

220B : ソー ソー マッコト ソーヂャ。
そう そう ほんとうに そうだ。

221A : タンダ ウワノソランデネ (B ンー)
ただ 上の空でね (B うん)

ナンチャ シタチ イカン ト ユーテ
何だ したって いけない と 言って

ソノ ヒトノ ホントーニ ナニヨ
その 人の ほんとうに 何よ

ソノ ジンダイオ ノリコエテキテネー (B ンー)
その 時代を 乗り越えてきてね (B うん)

マー ゲンダイニ キタノマデワ
まあ 現代に きたのまで[に]は

高知 30-3

ヒトトリーノ クローンヂャ ナイケニ
一通りの 苦労では ないから

マー ソレオ シツチョラニャ イカンゼヨ ト ユーテ ホラ。
まあ それを 知っていないと いけないよ と 言って ほら。

(B ソー ソー) ソレオ ココロニ オイテ オカ°マンコトニワ
(B そう そう) それを 心に 置いて 拝まないことには

ナンチャーニ ナリヤー セン ト ユーテ。
何にも なりは しない と 言って。

マー ナンヂャネ トニカク ジブンラーモ
まあ 何だね とにかく 自分たちも

ンドー ナニヨネ コラー {咳払い}
××× 何よね これは {咳払い}

ンドーセ ワコーチャ オラン。{笑}
どうせ 若くては いない。{笑}

トシモ ヨルシネー (B ソーヨ) マー
歳も 寄るしね (B そうよ) まあ

222B : モー (A エー トシモ ヨッテイクコトンヂャーケニ)
もう (A ええ 歳も 寄っていくことだから)

タイテー カンエ カタアシ フミカケ (A ンー)
たいてい 棺へ 片足[を] ×××× (A うん)

フミカケチューキンノー

踏みかけているからね。

(A シー シー マー マー ナンチャネ) シー モー

(A うん うん まあ まあ 何だね) うん もう

ホンデ ダンダン ヤカマシュー ユータチ イカナ。

それで だんだん やかましく 言ったって いけない。

223A : マー ケンコー ト ユーモンカ[°]ー ホラ

まあ 健康 と いうものが ほら

Bサン サイコーヨ？

Bさん 最高よ

224B : ソーヨ (A シー {笑})

そうよ (A うん {笑})

マー トニカクー ワコー オラニャ イカンゼヨ

まあ とにかく 若く いないと いけないよ

トシバツカリ サンヨーシヨッタラ イカンゼヨ。

年ばかり 数えていたら いけないよ。

225A : ソー ソー ソー (B シー) マーネ。

そう そう そう (B うん) まあね。

226C : アッ コー ハナシ モトニ モドスケンドネ (B シー)

あっ こう 話[を] もとに 戻すけれどね (B うん)

高知 30-5

(A ン) ケッキョク ムカシワ ソノ

(A うん) 結局 昔は その

ドーグ ユー モンガ ナカッターローガヨ。

道具 [と]いう ものが なかっただろうが。

ソノ カチオ ヘグッター スルノモ ドンナ ***

その 梶を 削ったり するの も どんな ***

227A : カーチョ ヘングルニャネー ソノ ヘ

梶を 剥ぐにはね その ×

(B クサヘグリボーチャー ユーテ)

(B [梶の]皮削り包丁 [と]いって)

クサヘグリボーチャー ト ユーテ

[梶の]皮削り包丁 と いって

カンチャデ ウッテモロートーネ。(C ンー)

鍛冶屋で 打ってもらったよね。(C うん)

エー ナカ°サカ°ー

ええ 長さが

228B : ムコーノ ハ ムコーノ ヒロイ ホラ (A フン フン)

先の × 先の 広い ほら (A ふん ふん)

ムコーガ ソラー ニスンバー アッツロー。(A ソー)

先[の幅]が それは 2寸くらい あっただろう。(A そう)

高知 30-6

ソレカラ テマエオ スーット スッコケタヨーニ
それから 手前を すっと 細く痩せ細ったように

(A ソー ソ) サンカクニ シテ ホラ

(A そう そう) 三角に して ほら

229A : ココエ ハソーデ シャツ シャツ シャト
ここへ 挟んで シャツ シャツ シャと

コー ヘグッタ
こう[して] 削った

230B : サンカクニ シテー ソレエ (A ン)
三角に して それへ (A うん)

チョット ミゾイー (A ン)
ちょっと 短い (A うん)

イッスンバーノ エオ ツケテー (A ソー ソ コーヤッテ)
1寸くらいの 柄を つけて (A そう そう こうやって)

ソレカラ ヒトサシユビトー ソノ ホーチョートンデー
それから 人差指と その 包丁とで

231A : ソー ソ ソーヤッテ
そう そう そうやって

232B : コー ケズツタワ。
こう 削ったよ。

233A : ンー ケズットーネ。
うん 削ったよね。

234B : マー ユータラ ヘク°ッテ
まあ いったら 削って

235A : ソノ ケズリカタガ マタ アラーネ。
その 削り方が また あるよね。

236B : ンー ヘグリヨーニヨッテ ホラー
うん 削り方によって ほら

237A : ホントーネ ケシコ ケシコ ケシコ
ほんとうね ケシコ ケシコ ケシコ

シタカラ ケシケシ ヘク°ッテシモータラ
下から ケシケシ 削ってしまったら

ソノ アノ カンヂニ ヒカリ ト ユー モンガ ナイワネ。
その あの 棍に 光 と いう ものが ないよね。

(B ンー) (C ンー)
(B うん) (C うん)

シャッ シャッ シャット コーネ シャッ シャッ シャット
シャッ シャッ シャット こうね シャッ シャッ シャット

ソノ ウワカーノ オニカー ト ユオーカ
その 上皮の 鬼皮 と いおうか

パラバラ オチル クロ オニカワオネ

パラバラ 落ちる ×× 鬼皮をね

サッ サッ サット サスッテ コノネ アノー セニャ

サッ サッ サッと 擦って このね あの しないと

30↑31

ケーシコ ケーシコ ケシケシ シテ

ケシコ ケシコ ケシケシ して

シータノ ハンダミマデ コレ ケズルヨーナコト シタラネ。

下の 肌身まで これ 削るようなこと[を] したらね。

ソレワー アタシラカ° ジブンニャ

それは 私たちの 頃には

ソノ クサニ バン アノー トーキューカ° ツイタヂャ。

その 草に 番 あの 等級が ついたではないか。

ニシカ°ーエ ウッテネー

西川[商店]へ 売ってね

アノー フルジンチ[54]ノ ニシカ°ワエ ウッテネ。

あの 古新地の 西川[商店]へ 売ってね。

238B : ソー ソー フル フルジンチノ ニシカ°ワ ユーテ

そう そう ×× 古新地の 西川[商店] [と]いって

239A : ソレワ オナコ°ノ セキニンヂャーキニ

それは 女の 責任だから

高知 31-2

クサ クサノ トー バシ ソノ トーキューワ ホラ。
×× 草の ×× 番 その 等級は ほら。

シャッシャ シャッシャ
シャッシャ シャッシャ

コリヤ ジョーズナ ヒトワ シコロバスヨーニ テ ヘグータ。
これは 上手な 人は 転がすように して 削った。

240B : ハヤカッタゼヨ ハヤイ モナー。
早かったよ 早い 者は。

241A : アタマオ ゴスンバーネ シャト ヘク[°]ッテ
頭を 5 寸くらいね シャと 削って

ソコオ ニギッチョッテ シャーッ
そこを 握っておいて シャーッ

サキエ アタマオ シャッ シャッ シャッ シャート
先に 頭を シャッ シャッ シャッ シャーと

コー (C {笑}) パント コー
こう (C {笑}) パンと こう

242B : ソレガー キズカ[°] アッテノー (A ン)
それが 傷が あってね (A うん)

ソノ キズオ キラニヤ イカザッタキ
その 傷を 切らないと いけなかったから

高知 31-3

ナカナカ スット イカータゼヨ アレモ。
なかなか すっと[は] いかなかったよ あれも。

243A : パント コー ヒザエ タタイチョイテ
パンと こう 膝へ 叩いておいて

カスオ シャツ シャツ シャー
[削り]かすを シャツ シャツ シャー

パント コーヤッテ
パンと こうやって

ソリヤー ジョーズナ ヒトカ° オッタネー (B シー)
それは 上手な 人が いたね (B うん)

アレ ヤルニヤー。 (B ジョーズナ ヒトガ オッタ)
あれ[を] やるには。 (B 上手な 人が いた)

ケーシコ ケーシコ (C {笑})
ケシコ ケシコ (C {笑})

ブーラブラ ネブリモーテ ケーシコ
ブラブラ 眠りながら ケシコ

キズモ キランドウドウ {笑} ヤッタ。
傷も 切らないで {笑} やった。

コーンド トウケテ ダイタ トキニヤ
今度 つけて 出した 時には

高知 31-4

ヤリナオサニヤ イカンナッテ ホラ。{笑}

やり直さないと いけなくなって ほら。{笑}

244B：ソリヤー ヘコ[°]ーナ モンヨ ヨナ キズンダラケデ ホラ。

それは 粗悪な ものよ // 傷だらけで ほら。

245A：ソーヨ。(B ンー) ソンデ ソレニ キズモ アルケニ

そうよ。(B うん) それで それに 傷も あるから

キズオ キッテ ノケテ ホラ。(B ンー)

傷を 切って 除いて ほら。(B うん)

マー トニカク キヨーニ ジョーズニ

まあ とにかく 器用に 上手に

ソノー シータノー ソノー ミーマデ

その 下の その 身まで

タカンデー ソノ ケシコ ケシコ ケシ ヘズッタラ

実に その ケシコ ケシコ ケシ 削ったら

ヒカリト ユー モンガ ナイケ

光と いう ものが ないから

246B：ンー アンマリ (A サーッサ サット) ノケスギタラ

うん あまり (A サーッサ サット) 除き過ぎたら

イカータキノー。

いけなかったからね。

高知 31-5

247A : ソー ソ。 ウワカーオ サーッサ サッサ ヘグッテネ。
そう そう。 上皮を サーッサ サッサ 削ってね。

ソノ ホーチョノ ツカイカタニ ヨッテネー マー
その 包丁の 使い方に よってね まあ

ソレカ° ニンゲンノ キヨーサヨ ホラ。
それが 人間の 器用さよ ほら。

サッサ ヤッテ
サッサ[と] やって

ソノ ココエ アノー ナニオ ツケチョッテネ
その ここへ あの 何を つけておいてね

248B : ツマヅケオ ツケテー。 エエ ン {笑}
つまづけを つけて。 ええ うん {笑}

249A : ツマヅケ ト ユー モノオ ツケテ。
つまづけ と いう ものを つけて。

スット ***ナ イカン。
すっと ***ないと いけない。

トゥマドゥケエ ツケルヨリ タット ホーツチョイデ
つまづけへ つけるより 素早く 放っておいて

シャツ シャツ シャツ シャット コー ヤッテ (B ソー)
シャツ シャツ シャツ シャツと こう やって (B そう)

高知 31-6

(C {笑}) マー ジョーズニ スル ヒトガ オッタカ°ネー。

(C {笑}) まあ 上手に する 人が いたね。

(B ソーヨ) ソーニ ヘグッテコソ。

(B そうよ) そのように 削ってこそ。

ソレカラ ソレオ コンド アノー

それから それを 今度 あの

ヘングリンダチオ ミヅエ トウケテ ヒートイ トウケテ

削りたてを 水に つけて 1日 つけて

アサ ツケタラ アノー バンニ パン パン

朝 つけたら あの 晩に パン パン

コー カーデ カ タバ カヤイチョイテ ホラ。

こう 川で × 束[を] かえしておいて ほら。

250B : ソレカラ ホシテー

それから 乾して

251A : ソレカラ ア アクルヒ ホイテ コールホンド ヨカッタ

それから × 明るる日 乾して 凍るほど よかった

ソレカ° コールホンド。

それが 凍るほど。

252B : ソーニカーランノー。

そうらしいね。

高知 31-7/32-1

253A : コーッタラネー ソノ カミソ ト ユー モンカ°
凍ったらね その 紙麻 と いう ものが

ヤワラコー ナラーネ。
柔らかく なるよね。

コーラザッタラ キソンボーシ ナッテ カターイキネ。
凍らなかつたら きそん棒に なって 固いからね。

ホンデ ソンデ シアゲニワ ヒガンマデニ
それで それで 仕上げには 彼岸までに

コール ウチニ シアケ°ナ イカザット。 (B ンー)
凍る うちに 仕上げないと いけなかつたよ。 (B うん)

ホンデ ソー ヤッテネ コンド シアケ°ノ トキニヤ
それで そう やってね 今度 仕上げの 時には

31↑32

ソノ コーッタ モノオ チャッチャ チャッチャ スンゴイテ
その 凍った ものを チャッチャ チャッチャ しごいて

トゥント ナルヨーニ ホラ キレーニ ヤットーネー。
ツンと なるように ほら きれいに やったよね。

254B : ソーヨ アレモ サンベンバー サライチューログ
そうよ あれも 3度くらい 晒しているだろうが

カーエ ツケテノー。
川に つけてね。

高知 32-2

255A : ソー ソ サンベン サライタネ。(B ソー)
そう そう 3度 晒したね。(B うん)

イチバン サライテ ホイテ ソレカラ マタ ニ ニドー サライテ
1回 晒して 乾して それから また × 2度 晒して

コンド タタキ ト ユーテ アノ サナー[56] コシラエテ
今度 たたき と いって あの すのこを 作って

ミンドゥオ チライテ タタキエ ナラベテ
水を 散らして たたきへ 並べて

サラス ホーモ アッタデー。(B アー ソーカヨ)
晒す 方法も あったよ。(B ああ そうか)

エー (B フーン?) ソーユー サラス ホーモ アッタ
ええ (B ふうん) そういう 晒す 方法も あった

タタキ ト ユーテネ。(B ソー)
たたき と いってね。(B うん)

キオ コノ アノ ボーノ ウエエ コノ イタオ オイテネ
木を この あの 棒の 上へ この 板を 置いてね

ソレオ ウエカラ ミタテテ タンタン
それを 上から 見定めて タンタン

ソレ チリミヅニヨッテ サライタ。
それ[を] 散水によって 晒した。

256B : アー ミヅンデ チライテ
ああ 水で 散らして

257A : ソノ ヒーカ° アタラニャ サレナネ。 (B ンー)
その 日が 当たらないと 晒せないわね。(B うん)

ソレカ° イチバン ヨー サレタネ。(B フーン?)
それが いちばん よく 晒せたね。(B ふうん)

ヒロケ° タケニャ ゼンブ。
広げたからね 全部。

カワワ ミンナー アラ ククッタケンドネ。
川[で]は みんな あれは くくったけれどね。

258B : ンー (A ン) イヤー カーデモー
うん (A うん) いや 川でも

(A モトククリ ウラククリ シテ ホラ)
(A 本[を]くくり 末[を]くくり して ほら)

ワシラー クノ ヘンチャ チョット アノー (A ンー)
私たちの ところの あたりでは ちょっと あの (A うん)

ヒロゲテ ホイタゼヨ。
広げて 乾したよ。

259A : ソー ソー。
そう そう。

260 B : ヌルマ [57] コシラエチヨイテノー

「ヌルマ」[を] 作っておいてね

(A ンー) ソレー ズーット ヒロゲテ オイチヨイテ

(A うん) それへ ずうっと 広げて 置いておいて

ソレカラ カーラ イテー ソットー ヒ ヒコヅリアゲター

それから 川原[へ] 行って そっと × 引きずり上げて

カーラデ ホラ (A ン) ホイテ。

川原で ほら (A うん) 乾して。

261 A : オマサン クニワ マコト カーラガ アルケニ。

おまえさんの ところには ほんとうに 川原が あるから。

262 B : ンー シタノ カー イタキ ホラ。

うん 下の 川[へ] 行ったから ほら。

263 A : マコト ソー。 ワタシラー クノ ヘンワ

ほんとうに そう。 私たちの ところの あたりは

タニアインデ サライタケンネ (B アー ソーカ)

谷間で 晒したからね (B ああ そうか)

ソンデ カーカ° タラザッタケンネ (B ンー)

それで 川が 足りなかったからね (B うん)

モー サン サンベンメノ シアゲト ユー トキニヤ

もう ×× 3度目の 仕上げと いう 時には

タタキト ユー モンデネ ソーユーニ シテ
たたきと いう ものでね そういう[ふう]に して

264 B : アー タタカイタカ。
ああ 叩いたか。

265 A : タタカイテネ (B フーン?)
叩いてね (B ふうん)

ソンド ソレソデ マッシロニ サレラーネ。
××× それで 真っ白に 晒せるよね。

266 B : ソレワ キレーナゼ (A ンー キレーナ)
それは きれいだよ (A うん きれいだ)

アリャ マッコトー リグッタラ。
あれは ほんとうに 念を入れたら。

267 A : ソレオネー (B ンー {咳払い})
それをね (B うん {咳払い})

コンダ アノ コーラセニャ イカナ。
今度は あの 凍らせないと いけないよ。

タエ ズーット キレイニ ホイテネ。(B エー)
田へ ずうっと きれいに 乾してね。(B ええ)

ンー ホント ホイテ ホイテ
うん ほんとう 乾して 乾して

コー アノ ヒアカ°ラン ウチニーテ コー (B キレーニ)
 こう あの 干上がらない うちにつて こう (B きれいに)

キレーニ トウント ナラーネ。
 きれいに ツンと なるよね。

268B : カタマラン ウチニ スコ°イテ (A ン) ホラ。シー
 固まらない うちに しごいて (A うん) ほら。 うん

269A : ソ ヤッテネー
 そう やってね

ソリヤー マー ソノ トーキュー ト ユー モノワ
 それは まあ その 等級 と いう ものは

マ ドーユーカ°カ° イットー°チャッタカ シランケン
 まあ どういうのが 1等だったか 知らないけれど

ナニサマ ソノ ダイイチ ヘングリカタカ° イットーチャットネ。
 何より その 第一 削り方が 1等だったね。

ソレカ° ヨー ナカッタラネー (B ソーチャツロー)
 それが よく なかったらね (B そうだっただろう)

ヒカリカ° デザッタ (B シー) ソノ クサニ。
 光が 出なかった (B うん) その [梶の]皮に。

ソレ°デ イチバン エ エーノカ°
 それで いちばん × いいのが

高知 32-7

ソノ アノー カ アノ コーソ[58] ト ユー カチカ°
その あの × あの 楮 と いう 梶が

ソレカ° イチバン ヨカッタネ。(B ソー。 ソー ユーノー)
それが いちばん よかったね。(B そう。 そう いうね)

ソレカラ カナメ[59]。(B カナメヂャ)
それから 要楮。(B 要楮だ)

ソレカラ クロソ[60]ニ (B クロソヂャー) シ。
それから 黒麻に (B 黒麻だ) うん。

クロソヂャー ユーカ°カ° (B シー) アットーネー。
黒麻だ [と]というのが (B うん) あったよね。

ソノ クロソカ° センバン ソノー ヒカリカ° ナカッタ。
その 黒麻が はなはだしく その 光が なかった。

270B : アリャ ヒカリカ° ノーテ イカザッタ ト ユーヂャイカ。
あれは 光が なくて いけなかった と いうではないか。

(A ナカッタ)

(A なかった)

シー ソンデ ヤスカッタ ト ユータゼ アリャ。
うん それで 安かった と いったよ あれは。

271A : イー アノ オーケナ フトッテネー。(B シー)
ええ あの 大きな 太くなってね。(B うん)

クロソワ ソンデ マー アノ カヂガ
黒麻は それで まあ あの 梶が

32↑33

272B : フトル コター フトットー (A ンー) キカ°ー。

太くなる ことは 太くなつたよ (A うん) 木が。

273A : ソンデネ (B ンー)

それでね (B うん)

ユッサ ユッサ ユッサ ユッサ (B ソーヨ)

ユッサ ユッサ ユッサ ユッサ (B そうよ)

ユスッチョイテ パント ソノ キューニ (B {咳})

揺すっておいで パンと その 急に (B {咳})

キラナ イカザッタカ°ネー。

切らないと いけなかったがね。

ソー ヤッテ キラナ イカーツタ。

そう やって 切らないと いけなかった。

274B : ソレヨ。

それよ。

キル トキニー ナカナカ ヨーリョーガ アツタゼヨ アリヤ。

切る 時に なかなか 要領が あつたよ あれは。

275A : アリヤ フトッテー (B ンー)

あれは 太くなって (B うん)

カミ アノ カチノ シツカ° ヨー ナカッタ。
×× あの 梶の 質が よく なかった。

シー アリヤ オカシーモンチャ。
うん あれは おかしいものだ。

276B : ヨー ナカッタトー
よく なかったよ

アリヤ カチカ°ー ヨー ナイ ユーツタ。
あれは 梶が よく ない [と]言った。

277A : ホンデ ソノ コーソ ト ユーカ°カ°
それで その 楯 と いうのが

イチバン ヨカットーネー。
いちばん よかったよね。

278B : コーソガ イチバン ヨカッタニカーラン。
楯が いちばん よかったらしい。

279A : シー ッカラ (B シー)
うん [それ]から (B うん)

ヒノツケノ カンヂヤマチャッタラネー
日当たりのいい 梶山だったらね

アノー ホソーテモ ブカ° アツカッタワヨ
あの 細くても 分が 厚かったよ

280B : ソー ソー。(A ンー) ンー ブガ ツイタワ ホラ。
 そう そう。(A うん) うん 分が ついたよ ほら。

281A : ソー カン ブカ° アツーテネ。(B ンー)
 うん ×× 分が 厚くてね。(B うん)

ホンデ シタカ°ッテ シューカクカ° アル ワケヨ ホラ。
 それで 従って 収穫が ある わけよ ほら。

282B : ソーユー コトヨ。
 そういう ことよ。

283A : マタ フトラ ヌバザッタ コーソワネ。
 また ××× 伸びなかった 楮はね。

284B : ヌバザッタワヨ (A ンー) ワリアイ コーソワ。
 伸びなかったよ (A うん) わりあい 楮は。

285A : ソノー (B ンー) ソーノ ヤッパシ ブカ°ー アツーテ
 その (B うん) その やはり 分が 厚くて

ソンデ ヨカッタケンド ソノ クサカヅヂ[61]チャ ユーテ
 それで よかったけれど その 草梶だ [と]いって

ヤーリコイ (B ンー) ハド[62]ノ (B アリヤー)
 柔らかい (B うん) カラムシの (B あれは)

ハードノ カーワーホカチャー (B エー)
 カラムシの 皮[くらい]しか[ない] (B ええ)

高知 33-4

ウスイ ホラ アンナカ°ワ ヘンナカ°。
薄い ほら あんなのは 変なの。

286B : アリヤー ムシヨーニ ヨッタラ
あれは 蒸し方に よったら

ロクニ カー トレザッタゾ ホラ。
ろくに 皮[が] 取れなかったぞ ほら。

287A : ソー ソー {笑} ソーネ。(B シー)
そう そう {笑} そうね。(B うん)

ホンデ カナメンヂャ コーソソヂャ ト ユーカ°カ°
それで 要楮だ 楮だ と いうのが

マー イチバン ヨカッタ。
まあ いちばん よかった。

マー ソーユー スヂノ エーカ°カ°
まあ そういう 筋の いいのが

コレカ° イットーキューニ イトーネ
これが 1等級に いったよね。

288B : ソーユー コトヨ。
そういう ことよ。

289A : シ (B シー) ソーユーニ マー ワタシモ マー
うん (B うん) そういう[ふう]に、まあ 私も まあ

高知 33-5

イットーニ イッ イッ イタカ°ネ。 (B アー ソーカヨ)
1等に ×× ×× いったがね。 (B ああ そうか)

ヤッパシ ソノ コーソーデ クンカ° エーカ ソレカ
やはり その 楮で / / が いいか それか

290B : オマンラー エ エー カヂガ アツツロー。
おまえたちは × いい 梶が あっただろう。

291A : ヘグリカ ヘーグリカタガネー ヨー ナケリヤ。 (B ー)

×××× 削り方がね よく なければ。 (B うん)

アタシモ ドンネ ヘングリカタカ° ワリカッタケンド
私も 鈍[で]ね 削り方が 悪かったけれど

マー オバサンカ° ジョーズチャッタガネ。 (B ー)

まあ おばさんが 上手だったよ。 (B うん)

トニカク ホーチョノ ツカイカタガ
とにかく 包丁の 使い方が

シャツ シャツ シャー シャツ シャツ シャート
シャツ シャツ シャー シャツ シャツ シャーと

コー イタカ°ネ。
こう いったがね。

292B : ソレオ ヒロドッタキンノー
それを 両手を広げて長さを測ったからね

チャーチャ チャーチャー {笑}

チャーチャ チャーチャー {笑}

293A : アタシラ ケシコ ケシコ ケシコ ケシケシ シタラネー
私たち[は] ケシコ ケシコ ケシコ ケシケシ したらね

ヤッパシ ホーチョノ トウカイヨーンデネ (B シー)
やはり 包丁の 使い方だね (B うん)

ソノ コータクカ° ナイ ワケ (B ソーチャロ シー)
その 光沢が ない わけ (B そうだろう うん)

ヒカリカ° ホラ ナイワヨ。
光が ほら ないよ。

ホンデ ソレオ ミテ アリャ アー セナ イカン
それで それを 見て あれは ああ しないと いけない

アー セナ イカン ト オモーテ ヤッタ。
ああ しないと いけない と 思って やった。

ソレカラ ソノ ヒヨリカ° ワリー トキニネー
それから その 天気が 悪い 時にね

イクツカモ ヒヨリカ° ワルイ トキニヤ
幾日も 天気が 悪い 時には

ホイチョイテ カエル ユータチ
乾しておいて 帰る [と]いったって

クサル ト ユー オソレカ° アッテネー
腐る と いう 恐れが あってね

ソレオ オケーネ タバニ シテ
それを 桶へね 束に して

オケエ キッチキチ キチキチ ツメコーンデネー。
桶へ キッチキチ キチキチ 詰め込んでね。

294B : フミコンデ。(A ンー)
踏み込んで。(A うん)

ソレカラ オモシオ シテノー ウエー。
それから 重しを してね 上へ。

295A : ソイツエネ オモシオ シテ ミドゥオ アテテネ (B ンー)
そいつへね 重しを して 水を 入れてね (B うん)

クサランヨーニ シタ タショー カラワ アッタケンドネ。
腐らないように した 多少 障りは あったけれどね。

296B : ソイデ クサランドノー。
それで 腐らないよね。

297A : ンー ソレデ クサラザットヨ。(B ンー クサラザッタ)
うん それで 腐らなかったよ。(B うん 腐らなかった)

ソーユーネ チョゾーホーカ° アッタ ワケ。
そういうね 貯蔵法が あった わけ。

ナマノ オリ[63]ヨ ホラ。(C ンー)

生の カラムシよ ほら。(C うん)

ソ ヤッテネー マー ホンデ ヒカ°ンマデニ

そう やってね まあ それで 彼岸までに

33↑34

シアケ°オ セニャー イットーキューニャ ナラザットーネ。

仕上げを しないと 1等級には ならなかったよね。

298B : ソーチャオ。

そうだろう。

299A : ンー。(B ンー) アノ コーラザッタキニ ホラ

うん。(B うん) あの 凍らなかったから ほら

キーソンボーナ カッタイ (B ソー ソー ン) ンー。

きそん棒な 固い (B そう そう うん) うん。

ケンド マー アノ コーッタ ト ユー モノワネ

けれど まあ あの 凍った と いう ものはね

アノ カン カミ カンヂガネ アノー マルコー ナランドウトウ

あの ×× ×× 梶がね あの 丸く ならないで

ヒラトーテオラーネ ホラ。

平たく[なっ]ているよね ほら。

マンマルコーニ ヒーテ コンナニ ナランドウトウ。(C ンー)

まん丸く 引いて こんなに ならないで。(C うん)

高知 34-2

ソラー アノ コーッタラネー トウトウキヨーテネ
それは あの 凍ったらね いじるのに[都合が]よくてね

コ ヤッテ マー ニカイバー ナニ シタネー
こう やって まあ 2回くらい 何[を] したね

(B フーン?) アノ スンゴイタ。(B ンー)

(B ふうん) あの しごいた。(B うん)

ソリヤーネ ソリャ オナコ°ノ シコ°トチャケン ホラ。
それはね それは 女の 仕事だから ほら。

(B ソー ソー) トニカク コリャ (B ンー)

(B そう そう) とにかく これは (B うん)

ウチノカ° トーカ° センバンヂャー
自分の家のが [梶の皮の]系統が よくないなんて

ユワンヨーニ ショート シタラ
言わないように しようと したら

トテモネー アノー オケエ トウケテ ヒサニ
とてもね あの 桶へ つけて 長い間

オイタリスルヨーナ コト シタラ イカンカ°チャッターヨ。
置いたりするような こと[を] したら いけないのだったよ。

300B : ソーヨ ドーシテモ ヘゴーニ ナルキノー
そうよ どうしても 粗悪に なるからね

高知 34-3

(A ソー ソー ソー) ソリヤー オイ オイタラ。

(A そう そう そう) それは ×× 置いたら。

301A : マー (B ンー) ミツマター ソノ リンチョー[64] ト
まあ (B うん) ミツマタ その ミツマタ と

ユーカ°ワ コリヤー マー ショカッタケンド ホラ。

いうのは これは まあ しやすかったけれど ほら。

302B : ミツマター (A ンー) マット ショカッタガ。
ミツマタ[は] (A うん) もっと しやすかったが。

303A : ソー ソ (B ンー) アラーネ オトコラーカー
そう そう (B うん) あれはね 男たちが

ナニヨ ワタシ クノ オヤヂサンノ

何よ 私の ところの お父さんの

エライー サカリニャ オーツケナ シトーンオケ[65]

たいへんな 盛りには 大きな 四斗桶[へ]

バンニ ヨーヨー ニノーテイタ モノオ キッチリ

晩に やっと 担いでいった ものを 隙間なく

トウメコンヂョイテ ヒトバンノ ウチニ アノ コキ[66]ンデ

詰め込んでおいて 一晚の うちに あの コキで

チャッチャ チャッチャ コイトーヨ ホラ。

チャッチャ チャッチャ こいたよ ほら。

高知 34-4

パン パン パン パン

パン パン パン パン

304B : ソレヨ アラ コカニヤ イカン。

それよ あれは こかないと いけない。

ソレカラ アレオ ハグ トキガ オモシロカッタチャイカ。

それから あれを 剥ぐ 時が おもしろかったではないか。

305A : シー アレ ハク°カ° オモシロカッタ

うん あれ[は] 剥ぐの[が] おもしろかった

フターリデ

二人で

306B : シー ハギカケ シチョイテアー ククッテアー スッポリ

うん 剥ぎかけ しておいて くくって すっぱり

ハギカケ シチョイチャー ククッテ (A ン)

剥ぎかけ しておいては くくって (A うん)

スッポリ シチョッテカラー

すっぱり しておいてから

フターリシテアー ホイショアー ホイショ ユーテ

二人して ホイショアー ホイショ [と]言って

ヒッパッタチャイカ。

引っぱったではないか。

高知 34-5

307A : シ ソー ソー (B {笑} シー) ソラー アノ
うん そう そう (B {笑} うん) それは あの

オモシロカッタガ マー カンチオー ツツキハンダッタラ
おもしろかったが まあ 梶を いじり始めたら

リンチョー ハンギトー ナイ。
ミツマタ[は] 剥ぎたく ない。

カンチオ ケスリ アノー アノ ケスリヨッタラ
梶を 削り ××× あの 削っていたら

リンチョーワ トウトウキトー ナイ。
ミツマタは いじりたく ない。

ミヨーナ モンチャッタ。
変な ものだった。

マー コンダ リンチョーニ ナッタラ
まあ 今度は ミツマタに なったら

カンチワ トウトウキトー ナイ ト ユーヨナ
梶は いじりたく ない と いうような

オモイガ シタガ。(B シー)
思いが したが。(B うん)

マ カンチワ ヘングル。
まあ 梶は 剥ぐ。

高知 34-6

アノー リンチョーワ コラ ショイ モノヨ。
あの ミツマタは これは しやすい ものよ。

308B：リンチョーワ ショイワ。
ミツマタは しやすいよ。

309A：オモワ ハイデ (B アー アー) クレチャウケンネ
だいたい 剥いで (B ああ ああ) くらっているからね

(B ンー) キズオ ノケテ ホラ。(B ンー)
(B うん) 傷を 除いて ほら。(B うん)

ソノ マダ マタガ イッパイ アルキ
その まだ 股が いっぱい あるから

ソノ マタノ クー コー ノケタラ ホラ。
その 股の ところ[を] こう 除いたら ほら。

310B：マタノ クオ (A ンー)
股の ところを (A うん)

チョイチョイト ナオイチャッタラ ソレデ ヨカッタ。
ちょいちょいと 直してやったら それで よかった。

311A：ンデ アレワネー ミヅエモ ニカイ トウケタラ
それで あれはね 水へも 2回 つけたら

ジョートーチャッタ。(B アー ソーカ)
上等だった。(B ああ そうか)

ン アレモネー (B ンー)

うん あれもね (B うん)

ジギオ ヌイテ ホラ モー イッペン ツケタラ

時期を 選んで ほら もう 1度 つけたら

モー ソレンデ アレワ シアカ°リ (B ソーヨ ンー)

もう それで あれは 仕上がり (B そうよ うん)

ンー シアカ°リチャツカ°ネ。

うん 仕上がりだったがね。

312C : ソノ リンチョーノ バワイワ ヘグランツツ

その ミツマタの 場合は 削らないで

コキ ユータラ ドーユー

コキ [と]いったら どういう

313A : コキ ユータラネ アノ

コキ [と]いったらね あの

314B : カネノー (A ン) カネオ フタツ ハイテー

金属の (A うん) 金属を 二つ つけて

34↑35

ソノー カネト カネト°デ ハーサンデ (A ン)

その 金属と 金属とで 挟んで (A うん)

ソレカラ ヒンダリノ テ マー ギッチョワ シランゾヨ

それから 左の 手[で] まあ 左ききの人は 知らないよ

高知 35-2

ソリャ (A・C {笑}) ギッチョワ シランケン
それは (A・C {笑}) 左ききの方は 知らないけれど

ホラー マ フツノ {笑} ヒトンチャッタ
ほら まあ 普通の {笑} 人だったら

ヒダリテンデ オサエチョッター
左手で 押さえておいて

ソノ モトオ シューツ ヒツパラー。
その もとを シュッと 引っばるよ。

315A : シー。 マー コーユー モノワー ソ カ
うん。 まあ こういう ものは × ×

コーユー モンカ° (B シ)
こういう ものが (B うん)

コーユーニ ナリヨットヨ。
こういう[ふう]に なっていたわよ。

316B : ハサム モンカ° アッテ
挟む ものが あって

317A : コレオ テツデネ アノー カヂヤサンニ ヤイテ モローテ
これを 鉄でね あの 鍛冶屋さんに 焼いて もらって

コーユー モンカ° アッテ
こういう ものが あって

高知 35-3

コレエ ツット コー ハサムノカ°ヨ。

これへ さっと こう 挟むのがね。

ホラ コレエ ホンデ ハ

ほら これへ それで ×

318B：モトオ チュット サキエ ヤッチョイテノー

もとゝを さっと 先へ やっておいてね

ソレカラ (A ソレカラ コノ)

それから (A それから この)

クルリット ヒックリカエイテ (A ンー)

くるりと ひっくり返して (A うん)

コンド ウラオー ムコーエ ヤッチョイテ

今度 裏を 向こうへ やっておいて

319A：ウラオー モッチョッテ シャット コー ヒッパッテ ホラ。

裏を 持っておいて シャット こう 引っぱって ほら。

320B：ヒッパラー ンー。

引っぱるよ うん。

321A：モト オシチョイテ コンド モト オサエチョッテ

もと[を] 押しておいて 今度 もと[を] 押さえておいて

パント カエシテ コンド ウラオ シャーット コー

パンと 裏返して 今度 裏を シャット こう

ヒッパツラナ イカザット。 シー。

引っぱらないと いけなかったわ。 うん。

ソー ソー ヤッタラ モー ノイテ シモーチョルケン。

そう そう やったら もう 取れて しまっているから。

322B : ノイテ シモーチョッタキンノー キレーニ。

取れて しまっていたからね きれいに。

ソレカラ ソノ

それから その

323A : ホンデ ヘングル ヒトワー キズオ ノケテ

それで 剥ぐ 人は 傷を 除いて

ソノ サキニ マータカ° イッパイ ソノ マータノ コノ コーノ

その 先に 股が いっぱい その 股の ×× この

コーユー クオ ノケタラ ソレデ ヨカッタ。

こういう ところを 除いたら それで よかった。

324B : マータノ モトカ° マー ナニヤロ ミタイニ (A ソー ソー)

股の もとが まあ 何やら みたいに (A そう そう)

ヨコ°レチョッタワ ホラ。 (A {笑})

汚れていたわ ほら。 (A {笑})

シー ホンデー (A ソコカ°ネ)

うん それで (A そこがね)

高知 35-5

ソコカ° アラー ホ ユト チョイト。
そこが あるよ そう いうと ちょっと。

325A：ヒッパッタチ ノカンロー。 (B ンー)
引っぱったって 取れないだろう。(B うん)

ホンデ ソーユー コト。
それで そういう こと。

カチワー ソリャ コーソーワ ヘングルニャー
梶は それは 楮は 剥ぐには

ソラー ナカナカ ナンドネ ホーチョノ ツカイカタヨ。
それは なかなか 何だね 包丁の 使い方よ。

シャッシャ シャッシャ
シャッシャ シャッシャ

326B：アレモ ムツカシーゼヨ。
あれも 難しいよ。

チックト ホーチョガ ネータラー (A ン)
少し 包丁が 寝たら (A うん)

クサオ カンヂオ チャット キルキ ホラ
[梶]皮を 梶を チャット 切るから ほら

(A ソー ソー キル)
(A そう そう 切る)

高知 35-6

ナカナカ ヨーリョーカ° アッタワヨ アリヤ。
なかなか 要領が あったよ あれは。

327 A : マーネ ヨーリョーカ° アル。(B ーン)
まあね 要領が ある。(B うん)

ソレオ マー ヤッパシ ヤリソメテ キヨーナ ヒトワ
それを まあ やっぱり やり慣れていて 器用な 人は

ホントー シャツ シャツ シャー
ほんとう[に] シャツ シャツ シャー[と]

オモシロイバー コー イタカ°ネー。
おもしろいほど こう いったがね。

マー ジョーズニ キルオ キル。
まあ 上手に 切る[こと]を する。

ナンチャネー ナカナカ アノ シゴ°トオ オモイダイテ ミリヤー
何だね なかなか あの 仕事を 思い出して みれば

ナトゥカシュモ アルゼヨ。
懐かしくも あるよ。

328 B : ソーチャノー。
そうだね。

35↑

高知県高知市1977注記

〔1〕 タカンデ

程度のはなはだしい時に用いられる副詞。非常に。実に。まったく。

なお、ここでは、ダ行、ガ行の前鼻音は、「ン」のように示している。

〔2〕 カタキ°ダイタ

「カタグ」は、共通語の「かつぐ」より意味領域が狭い。一人の人間が物を肩で支え持つ場合に用いられる。

なお、ダ行、ガ行の前鼻音は、明瞭な場合、ほとんど聞こえない場合、また、鼻濁音に聞こえる場合など、さまざまな状況が見られる。

〔3〕 チャ

「じ」・「ち」・「ず」・「づ」の四つの仮名、および、その仮名で表される音を四つ仮名という。古くは、「じ」と「ち」、「ず」と「づ」は、それぞれ異なる音で発音されていたが、室町末期以後はその区別に混乱が見られるようになり、17世紀末には現代の共通語と同じ音になった。高知方言は、この四つ仮名の区別が残存していることで有名である。ここでは、摩擦音の「じ」・「ず」は「ジ」・「ズ」で、破裂音の「ち」・「づ」は「ヂ」・「ヅ」で示している。

〔4〕 ナメカ°ワ

地名。高知県高知市行川。

〔5〕 コーブチ

地名。河淵。

〔6〕 コヤマ

地名。高知県土佐郡鏡村小山。

〔7〕 コビキ

木挽き。山林から切り出した木を材木に挽く職業の人。

〔8〕 カキヨッタ

「カク」は、二人で物を持ち運ぶ場合に用いられる。

〔9〕 ダレマワリ、ダレンマレ

ダレマーリ。ダレマレ。誰にでも。誰彼なしに。「誰もあれ」が語源だと

いう。

[10] コーシャ

技巧。工夫。物事に熟練していること。巧みなこと。

[11] カミヤガワ

地名。高知県吾北郡^{カミヤ カワカミブン}上八川上分、^{カミヤ カワシモブン}上八川下分。

[12] ニノーテ

「ニナウ」は、棒の両端に荷物をかけ、その棒を肩で支え持ち運ぶ場合に用いられる。

[13] ナカヤマ

地名。中山。

[14] ラチン

馬に荷をつけて運ぶこと。また、馬に荷をつけて運ぶ人。

[15] ウネサカ

ウネサコ。山の起伏。

[16] シャリキ

荷車。大八。大八車。大八車は、大きな二輪の荷車。江戸前期頃から主に関東地方で用いられた。また、大八車などで荷物を運ぶのを職業とする人。

[17] モッコー

もっこ。縄を網のように四角に編み、四隅に縄をつけ、石や土を入れて四隅をまとめるようにしてかついで運ぶ道具。

[18] ブゴー

夫講。夫役、労働課役のことと思われる。

[19] コー

講。貯蓄・融資などのための民間の金融上の組合。無尽講、頼母子講など。

[20] イシカケ

石垣。「イシガケ」のように連濁しない。

[21] タノモシゴー

頼母子講。互いに掛金を出し、お金を融通しあう組織。組合員が一定の期日に一定額の掛金をし、くじや入札によって所定の金額の融通を受け、それが組合員全員にいき渡るまで行う。頼母子。無尽講。無尽。

[22] イー

結。農作業や屋根葺きなどを互いに手伝いあつてすること。

[23] カンヂクサ

コウゾの皮。

[24] ゲンノー

頭の両端にとがりのない大きな金づち。大工や石工がのみを叩いたり、石を割るときなどに用いる。

[25] ズイキ

サトイモ類の茎を干したもの。

[26] ノナカケンザン

人名。野中兼山。江戸初期の儒学者。播磨国、姫路生まれ。土佐藩家老の養子となり、約30年間藩政の中心として、新田開発のための用水路建設、国産品の専売制などの政策・事業を強力に展開した。その施策は過重な夫役・課税となったため領民の恨みをかい、また、藩内の重臣の間にも独裁的な政治に対する反発が強まり、引退した。

[27] ヒロオカ

地名。高知県吾川郡春野町弘岡上、弘岡中、弘岡下。

弘岡は、仁淀川に沿った部分にわずかな水田があったが、常に水害に見舞われた。野中兼山は、弘岡井筋の構築工事を行って、この土地を仁淀川水害から救い、肥沃な土地とした。5年の歳月をかけた難工事の末、土佐藩最大の用水路となり、新田も生まれた。また、城下への物資輸送用の運河としても用いられ、商品流通経済の発展にもなった。

[28] イモジ

サトイモの茎を干したもの。芋幹。イモガラ。芋茎。ズイキ。

[29] キャハン

脚絆。脚半。旅行や作業の時にすねにつけ、足を保護して動きやすくするもの。

[30] ジュバン

襦絆。襦絆。この場合、仕事着だと思われる。

[31] ハタ

幡多。高知県西部地域。

[32] ニヨ ドガワ

仁淀川。高知県中西部を西から東・南東方向に流れて土佐湾に注ぐ、高知県第二の河川。

[33] エー ヤワラン

「エー ～打消の助動詞ン」で不可能を表す。～することができない。

[34] ヤワラン

「ヤワリ」は、石にあけた穴に、鉄の楔を差し込んで、げんのうで打って、石を割る方法。矢割。

[35] コネテ

「コネル」は、棒をてこのように使って重いものを動かす。

[36] ニノデ カクレター イタガサデ カクレタ

みの笠やすげ笠で隠れてしまうほど、狭い田のこと。

[37] マタングワ

股鋏。先が3本に分かれている鋏。

[38] イッタン

反（タン）は、田畑・山林の面積の単位。1反は10畝。

[39] ゴセン

畝（セ）は、田畑・山林の面積の単位。1畝は1反の10分の1。約1アール。

[40] ゼンドウキ

地づき。地固め作業。土台の地面をならして、つき固めること。

[41] ヨー ウタワン

「ヨー ～打消の助動詞ン」で不可能を表す。～することができない。

[42] テンボースッポー

テンボースンポー。テンボサンポ。危険を冒してやってみる様子。いちかばちか。

[43] デーンマ, ゼンマ

おじいさん。祖父。

[44] バンマ

おばあさん。祖母。

[45] ソコネリ

水がもれないように、田の土台を固めること。

[46] バンネリ

水をためた田を、もう一度耕すこと。

[47] クワノ ミミ

桑の虫。蚕。

[48] ヤブダ

山間にある田。

[49] カヂ

植物名。楮（コウゾ）。カゾ。クワ科の落葉低木。山地に自生し、また、各地で栽培する。葉はクワに似て大きく、春、薄い黄緑色の花を開く。6月頃、キイチゴに似た実が赤く熟す。雌雄同株。木の皮の繊維を和紙の原料とする。コウゾは、紙麻（カミソ）の音便。

[50] カミソ

植物名。紙麻（カミソ）。梶（カジ）。カジの皮。

[51] カンデガーラ

梶殻。コウゾの皮を剥いだあとの木質部。

[52] トウケアゲ

つけ上げ。コウゾの皮を晒す作業。コウゾの皮を川などにつけて上げる。

[53] ミツマタ

植物名。三桠（ミツマタ）。三叉（ミツマタ）。ジンチョウゲ科の落葉低木。葉は披針形。冬の間中、各枝先に筒状の白いつぼみを密に下垂してつけたまま過ごし、早春、黄色の頭状花を開く。枝は3本ずつに分かれる。古く中国から渡来、樹皮の繊維は強く良質である。和紙の原料にするため栽培。和紙は良質で虫害を受けにくく、紙幣や証券用紙に使われる。

[54] フルジンチ

古い新地。新地は、新開地、または、新開地にできた遊郭。

[56] サナー

すのこ。竹を組んで作った敷物。

[57] ヌルマ

流れが緩やかな仕切られた所。

[58] コーソ

植物名。楮（コウゾ）。

[59] カナメ

植物名。要楮。

[60] クロソ

植物名。黒麻。楮（コウゾ）。

[61] クサカンヂ

草棍。

[62] ハド

植物名。苧（カラムシ）。イラクサ科の多年草。原野に自生し、また、畑で栽培もする。高さ1 m以上に達する。葉は広卵形で、下面に白綿毛を密生する。7、8月頃、葉腋に円錐花序をつけて、黄白色の小花を多数密生する。茎の繊維を織物などに用いる。苧麻（チョマ）。マオ。

[63] オリ

植物名。苧（カラムシ）。

[64] リンチョー

植物名。三桮（ミツマタ）。または、ミツマタを原料とする紙。

[65] シトーンオケ

四斗桶。四斗樽。4斗入りの樽。1斗は10升、約18リットル。

[66] コキ

ミツマタの皮をこく道具。

作成・公開の経緯

「各地方言収集緊急調査」について

昭和52(1977)年度から昭和60(1985)年度にかけて、文化庁によって「各地方言収集緊急調査」が実施された。これは、「全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、これを記録・保存する」目的で行われた、全国規模での方言談話の収録事業である。国立国語研究所は、文化庁の要請により、この調査の計画段階から、指導・助言などにかかわっていた。

文化庁は、全国の都道府県教育委員会に各地方言の収集を指示した。47都道府県は、実施時期ごとに、第1次(昭和52(1977)～54(1979)年度)から第7次(昭和58(1983)～60(1985)年度)に分けられ、それぞれ3年計画で、収録を行った。

各都道府県教育委員会は、言語学、国語学、方言学の専門家から調査員として、主任調査員2名と調査員若干名を選出し、さらに、専門家や学識経験者を交えて、調査地点、具体的な調査方法、全国共通の場面設定会話項目などについて検討し、その結果をもとに調査を進めた。

その実施の概要は次のようなものである。

(1) 調査目的

全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、記録・保存する。自然な方言会話を良質な録音で採録し、後世に残す。

(2) 調査方法

(3)の調査内容にしたがって、1地点につき1年度あたり10時間程度の方言会話を良質な録音で採録する。そのうち、自然な方言会話の部分を3時間程度選んで、文字化を行い、共通語訳をつけて、記録として残す。

(3) 調査内容

- ①老年層の男女各1人による対話、または、男女を含む3人の会話(2時間)
- ②老年層の男性1人の対話、または、老年層の男性3人の会話(1時間)

③老年層の女性2人の対話、または、老年層の女性3人の会話（1時間）

④老年層と若年層との対話、または、両者を含む3人の会話（1時間）

⑤老年層の男性2人の、目上の者と目下の者の対話（2時間）

⑥場面設定の対話（1時間、各場面につき1～3分程度）

場面に応じて、老年層の男性2人の対話、または、老年層の男女各1人による対話

⑦当該地域に伝わる民話（1時間）

民話の語り手が存在する地点で収録を行う。収録不可能な場合は、

⑧老年層の女性2人の、目上の者と目下の者の会話（1時間）

または、

⑨目上の老年層の男性と目下の老年層の女性の、2人の対話（1時間）

を収録する。

①～⑤、⑧、⑨については、話題は自由。一般的には、「調査地の現況・変遷」「気候」「天災などの思い出」「こどもの頃の遊び」「仕事」「土地の生業」「出稼ぎ」「家事」「こどもの養育」「生活の変遷」「生活の中の楽しみ」「自慢話」「衣」「食」「住」「婚礼などの風俗」「信仰」「年中行事」「村の将来」「若者観」など。

⑥は、自然談話では得にくい各種の表現を得ることを目的として、特定場面を設定し、話者に「演技的対話」をさせる。「訪問」「辞去」「道でのあいさつ」「出産」「婚礼」「葬式」などの各種のあいさつ、「依頼」「指示」「助言」「買物」「勧誘」などの各種場面を設定する。具体的には、文化庁と各都道府県教育委員会が協議して、全国共通の数場面を設定する。

(4) 調査地点

調査地点は、各都道府県について5地点程度を選定する。文化庁および地元方言研究者の意見を聞いて、各都道府県教育委員会が決定する。

方言区画上、複数の区域に分かれる場合は、方言の状況が概観できるように、それぞれの区域から収録地点を選ぶ。特に、離島など、特色の認められる方言は可能な限り収録する。

(5) 話者

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、よそ

の土地に住んだことがあっても、その期間が短い人とする。在外期間は3年以内が望ましい。

年齢は、原則として、老年層の場合は、収録時において60歳以上とし、若年層の場合は、20～30歳代とする。

話者相互の立場はほぼ対等であることを原則とする。

(6) 録音

自然な会話を良質な録音で残すため、使用する録音機の性能、マイクの種類・配置、テープの長さ、収録場所の音環境などに注意する。

録音テープ記録票には、採録地点、採録年月日、話題、時間、話者、採録機種などを記入する。

録音テープは、収録したオリジナルのテープ（正）を1本、正テープより文字化部分を編集したテープ（副）を2本作成する。

(7) 文字化

方言音声の文字化の際の表記は、原則として、カタカナ書きとし、方言の音声の特徴をある程度表し得るよう工夫する。文字化に対応する共通語訳をつける。文字化内容について、場面・文脈・特徴的音声・方言形の語義・用法などについての注記、表記法についての説明などを行う。各地点ごとに、収録地点の方言の特色について解説する。収録地点の位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・産業など、収録地点の概観について記述する。録音内容記録票には、話者の氏名・性・生年・経歴、録音内容などを記入する。

文字化原稿は、手書きのオリジナル原稿（正）を1部、正の複製（副）を2部作成する。

調査は、各都道府県教育委員会と連携のうえ、全国各地の方言研究者が全面的に協力して行われた。その結果、地域の密度、収録量、方言的内容のいずれの面からも、他に類を見ない高レベルのデータを得たのである。

調査終了後、これらの方言談話の録音テープとその文字化原稿は、各教育委員会から、「各地方言収集緊急調査」報告として、文化庁に提出され、永久保存されることとなった。

なお、調査実施からかなりの時間が経過しているため、当時の関係文書の入手は困難であったが、文化庁、各都道府県教育委員会の協力により、部分的には手に入れることができた。得られたものを、資料として、この章の末尾に掲げたので、ご参照いただきたい。

「各地方言収集緊急調査」地点一覧

北海道

- 01a 空知支庁樺戸郡新十津川町
- 01b 十勝支庁中川郡豊頃町
- 01c 渡島支庁亀田郡榎法華村
- 01d 渡島支庁松前郡松前町

青森県

- 02a 下北郡川内町
- 02b 北津軽郡市浦村
- 02c 上北郡野辺地町
- 02d 三戸郡五戸町
- 02e 弘前市

岩手県

- 03a 久慈市
- 03b 宮古市
- 03c 遠野市
- 03d 大船渡市
- 03e 一関市

宮城県

- 04a 本吉郡本吉町・歌津町
- 04b 栗原郡築館町
- 04c 仙台市
- 04d 亶理郡亶理町
- 04e 刈田郡七ヶ宿町

秋田県

- 05a 鹿角市
- 05b 能代市
- 05c 仙北郡西木村
- 05d 河辺郡雄和町
- 05e 湯沢市

山形県

- 06a 新庄市
- 06b 寒河江市
- 06c 東田川郡櫛引町
- 06d 東田川郡朝日村
- 06e 西置賜郡飯豊町・東置賜郡川西町

福島県

- 07a いわき市
- 07b 大沼郡会津高田町
- 07c 大沼郡昭和村

茨城県

- 08a 高萩市
- 08b 久慈郡里美村
- 08c 水戸市
- 08d 鹿島郡大野村（→鹿嶋市）
- 08e 古河市

栃木県

- 09a 大田原市
- 09b 日光市
- 09c 宇都宮市
- 09d 芳賀郡益子町
- 09e 安蘇郡田沼町

群馬県

- 10a 利根郡片品村
- 10b 吾妻郡六合村
- 10c 前橋市
- 10d 邑楽郡大泉町
- 10e 甘楽郡下仁田町

埼玉県

- 11a 加須市
- 11b 南埼玉郡宮代町
- 11c 春日部市
- 11d 児玉郡上里町
- 11e 秩父郡長瀬町
- 11f 入間郡大井町

千葉県

- 12a 海上郡飯岡町
- 12b 印旛郡印西町（→印西市）
- 12c 長生郡長生村
- 12d 木更津市
- 12e 館山市

東京都

- 13a 台東区
- 13b 西多摩郡檜原村
- 13c 大島町
- 13d 三宅村
- 13e 八丈町

神奈川県

- 14a 愛甲郡愛川町
- 14b 横須賀市
- 14c 秦野市
- 14d 小田原市

新潟県

- 15a 村上市
- 15b 西蒲原郡分水町
- 15c 十日町市
- 15d 糸魚川市
- 15e 佐渡郡佐和田町

富山県

- 16a 黒部市
- 16b 富山市
- 16c 氷見市
- 16d 砺波市
- 16e 東礪波郡上平村

石川県

- 17a 羽咋郡押水町
- 福井県
- 18a 坂井郡芦原町
 - 18b 勝山市
 - 18c 南条郡南条町
 - 18d 敦賀市
 - 18e 遠敷郡名田庄村

山梨県

- 19a 塩山市
- 19b 大月市
- 19c 韭崎市
- 19d 南巨摩郡早川町 [奈良田]
- 19e 南巨摩郡身延町

長野県

- 20a 下水内郡栄村
- 20b 長野市
- 20c 小諸市
- 20d 伊那市
- 20e 木曾郡開田村

岐阜県

- 21a 高山市
- 21b 大野郡白川村
- 21c 中津川市
- 21d 岐阜市
- 21e 揖斐郡徳山村

静岡県

- 22a 静岡市
- 22b 榛原郡本川根町
- 22c 磐田郡水窪町
- 22d 賀茂郡松崎町
- 22e 浜名郡新居町

愛知県

- 23a 北設楽郡設楽町
- 23b 西春日井郡師勝町
- 23c 岡崎市
- 23d 豊橋市
- 23e 常滑市

三重県

- 24a 安芸郡美里村
- 24b 阿山郡阿山町
- 24c 志摩郡阿児町
- 24d 北牟婁郡海山町
- 24e 南牟婁郡御浜町

滋賀県

- 25a 長浜市
- 25b 高島郡安曇川町
- 25c 神崎郡能登川町
- 25d 大津市
- 25e 甲賀郡甲賀町

京都府

- 26a 中郡峰山町
- 26b 舞鶴市
- 26c 船井郡丹波町
- 26d 京都市
- 26e 相楽郡山城町

大阪府

- 27a 高槻市
- 27b 大阪市
- 27c 八尾市
- 27d 河内長野市
- 27e 泉佐野市

兵庫県

- 28a 豊岡市
- 28b 朝来郡生野町
- 28c 神戸市
- 28d 相生市
- 28e 洲本市

奈良県

- 29a 大和郡山市
- 29b 宇陀郡榛原町
- 29c 五條市
- 29d 吉野郡下北山村
- 29e 吉野郡十津川村

和歌山県

- 30a 那賀郡岩出町・打田町・桃山町
- 30b 和歌山市
- 30c 御坊市
- 30d 田辺市
- 30e 新宮市

鳥取県

31a 鳥取市

31b 米子市

31c 日野郡日野町

島根県

32a 仁多郡仁多町

岡山県

33a 勝田郡勝央町

33b 新見市

33c 岡山市

33d 小田郡矢掛町

33e 笠岡市

広島県

34a 三次市

34b 府中市

34c 広島市

34d 因島市

34e 安芸郡倉橋町

山口県

35a 萩市

35b 大島郡大島町

35c 徳山市

35d 美祢市

35e 豊浦郡豊北町

徳島県

36a 鳴門市

36b 阿南市

36c 美馬郡脇町

36d 海部郡海南町

36e 三好郡東祖谷山村

香川県

37a 小豆郡土庄町

37b 木田郡三木町

37c 丸亀市

37d 仲多度郡多度津町

37e 観音寺市

愛媛県

38a 越智郡大三島町

38b 西条市

38c 松山市

38d 大洲市

38e 宇和島市

高知県

39a 室戸市

39b 高知市

39c 高岡郡檜原町

39d 幡多郡三原村

福岡県

40a 北九州市

40b 遠賀郡芦屋町

40c 築上郡新吉富村

40d 飯塚市

40e 嘉穂郡稲築町

40f 福岡市

40g 八女市

佐賀県

41a 東松浦郡鎮西町

41b 鳥栖市

41c 佐賀市

41d 武雄市

長崎県

42a 壱岐郡芦辺町

42b 平戸市

42c 長崎市

42d 南松浦郡奈良尾町

熊本県

43a 阿蘇郡阿蘇町

43b 熊本市

43c 球磨郡錦町

43d 天草郡天草町

大分県

44a 東国東郡国東町

44b 宇佐市

44c 大分郡挾間町

44d 佐伯市

44e 日田郡前津江村

宮崎県

45a 延岡市

45b 東臼杵郡椎葉村

45c 宮崎市

45d 北諸県郡山田町

45e 日南市

鹿児島県

46a 出水市

46b 揖宿郡穎娃町

46c 熊毛郡上屋久町

46d 大島郡龍郷町

沖縄県

47a 国頭郡今帰仁村

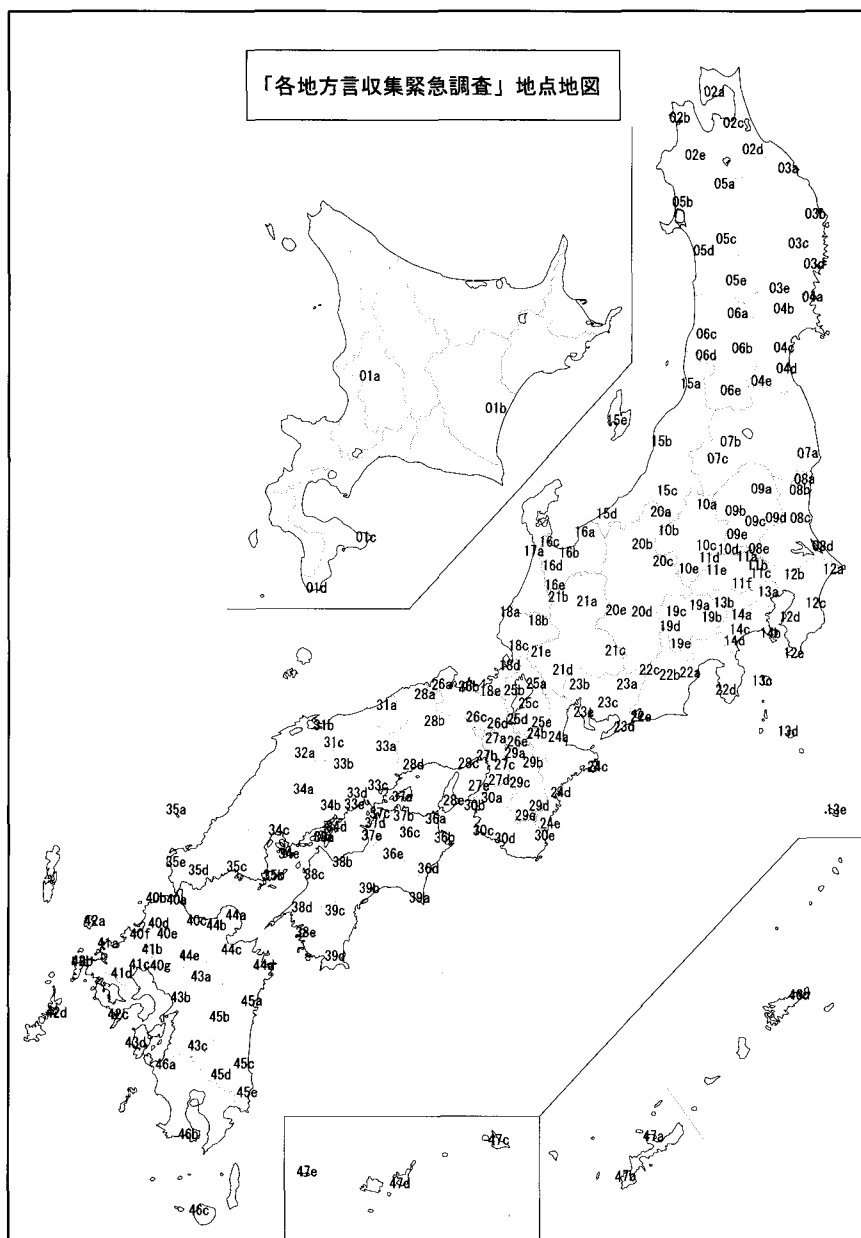
47b 那覇市

47c 平良市

47d 石垣市

47e 八重山郡与那国町

「各地方言収集緊急調査」地点地図



(2001. 10. 01作成)

各地方言収集緊急調査補助全体計画

56.7.29.

1. 年次計画

年度 計画	52	53	54	55	56	57	58	59	60	備考
第1次	8	8	8							
第2次		8	8	8						
第3次			6	6	6					
第4次				8	8	8				
第5次					10	10	10			
第6次						3	3	3		
第7次							4	4	4	
実施県数	8	16	22	22	24	21	17	7	4	
(千円) 予算額	6,000	12,210	18,150	18,150	18,000	15,750	12,750	5,250	3,000	

2. 調査県一覧

第1次 (S.52~54)	第2次 (S.53~55)	第3次 (S.54~56)	第4次 (S.55~57)	第5次 (S.56~58)	第6次 (S.57~59)	第7次 (S.58~60)
宮城	北海道	青森	岩手	福島	茨城	群馬
秋田	山梨	栃木	山形	埼玉	福井	神奈川
千葉	長野	東京	新潟	富山	鳥取	京都
石川	山口	岐阜	奈良	愛知		兵庫
大阪	香川	静岡	島根	三重		
広島	佐賀	岡山	福岡	滋賀		
高知	大分		長崎	和歌山		
鹿児島	沖縄		熊本	徳島		
				愛媛		
				宮崎		
8県	8県	6県	8県	10県	3県	4県

各地方言収集緊急調査費国庫補助要項

昭和54年 5 月 1 日
文化庁長官裁定
(昭和62年 6 月 1 日廃止)

1. 趣旨

全国的に急速に変化し、失われつつある各地の方言を各都道府県において、緊急に調査し、これを記録・保存するために要する経費について国が行う補助に関し、必要な事項を定めるものとする。

2. 補助事業者

補助事業者は、都道府県とする。

3. 補助対象事業

補助対象となる事業は、当該都道府県内における各地の方言を調査（録音採集・文字化）する事業とする。

4. 補助対象経費

補助対象となる経費は、次に掲げる経費とし、その明細は別紙のとおりとする。

主たる事業費

調査経費

5. 補助金の額

補助金の額は、補助対象経費の2分の1以内の定額とし、750千円を最高限度額とする。ただし、沖縄県については、別途協議して定めるものとする。

(別紙)

名称	対象経費の区分	項	目	目の細分	説明
各 地 方 言 収 集 緊 急 調 査 事 業	主 た る 事 業 費	調査経費	各地方言収集調査	報償費	〇〇謝金 〇〇文字化謝金 〇〇協力謝金 調査員、調査補助員等謝金
				旅費	資料 普通旅費 費用弁償 特別旅費
				需用費	消耗品費 印刷製本費 野帳等文具、録音用テープ 調査報告用紙 会議費 企画委員会打合会 郵便、電信電話料等
				役務費	通信運搬費
				使用料及び賃借料	会場借上料 器具借上料
				委託料	〇〇委託費 事業の一部を委託して実施する場合（特に認められた場合に限る）

各地方言収集緊急調査実施要領

昭和52年 7 月28日

文化庁次長 決裁

「各地方言収集緊急調査補助金」の運用に当たっては、文化庁文化財補助金交付規則及び各地方言収集緊急調査補助要項に定めるもののほか、この実施要領によるものとする。

1. 地点の選定

文化庁及び地元方言研究者の意見を聴いて各都道府県（以下「県」という。）教育委員会が選定するものとする。

方言区画的にいくつかの区域に分かれる県においては、県下の方言の状況が概観できるように、それぞれの区域から収録地点を公平に選ばなければならない。また、離島など、特色の認められる方言は、可能な限り収録するよう努めなければならない。

2. 録音内容・話者

ア 老年層話者による会話

収録内容——次の3種類の対話又は会話を収録する。

(1) 老年層の男女各1人による対話、又は、男女を含む3人の会話

(2) 老年層の男性2人の対話、又は、老年層の男性3人の会話

(3) 老年層の女性2人の対話、又は、老年層の女性3人の会話

話者の年齢など——原則として、収録時において60歳以上とし、やむを得ないときは55歳以上でもよい。発音その他の障害がなければ高齢者でも差し支えないが話者相互の年齢が離れすぎてはいけない。また、話者相互の立場等もほぼ対等であることを原則とする。

話者の居住歴——その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が短い（在外期間は3年以内が望ましい。）人とする。よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が求められないときは、近隣地域から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言のちがいが認められない場合は差し支えない。

司会者——主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が必要である。司会者は、あらかじめ地域・話者に見合った適切な話題を用意し、会話の円滑な進行に努める。司会者の性・年齢は問わない。

話題——自由。一般的には、「調査地の現況・変遷」「気候」「天災などの思い出」「子どものころの遊び」「仕事（土地の生業・出かせぎなど。）」「家事」「子どもの養育」「生活の変遷」「生活の中の楽しみ」「自慢話」「衣」「食」「住」「婚礼などの風俗」「信仰」「年中行事」「村の将来」「若者観」などが考えられる。

イ 老年層と若年層との会話

収録内容——老年層の男性と若年層の男性との対話、又は、両者を含む3人の話者の会話を収録する。

話者の年齢など——老年層については前項アに準ずる。若年層については、原則として

20～30歳代とする。話者相互の立場などはほぼ対等であることが望ましい。

話者の居住歴——老若ともアに準ずる。

ウ 目上の者と目下の者の会話

収録内容——目上、目下の関係にある老年層の男性2人による対話を収録する。対話の具体的な人物像として、たとえば、僧侶対その檀家に当たる人物、その土地出身の教員又は元教員（校長又は元校長等）対教え子又はその土地の一般的職業（農業、漁業等）に従事している人物（父兄）等が考えられる。

話者の年齢——目上、目下とも60歳以上を原則とする。

話者の居住歴——原則として前項アに準ずる。ただし、目上に当たる者については、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあるので、アの条件（在外歴3年以内）から若干逸脱してもやむを得ない。

エ 場面設定の会話

目的と方法——自然会話では得にくい各種の表現を得ることを目的として、特定場面を設定し、話者に「演技的対話」をさせる。

場面の内容——各種のあいさつ（訪問・辞去・道でのあいさつ・出産・婚礼・葬式）や依頼・指示・助言・買物・勧誘等の各種場面を設定する。具体的には、文化庁と各県教育委員会が協議して全国共通の数場面を設定し、各場面の録音量は、1～3分程度とする。

話者——場面に応じて老年層の男性どうしの対話、老年層の男性対同女性の対話等を行う。

オ 民話

民話の語り手が存在する地点で収録を行う。

3. 録音機・録音技術

必ず、ステレオで録音することとし、テープは、オープン、カセットのいずれでもよい。この調査は、自然な方言会話を良い録音で収録し、それを後世に残すことが主要な目的であるからその点について十分配慮しなければならない。

録音機の操作は、録音技術に習熟した者が行い、会話の進行中は収録に専念しなければならない。なお、良質の録音を得るための基本的な留意点は次のとおりである。

① 雑音の少ない静かな部屋で録音する。足音、とびらの開閉音、机などへの衝撃音（湯飲みを置く音など）、紙をめくる音などは意外に大きな雑音として録音されるので注意すること。

② 内蔵マイクを使用すると良質の録音が得られないので、必ず外部マイクを接続すること。外部マイクは録音機本体から30cm以上離して配置すること。

③ マイクはなるべく話者の近くに配置し、どの話者の音声も十分な音量で録音できるよう配慮する。話者によって声の大きさにかかなりの差があることが多いので、この点に注意してマイクを配置すべきである。

録音の際には、音量メーターの針が十分に振れるよう注意すること。

④ テープを入れ替える際の無録音状態を避けるため録音機は2台使用すること。

⑤ カセットテープは短いもの（往復90分もの又は60分もの）を使用すること。

4. 文字化原稿の作成・表記

文字化用紙は文化庁が定めた様式のものを使用すること。

表記は原則としてカタカナ書きとし、方言の音声的特徴をある程度表しうよう工夫する。ただし、文字化担当者が国際音声符号又は音素符号を用いた方が便利であると判断した場合はその表記でもよい。文字化の際には、共通語訳を付けるとともに場面、文脈、特徴的音声、方言形の語義・用法などについての注釈をも付ける。

5. 収録地点の概観、話者の経歴・録音内容の記録

収録地点の位置・交通、地勢・行政区画（旧藩領を含む）の変動・戸数・人口・主な産業などを記録する。

また、話者の経歴、録音内容などについては、「録音内容記録票」に録音のつど記入する。

各地方言収集緊急調査の実施について

54. 5. 10.

1. 調査（方言収録）の年次計画（（ ）は実施要領・文字化の時間数）

○ 第1年次

- ① 老年層の男女各1人による対話，又は，男女を含む3人の会話（アの(1)・2時間）
- ② 老年層の男性2人の対話，又は，老年層の男性3人の会話（アの(2)・1時間）

○ 第2年次

- ① 目上の者と目下の者の会話（ウ・2時間）
- ② 老年層の女性2人の対話，又は，老年層の女性3人の会話（アの(3)・1時間）

○ 第3年次

- ① 老年層と若年層との会話（イ・1時間）
- ② 場面設定の会話（エ・1時間）
- ③ 民話（オ・1時間）

（注）3年次の「③ 民話」の収録不能のときは，2年次の「目上の者と目下の者の会話」の女性2人の会話を収録

2. 調査報告書の提出部数

(1) 録音テープ

- ・正……収録した生のテープ 1部
- ・副……文字化部分のテープ（正テープより文字化部分を複製したもの。） 2部

(2) 文字化原稿

- ・正……手書き原稿 1部
- ・副……正のコピー 2部

3. 調査報告書の様式等

(1) 録音テープの記録票

○ ○ 県	NO. <u>正</u>	—○
	(副)	
各地方言収集緊急調査録音記録票		補助要項 の記号
1 採録地点	_____	
2 採録年月日	_____	
3 話題・時間	A面 _____ () 分	
	B面 _____ () 分	
4 話者	_____	

5 採録機種	_____	

テープの
ケース箱に
張り付ける
ようにして
ください。

(2) 文字化原稿の表紙

文字化原稿は、各調査地点ごとに、(1) 録音内容記録票、(2) 収録地点とその方言の特色等解説（初年次のみ）、(3) 録音文字化原稿の順で表紙（B 4 板目紙）を付けて綴ってください。

○	○
○○県（昭和 年度）	
各地方言収集緊急調査 文字化原稿	
（正） 又 は 副	
調査地点	○○○○

(3) 文字化原稿の用紙

- | | | |
|------------|---|----------|
| ① 録音内容記録票 | } | （別紙のとおり） |
| ② 方言資料割付用紙 | | |
| ③ 方言調査解説用紙 | | |

調査実施上の留意事項について

1 調査（方言収録）の年次計画

年次	調査の内容（記号は実施要領による）	採録時間	解説・文字化時間
1 年次	① 老年層の男女各 1 人による対話，又は，男女を含む 3 人の会話（ア－（1））	10	2
	② 老年層の男性 2 人の対話，又は，老年層の男性 3 人の会話（ア－（2））		1
2 年次	① 目上の者と目下の者の会話（男性 2 人）（ウ）	10	2
	② 老年層の女性 2 人の対話，又は，老年層の女性 3 人の会話（ア－（3））		1
3 年次	① 老年層と若年層との会話（イ）	10	1
	② 場面設定の会話（エ）		1
	③ 民話（オ）		1
	（民話が収録できないときは，（注）参照。))		
計		30	9

（注）

民話の適当な語り手が存在しない場合などのため，収録が不可能な地点は，老年層の男性（目上）と老年層の女性（目下）の 2 人の対話を収録する。その際の話題は自由であるが，長上者に対する女性の丁寧な表現が収録できるよう配慮していただきたい。

2 調査報告書の提出部数

(1) 録音テープ

正……収録した生のテープ 1 部

副……文字化部分のテープ（正テープより文字化部分を複製したもの。） 2 部

(2) 文字化原稿

正……手書き原稿 1 部

副……正のコピー 2 部

3 調査報告書の様式等

(1) 録音テープの記録票

○ ○ 県 各地方言収集緊急調査録音記録票	NO. 正 ー○ (副)	補助要項 の記号
1 採録地点 _____		
2 採録年月日 _____		
3 話題・時間 A面 _____ () 分		
B面 _____ () 分		
4 話者 _____		

5 採録機種 _____		

テープの
ケース箱に
張り付ける
ようにして
ください。

(2) 文字化原稿の表紙

文字化原稿は、各調査地点ごとに、(1) 録音内容記録票、(2) 収録地点とその方言の特色等解説（初年次のみ）、(3) 録音文字化原稿の順で表紙（B 4 板目紙）を付けて綴ってください。

○	○
○○県（昭和 年度） 各地方言収集緊急調査 文字化原稿 （正） 又 は 副 調査地点 ○○○○	

(3) 文字化原稿の用紙

- | | | |
|------------|---|--------|
| ① 録音内容記録票 | } | 別紙のとおり |
| ② 方言資料割付用紙 | | |
| ③ 方言調査解説用紙 | | |

(用紙の印刷発注については、国語課でまとめて行いますので必要部数を御連絡ください。)

4 文字化原稿の記入について (国語研・言語変化研究部でまとめたもの)

- (1) 原稿用紙には、「方言資料割付用紙」と「方言資料解説用紙」の2種類があり、「割付用紙」には録音内容の文字化と標準語訳を、「解説用紙」には収録地点の概観、収録方言の特色、表記法についての説明、文字化内容についての注記などを記入する。
- (2) 原稿用紙への記入は黒インキを用いる。(青インキは不可。)

割付用紙への記入

- ① 割付用紙の第1ページには、タイトル(録音内容を代表するようなもの)、話し手の略号・氏名・性・生年を記入し、一段あけて、録音内容の文字化・標準語訳を記入する。(記入例参照)
- ② 割付用紙の左端の「[]」には話し手の略号を記入する。
- ③ カウンターつきの録音機を使用した場合は、その番号を所要所に鉛筆で薄く記入しておいていただきたい。
- ④ 文字化の表記について

ア 文字化は文節単位に分ち書きとし、各センテンスの末尾に句点「。」、「,」を打つ。読点は文字化部分には原則として付けない。なお、談話文における文の認定は方法的に多くの問題があるが、あくまで便宜的なものとしておく。

イ 改行は話し手が交替した部分で行う。

ウ 文字化は原則として表音のカタカナ表記による。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記を用いてもよい。徹底した音韻(音素)表記は採らない。これは、音韻レベルの表記では捨象されることのある特徴的な方言音声や、自然会話にしばしば現われる無造作な発音、また、標準語的な発音の混入などを、解釈を加えずに、音声学的に記述しようとする意図による。なお、カナはあくまでも簡略音声表記として使用するわけであるから、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲については、解説(表記法の項)で説明しておいていただきたい。

エ 長音、鼻音、あるいは特徴的な方言音声をカタカナによって表わす場合、原則として次の方式によってほしい。

(ア) 長音には「ー」の印を用いる。

例 オハヨー

(イ) ガ行鼻音は、カ° キ° ク° …のように表わす。

例 カカ°ミ [kaŋami] (鏡)

(ウ) 鼻音化には「ン」(上つき小字のン)を用いる。

例 マンド [ma[~]do] (窓)

カンゴ [ka[~]go] (籠) —高知方言などー

(エ) 合拗音の [kwa] [gwa] はクワ、グワのように表わす。

例 クワジ [kwaʒi] (火事) —九州方言などー

(オ) [ʃe] [dʒe] はシェ、ジェのように表わす。

例 シェナカ [ʃenaka] (背中) —九州方言などー

(カ) [ti] [di] はティ、ディ, [tu] [du] はトゥ、ドゥのように表わす。

例 トウキ [tuki] (月) —高知方言などー

(キ) [ɸa] [ɸi] [ɸe] …はファ、フィ、フェのように表わす。

例 フェンビ [ɸe[~]bi] (蛇) —奥羽方言などー

(ク) [je] の音はイエで表わす。

例 イェダ [jeda] (枝) —九州方言などー

(ケ) [æ] [kæ] [sæ] …はアエ、カエ、サエのように表す。

例 アカエー [akæ:] (赤い) —岡山方言などー

(コ) [ɛ] [kɛ] [sɛ] …はエア、ケア、セアのように表わす。

例 アゲア [agɛ] (赤い) —奥羽方言などー

上に示した以外の特殊な音声の表記は報告者が適宜くふうするか、あるいは、一般的な字母を使用しておき、そのつど注記欄で説明する。

例 キモノ^(注)→^注 [kɕimono]

オ アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含め、担当者にまかせる。

カ 発音や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には _____ 線を付けておく。

例 カステクレアー

キ 幾様にも聞こえる場合には仮にそのうちのひとつを _____ 線付きで記述し、他の「聞こえ」を記述欄に記す。

例 カステクレアー^(注)→^注 「カステクロエ」または

「カステクロヤ」とも聞こえる。

ク 聴き取りが困難な箇所はなるべく話者や現地協力者にあたって確かめる。ただし、最終的には文字化担当者がそのように聞こえると判定した結果を記述する。話者などが主張する(意識する)発言内容と録音された音声の「聞こえ」とが一致しない、すなわち、話者が主張するようにはどうしても聴き取れない場合もありうるが、このような場合には、文字化担当者に「聞こえる音声」を _____ 線付きで記述し、話者などが主張する内容は注記欄に記す。

例 ボカー^(注)→^注 話者は「ボクワ」と言っていると主張。

ケ 最終的に聴き取り不能の箇所には、_____ 線のみを記しておく。

⑤ 言いよどみ、言いかさなり、言いなおし、笑い声など。

ア 言いよどみは、その末尾に…線を付ける。

例 オフロ サキカ。 タベルノ サキ…。

イ 発言の途中で他の者が口をはさんだ場合には、次のように () を利用し、発言

が重複する部分に 線を付ける。

例 A ヒルマ^ママデ マズ スコ^トモ オエッカラッテ

(B ンダケンド オレ^ァー) アト スク^イ モツテクッカラ

ウ 重複部分が長い場合や、一人の発言が終わらないうちに他の者が話しはじめたような場合には、改行して、重複部分に 線を付ける。

例 A アー パサマ オチャ ダシェ マズ。 チョイット
ナカ^ス キター。

B イヤ イソカ^ス スィンダテ キョーノー。

エ 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分に××××を付ける。

例 アノー ワズカナ ゴ ゴジュー

×× ×××××

ゴジューエングラエー^スジャツカナー。

オ 笑い声などは文字化本文中に（ ）に入れて記す。

例 ウレシーナー (笑)

- ⑥ 標準語訳は漢字平がなまじりの表記とし、それぞれの文節に対応する逐語訳を心がける。逐語訳であるために全体の文脈がつかみがたいと判断される場合には、注記欄でさらに説明する。文末詞や待遇表現などは訳のつけかたがむずかしいが、標準語訳はあくまでも内容理解の手がかりと考え、訳しかたが問題となるような箇所については、なるべく詳しい注記を付けるよう心がける。

- ⑦ 注記について

ア 「割付用紙」には注記番号のみを（ ）に入れて記し、注記内容は「解説用紙」に記入する。

イ 注記は、音声の特徴、基本的な語形（無造作な発音により語形が崩れている場合など）、方言形の意味・用法・語源、民俗的事象（話題にのぼった民具・行事など）、文脈のねじれ、標準語訳についての補足、話し手の動作（うなずき・手ぶりなど）などについて行う。とくに、方言形の意味・用法については、できるだけ多くの箇所に注を付けてほしい。

解説用紙への記入

解説用紙には次の事項を記入する。

A 収録地点とその方言について

1 地点名

2 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）

3 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

② 音韻上の特色（モーラ表・音声の特徴）

③ 文法上の特色（要点のみ。簡条書き）

4 その他（地点選定の理由、協力者の氏名、協力内容など）

B 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての

説明，判断に迷った微妙な音声の処理原則など。

C 収録内容の概説，注記など

- 1 タイトル（「割付用紙」の冒頭に記したもの）
- 2 録音年月日
- 3 録音場所
- 4 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴（方言保有度・話し好きかどうか・早口か等）など。（話し手の性・生年は割付用紙にも記入）
- 5 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

なお，A，B，Cはそれぞれページを改めて記入する。Cはタイトルが変わる際に改ページを行う。

「全国方言談話データベース」について

「各地方言収集緊急調査」報告資料は、方言の使用実態を解明する貴重なデータであるとともに、急速に失われつつある各地の伝統的方言を、文化財として記録・保存するという意味においても意義のあるものである。

いくつかの教育委員会が、この資料の一部を用いて、独自に報告書を刊行している。ただし、市販されているわけではないので、一般には入手しにくい。また、その形態は印刷物であり、電子化された文字化テキストを備えたものはない。録音テープを添付しているものも少数である。その他の資料については、未公開であった。

その後、「各地方言収集緊急調査」報告資料は、文化庁から国立国語研究所に移管された。国立国語研究所では、受け継いだ録音テープ・文字化原稿を有効に利用するために、膨大な報告資料を整備して、方言談話の大規模なデータベースを作成し、公開するという計画を開始した。

平成8(1996)～12(2000)年度には、一般研究課題「方言録音文字化資料に関する研究」において、報告資料の一部を用いたケーススタディ的研究を行った。担当研究室は、情報資料研究部第二研究室(当時)、担当者は、井上文子であった。所外研究委員として、真田信治氏(大阪大学大学院文学研究科、元国立国語研究所)に委嘱を行った。

平成13(2001)年度からは、「日本語情報資源の形成と共有のための基盤研究」というプロジェクトの一環として、全国方言談話データベースの作成と公開に取り組んでいる。担当部門・領域は、情報資料部門第二領域、担当者は、井上文子(情報資料部門第一領域)である。所外研究委員として、佐藤亮一氏(東京女子大学現代文化学部、元国立国語研究所)、江川清氏(広島国際大学人間環境学部、元国立国語研究所)、田原広史氏(大阪樟蔭女子大学学芸学部)、真田信治氏(大阪大学大学院文学研究科、元国立国語研究所)に委嘱を行っている。

その一方で、平成9(1997)～13(2001)年度には、作成データベース名「全国方言談話資料データベース」、作成委員会名「全国方言談話資料データベース作成委員会」として、また、平成14(2002)年度からは、作成データベース名「全国方言談話データベース」、作成委員会名「全国方言談話データベース作成委員

会」として、科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）の交付を受け、音声資料、文字化資料を電子化する作業を進めている。作成委員長は、佐藤亮一氏（東京女子大学現代文化学部、元国立国語研究所）であり、「各地方言収集緊急調査」当時、国立国語研究所言語変化研究部第一研究室長として、調査の計画段階から指導・助言にあたり、調査および報告資料の全体像を把握している。作成委員としては、江川清氏（広島国際大学人間環境学部、元国立国語研究所）、田原広史氏（大阪樟蔭女子大学学芸学部）、井上文子（国立国語研究所情報資料部門第一領域）が担当している。平成13(2001)年度には、「全国方言談話データベース」の公開を開始した。

なお、このデータベースの作成事業で受けた、科学研究費研究成果公開促進費（データベース）は下記のとおりである。

年度	課題番号	補助金交付額
平成9年度	57	1,800,000円
平成10年度	64	1,800,000円
平成11年度	501027	1,800,000円
平成12年度	128032	2,800,000円
平成13年度	138031	4,600,000円
平成14年度	148034	5,200,000円
平成15年度	158043	6,100,000円

「各地方言収集緊急調査」報告資料については、日本全国の47都道府県でそれぞれ5地点程度、計200地点あまりにおける、約4000時間にも及ぶ方言談話の録音テープと、その一部を文字化した原稿が残されている。昭和52(1977)～60(1985)年度当時の老年層話者の自然談話が中心であるので、現在においては急速に失われつつある伝統的方言が比較的に残されているものであると考えられる。

これらの報告資料をすべてデータベース化するのが理想ではあるが、膨大な資料を一気にデータベース化するのは困難であるので、段階的に公開を行うことにする。

今回刊行する『全国方言談話データベース』では、まず、第一段階として、

各都道府県につき1地点、計47地点の老年層男女の自然会話を選び、その地の伝統的方言がもっともよく現れていると思われる部分を30～50分程度データベース化した。

データベース化のためには、次のような作業が必要であった。

- ①録音テープには、正が1本、副が2本ある。正は収録したオリジナルのテープ、副は正より文字化部分のみを編集したもので、いずれも60分または90分のカセットテープである。正をデジタル化し、複製を作成する。
- ②文字化原稿には、正が1部、副が2部ある。正は、文化庁指定のB4判の用紙を使用した手書き、副は正のコピーである。正の文字化、共通語訳をパソコンにテキストデータとして入力する。この時点では、できる限り正の文字化原稿に忠実に行う。
- ③文字化原稿の収録地点、話者、収録内容、状況記録などの確認をし、その文字化原稿に対応する録音テープの録音状態などの確認を行う。
- ④今回刊行するものでは、老年層男女の自然談話のうち、各都道府県につき1地点30～50分をめやすとして、データベース化部分に選定する。
- ⑤データベース化する部分の文字化テキストと、それに対応するデジタル録音音声を抽出する。
- ⑥音声データをもとに、文字データの明らかな誤りなどを修正する。原則としては、原資料の文字化原稿に従って行いが、見やすさを優先させたり、全体の統一を図ったりするため、必要に応じて変更を加える。この作業は、その地域の方言を専門とする研究者に依頼する。
- ⑦記号の種類と使い方、句読点、分かち書きなどについて、凡例を作成する。『全国方言談話データベース』における表記・形式は、見やすさや全体の統一のため、必要に応じて変更を加えているので、「各地方言収集緊急調査」当時のマニュアルに記載されているものとは部分的に違いが生じている。
- ⑧文字化データに沿う形で、注記を整える。原則としては原資料に従って行いが、場合に応じて最低限の変更を加える。
- ⑨収録地点の概観、方言の特色などの解説については、原則としては原資料に従って行いが、全体の統一を図るため、表記・章立てなどについて、最低限の変更を加える。

- ⑩調査の概要，収録した談話内容・地点・場所・日時などの情報，話者の性別・年齢・職業などの情報をまとめる。
- ⑪校正を行った文字データをもとに，文字化と共通語訳を２段組に対照させたファイルを作成する。さらに，それを pdf ファイルにする。
- ⑫文字化と共通語訳を２段組に対照させたファイルを用いて，文字化の text ファイル，共通語訳の text ファイルを作成する。
- ⑬音声データは，デジタル化した後，サンプリングレート，音声ファイル形式などの調整を行い，音声 wave ファイルを作成する。そして，それを文字化と共通語訳を２段組に対照させたページに従って，ページ単位に切り，文字化・共通語訳の pdf ファイルにリンクさせる。
- ⑭CD-ROM は，データベースソフトを利用して，文字化・共通語訳の文字列による検索，話者による検索などができるようにする。
- ⑮CD には，トラックに区切った談話全体の音声を収録する。
- ⑯録音テープ・文字化原稿が所在不明の地点については，必要に応じて，現地に赴き，収録担当者・教育委員会・図書館・関係者の協力を仰ぎながら，入手に努める。
- ⑰「各地方言収集緊急調査」の話者・収録担当者・文字化担当者・解説担当者などには，可能な限り，文書でデータ公開の通知と確認を行う。
- ⑱作成過程において，ある程度のデータが蓄積された段階で，CD-ROM，または，音声はカセットテープ・MD，文字はFDを媒体とした試作版を作成し，モニターに依頼して意見・要望を求め，データベースに反映させる。
- ⑲検索情報の整備，検索マニュアル，利用規程などの作成を行う。

『全国方言談話データベース』全20巻の各巻は，冊子，CD-ROM，CD から成り，方言談話の音声（wave ファイル），文字化（カタカナ表記，text ファイル），共通語訳（漢字かなまじり表記，text ファイル），文字化・共通語訳を２段組に対照させたもの（冊子，pdf）などを収録している。従来にはあまりなかった，音声，文字化，共通語訳の電子化データを備えているので，研究や教育のために加工して，自由に検索することができるという特徴がある。

刊行にあたっては，国立国語研究所における『全国方言談話データベース』

刊行物検討委員会で最終的なチェックを行った。委員長として、熊谷康雄（情報資料部門），委員として、熊谷智子（研究開発部門第二領域），三井はるみ（研究開発部門第二領域），井上優（日本語教育部門第一領域），井上文子（情報資料部門第一領域）が担当した。

なお，刊行計画は下記のとおりとなっている。

書名：『国立国語研究所資料集 13-1～20 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全20巻

各巻：冊子1冊 A5判 約200ページ，CD-ROM1枚，CD1枚

巻数	巻名	ISBN	刊行順
第1巻	北海道・青森	4-336-04361-2	15
第2巻	岩手・秋田	4-336-04362-0	16
第3巻	宮城・山形・福島	4-336-04363-9	17
第4巻	茨城・栃木	4-336-04364-7	4
第5巻	埼玉・千葉	4-336-04365-5	5
第6巻	東京・神奈川	4-336-04366-3	6
第7巻	群馬・新潟	4-336-04367-1	7
第8巻	長野・山梨・静岡	4-336-04368-X	12
第9巻	岐阜・愛知・三重	4-336-04369-8	13
第10巻	富山・石川・福井	4-336-04370-1	14
第11巻	京都・滋賀	4-336-04371-X	1
第12巻	奈良・和歌山	4-336-04372-8	2
第13巻	大阪・兵庫	4-336-04373-6	3
第14巻	鳥取・島根・岡山	4-336-04374-4	11
第15巻	広島・山口	4-336-04375-2	10
第16巻	香川・徳島	4-336-04376-0	8
第17巻	愛媛・高知	4-336-04377-9	9
第18巻	福岡・佐賀・大分	4-336-04378-7	18
第19巻	長崎・熊本・宮崎	4-336-04379-5	19
第20巻	鹿児島・沖縄	4-336-04380-9	20

国立国語研究所資料集13-17

全国方言談話データベース
日本のふるさとことば集成

第17巻 愛媛・高知

2003年9月30日 発行

編集：国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14

TEL：03-3900-3111（代表）

FAX：03-3906-3530（代表）

URL：<http://www.kokken.go.jp>

本書の市販品発行所

発行：国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

TEL：03-5970-7421（代表）

FAX：03-5970-7427（営業）

URL：<http://www.kokusho.co.jp>

（平15-7）